松山市文化財調査報告書 152

樽味立添遺跡 4 次調査
樽味高木遺跡 15 次調査

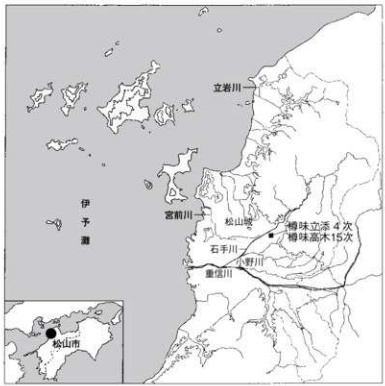
2011

松山市教育委員会

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

樽味立添遺跡 4 次調査
樽味高木遺跡 15 次調査



2011

松山市教育委員会
財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

序

本書は、民間の宅地開発に伴い実施した二遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。遺跡が所在する松山市樽味地区では、西日本有数の規模を誇る弥生時代終末から古墳時代初頭の大型建物３棟が発見された樽味四反地遺跡をはじめ弥生時代末から古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物と、古代の自然流路のほか、弥生時代から近世までの遺物が数多く発見されており、松山平野内でも有数の遺跡地帯として知られています。

樽味立添遺跡４次調査では平安時代の自然流路を検出し、流路内からは土師器や須恵器のほかに瓦や緑釉陶器が出土しました。樽味地区における古代の遺跡は、調査地南西部にある樽味四反地遺跡１次調査や５次調査において飛鳥時代から平安時代の流路が検出され、流路内からは官衙や寺院の存在を示唆する遺物が出土しています。今回検出した流路内からも同様の遺物が出土しており、樽味地区における古代集落の様相や環境復元をするうえで貴重な手がかりを得ることができました。また、樽味高木遺跡１５次調査では弥生時代から古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物をはじめ数々の遺構や遺物を検出しました。このうち、古墳時代の遺物には朝鮮半島系の土器が含まれており、当概期における朝鮮半島と松山との交流が知れる貴重な資料といえます。

このような成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力のたまものと心より感謝申し上げる次第です。

本書が、埋蔵文化財の保護思想の啓発や調査研究等にご活用いただければ幸いに存じます。

平成23年3月31日

松山市教育長　山内　泰

例　言

1．本書は、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが、平成18・19年度に松山市樽味地区内で実施した宅地造成工事と共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本報告書の遺構は、呼称を略号で記述した。ＳＢ：竪穴住居、掘立：掘立柱建物、ＳＤ：溝、ＳＲ：自然流路、ＳＫ：土坑、ＳＰ：柱穴。

3．遺構の製図および遺物の実測・製図は、水本完児の指示のもと、木西嘉子、西本三枝、平岡直美、山下満佐子が行った。

4．遺物の復元は、青野茂子、松本美代子、石川千代美が行った。

5．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

6．本書に使用した方位は、すべて真北である。

7．写真図版は遺構撮影を水本と大西朋子が行い、遺物撮影および図版作成は大西が行った。

8．本書の執筆と編集は水本が担当し、宮内慎一と平岡、山下の協力を得た。浄書は平岡が担当した。

9．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。

10．製版・写真図版
　製版　白黒図版－175線
　印刷　オフセット印刷
　用紙　本　　文　マットコート
　　写真図版　マットコート
　製本　アジロ綴じ

本 文 目 次

第1章　はじめに ……〔水　本〕…… 1
1．調査に至る経緯
2．調査の経緯
3．刊行組織

第2章　立地・環境 ……〔水　本〕…… 3
1．立　地
2．環　境

第3章　檜味立添遺跡4次調査……〔水　本〕…… 9
1．調査の経緯　（1）調査に至る経緯　（2）調査の経緯　（3）調査組織
2．層　位　（1）基本層位　（2）検出遺構・遺物
3．遺構と遺物　（1）竪穴住居　（2）掘立柱建物　（3）溝　（4）自然流路
（5）土　坑　（6）その他の遺構と遺物
4．まとめ

第4章　檜味高木遺跡15次調査 ……〔水　本〕…… 51
1．調査の経緯　（1）調査に至る経緯　（2）調査の経緯　（3）調査組織
2．層　位　（1）基本層位　（2）検出遺構・遺物
3．遺構と遺物　（1）竪穴住居　（2）掘立柱建物　（3）土　坑
（4）その他の遺構と遺物
4．まとめ

第5章　調査の成果と課題……〔水　本〕…… 95

挿 図 目 次

第２章　立地・環境

第１図　松山平野の地形概要図（縮尺１/200,000）…… 3
第２図　遺跡分布図（縮尺１/3,000）…… 7

第３章　樽味立添遺跡４次調査

第３図　調査地測量図（縮尺１/400）…… 10
第４図　北壁・東壁土層図（縮尺１/60）…… 12
第５図　南壁・西壁土層図（縮尺１/60）…… 13
第６図　遺構配置図（縮尺１/150）…… 14
第７図　ＳＢ１・２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/４・１/３・１/２）…… 17
第８図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/４・１/３）…… 18
第９図　掘立２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/４・１/３）…… 19
第10図　ＳＤ１測量図（縮尺１/60）…… 20
第11図　ＳＤ１出土遺物実測図（１）（縮尺１/４・１/３）…… 22
第12図　ＳＤ１出土遺物実測図（２）（縮尺１/４・１/３）…… 23
第13図　ＳＲ１断面図（縮尺１/80）
第14図　ＳＲ１出土遺物実測図（１）（縮尺１/３）…… 25
第15図　ＳＲ１出土遺物実測図（２）（縮尺１/４・１/３）…… 26
第16図　ＳＲ１出土遺物実測図（３）（縮尺１/３）…… 27
第17図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/４・１/３）
第18図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）…… 28
第19図　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）…… 31
第20図　ＳＫ４・５・６測量図（縮尺１/60）…… 32
第21図　ＳＫ７測量図（縮尺１/60）…… 33
第22図　ＳＫ７出土遺物実測図（縮尺１/４・１/３）…… 34
第23図　柱穴出土遺物実測図（縮尺１/４・１/３）…… 35
第24図　包含層出土遺物実測図（１）（縮尺１/３）…… 36
第25図　包含層出土遺物実測図（２）（縮尺１/３）…… 37
第26図　包含層出土遺物実測図（３）（縮尺１/４・１/３）…… 38
第27図　地点不明出土遺物実測図（縮尺１/３）…… 39

第４章　樽味高木遺跡15次調査

第28図　調査地測量図（縮尺１/500）…… 52
第29図　北壁・東壁土層図（縮尺１/60）…… 54
第30図　南壁・西壁土層図（縮尺１/60）…… 55

第31図　遺構配置図（縮尺1/150）…… 56
第32図　SB1測量図（縮尺1/60）…… 57
第33図　SB1出土遺物実測図（縮尺1/4・1/3）…… 58
第34図　SB2測量図（縮尺1/60）…… 59
第35図　SB2出土遺物実測図（1）（縮尺1/4・1/3）…… 61
第36図　SB2出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 62
第37図　SB2出土遺物実測図（3）（縮尺1/4・1/3）…… 63
第38図　SB3測量図（縮尺1/60）…… 64
第39図　SB3炉①測量図（縮尺1/20）…… 65
第40図　SB3炉②測量図（縮尺1/20）
第41図　SB3出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 66
第42図　SB3出土遺物実測図（2）（縮尺1/3・1/1）…… 67
第43図　SB4測量図（縮尺1/60）…… 68
第44図　SB5測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60・1/4）…… 69
第45図　SB6測量図（縮尺1/60）…… 70
第46図　掘立1測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60・1/3）…… 71
第47図　掘立2測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60・1/4・1/3・1/1）…… 72
第48図　掘立3測量図（縮尺1/60）…… 73
第49図　掘立3出土遺物実測図（縮尺1/4・1/3）…… 74
第50図　SK1・2測量図（縮尺1/60）…… 75
第51図　柱穴出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）…… 77
第52図　柱穴出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 78
第53図　包含層出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 79
第54図　包含層出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）…… 80
第55図　地点不明出土遺物実測図（縮尺1/4・1/3・1/1）…… 81

表　目　次

第1章　はじめに
表1　調査地一覧 …… 1

第2章　立地・環境
表2　樽味高木遺跡・樽味立添遺跡一覧 …… 8

第3章　樽味立添遺跡4次調査
表3　竪穴住居一覧 …… 41

表 4　掘立柱建物一覧 …… 41
表 5　溝一覧
表 6　自然流路一覧
表 7　土坑一覧
表 8　柱穴一覧
表 9　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）…… 42
表 10　ＳＢ２出土遺物観察表（土製品）
表 11　ＳＢ２出土遺物観察表（石製品）
表 12　掘立１出土遺物観察表（土製品）…… 43
表 13　掘立２出土遺物観察表（土製品）
表 14　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）
表 15　ＳＲ１出土遺物観察表（土製品）…… 44
表 16　ＳＲ１出土遺物観察表（石製品）…… 46
表 17　ＳＲ１出土遺物観察表（金属製品）
表 18　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）
表 19　ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）…… 47
表 20　ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）
表 21　ＳＫ３出土遺物観察表（石製品）
表 22　ＳＫ７出土遺物観察表（土製品）
表 23　柱穴出土遺物観察表（土製品）…… 48
表 24　包含層出土遺物観察表（土製品）
表 25　包含層出土遺物観察表（石製品）…… 50
表 26　包含層出土遺物観察表（金属製品）
表 27　地点不明出土遺物観察表（土製品）
表 28　地点不明出土遺物観察表（金属製品）

第４章　櫛味高木遺跡 15 次調査

表 29　竪穴住居一覧 …… 83
表 30　掘立柱建物一覧
表 31　土坑一覧
表 32　柱穴一覧
表 33　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）…… 86
表 34　ＳＢ２出土遺物観察表（土製品）…… 87
表 35　ＳＢ２出土遺物観察表（石製品）…… 88
表 36　ＳＢ３出土遺物観察表（土製品）
表 37　ＳＢ３出土遺物観察表（金属製品）…… 90
表 38　ＳＢ３出土遺物観察表（玉類）
表 39　ＳＢ５出土遺物観察表（土製品）

表40　掘立1出土遺物観察表（土製品）…… 90
表41　掘立2出土遺物観察表（土製品）
表42　掘立2出土遺物観察表（玉類）
表43　掘立3出土遺物観察表（土製品）
表44　柱穴出土遺物観察表（土製品）…… 91
表45　包含層出土遺物観察表（土製品）…… 92
表46　包含層出土遺物観察表（金属製品）…… 93
表47　地点不明出土遺物観察表（土製品）
表48　地点不明出土遺物観察表（玉類）

写真図版目次

第3章　櫓味立添遺跡4次調査

図版1　1．調査前全景（北西より）
　　2．調査区完掘状況（南西より）
図版2　1．西半部遺構検出状況（南東より）
　　2．東半部遺構検出状況（南西より）
図版3　1．西半部遺構完掘状況（南より）
　　2．東半部遺構完掘状況（南西より）
図版4　1．ＳＢ1・2完掘状況（東より）
　　2．掘立1完掘状況（南西より）
図版5　1．ＳＤ1完掘状況（北東より）
　　2．ＳＫ1遺物出土状況（南より）
図版6　1．ＳＫ3遺物出土状況（北東より）
　　2．ＳＫ7完掘状況（東より）
図版7　1．出土遺物〔ＳＢ1、ＳＢ2、ＳＤ1〕
図版8　1．ＳＲ1出土遺物(1)
図版9　1．出土遺物〔ＳＲ1(2)、ＳＫ3、ＳＫ7〕
図版10　1．出土遺物〔包含層、地点不明〕

第4章　櫓味高木遺跡15次調査

図版11　1．調査前全景（南西より）
　　2．作業風景（東より）
図版12　1．遺構検出状況(1)（東より）
　　2．遺構検出状況(2)（西より）
図版13　1．遺構完掘状況（東より）

２．ＳＢ１完掘状況（北東より）
図版 14　１．ＳＢ２検出状況（北より）
２．ＳＢ２完掘状況（東より）
図版 15　１．ＳＢ２遺物出土状況（東より）
２．ＳＢ３完掘状況（北東より）
図版 16　１．ＳＢ５・掘立１完掘状況（東より）
２．掘立２完掘状況（東より）
３．掘立３完掘状況（東より）
図版 17　１．出土遺物〔ＳＢ１、ＳＢ２〕
図版 18　１．出土遺物〔ＳＢ３、掘立２〕
図版 19　１．出土遺物〔掘立３、柱穴、包含層 (1)〕
図版 20　１．出土遺物〔包含層 (2)、地点不明〕

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

今回報告する樽味立添遺跡4次調査と樽味高木遺跡15次調査は、民間の宅地開発に伴い実施した埋蔵文化財の発掘調査である。発掘調査は、文化財保護法第93条の届出を受け、愛媛県教育委員会が行った指示に基づき発掘調査を実施した。なお、両遺跡は松山市が指定する周知の埋蔵文化財包蔵地『№81 樽味遺物包含地』内に所在する。

樽味立添遺跡は昭和63年度からこれまでに4度の発掘調査（1次～4次調査）が実施され、主に弥生時代後期から古墳時代後期までの竪穴住居をはじめとする集落関連遺構や遺物が多数確認されている。このうち、樽味立添遺跡1次調査では、包含層資料であるが「貨泉」が出土している。また、樽味高木遺跡は16度の発掘調査（1次～16次調査）が実施され、弥生時代中期から古墳時代後期までの竪穴住居148棟を含む数多くの集落関連遺構や遺物が確認されている。樽味高木遺跡3次調査では、準構造船を描いた絵画土器が出土しているほか、各調査で検出した竪穴住居では玉類を使用した住居廃絶に伴う祭祀行為が数多く報告されている。

発掘調査は財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が主体となり松山市教育委員会文化財課の協力のもと、平成18年度と19年度に実施した。

2．調査の経緯

調査：樽味立添遺跡4次調査は、平成19年1月9日から2月8日までの間に実施され、弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物のほか、古代の自然流路を検出した。一方、樽味高木遺跡15次調査は平成19年12月4日から平成20年1月31日までの間に実施され、弥生時代終末期の竪穴住居をはじめ、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物など多数の遺構や遺物を検出した。なお、各遺跡の調査場所や調査面積等は表1に記す。

整理：両遺跡の調査では、屋外作業終了後に測量図や記録写真類の整理、及び出土遺物の洗浄や注記、接合作業を行った。本格的な整理作業は平成22年度に行い、遺構図面の作成や出土遺物の実測等を進め、報告書作成作業を行った。

表1　調査地一覧

遺跡名	調査場所	面積（㎡）	調査期間
樽味立添遺跡 4次調査	松山市樽味二丁目18番の一部	約174.0	2007（平成19）年1月9日 ～同年2月8日
樽味高木遺跡 15次調査	松山市樽味二丁目90-2の一部	169.5	2007（平成19）年12月4日 ～2008（平成20）年1月31日

3．刊行組織

平成22年度報告書刊行事業（平成22年4月1日現在）

松山市教育委員会	教育長	山内　泰
事務局	局長	藤田　仁
	企画官	勝谷　雄三
	企画官	青木　茂
文化財課	課長	駒澤　正憲
	主幹	森　正経
	副主幹	三好　博文
財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	一色　哲昭
事務局	局長	松澤　史夫
	次長	砂野　元昭
施設利用推進部	部長	中越　敏彰
埋蔵文化財センター	所長	重松　佳久
	調査担当リーダー	栗田　茂敏
（編集担当）	主任	水本　完児
（写真担当）	調査員	大西　朋子

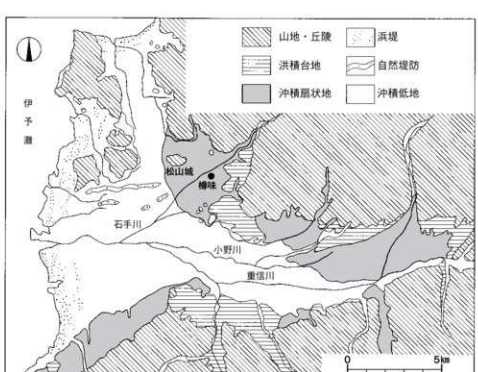
第２章　立地・環境

１．立　地

松山平野は四国山地北西部に位置し、石手川や重信川などの大小河川で形成された複合扇状地の平野である。このうち、調査地北側を流れる石手川は高縄山から西方に流れ、途中に重信川と合流する。石手川が形成した扇状地は、松山市石手付近（標高 50 m）を扇頂とし南西方向に広がりをみせ、その範囲は半径約 4 km、標高 20 mの地点まで含んでいる。石手川扇状地は、山麓裾の松山市正円寺や畑寺にかけての古期扇状地面と、道後、中村に広がる新期扇状地面、さらには石手川南岸東側に広がる洪積世の段丘化した低位段丘面とに区分される。このうち、調査地は石手川南岸新期扇状地面に立地している。なお、調査地が所在する扇状地面は、今から約 23,000 年前、姶良 Tn 火山灰の降下、堆積時には既に段丘化していたものと推測されている。近年の発掘調査において、樽味遺跡１次調査や樽味四反地遺跡１次調査で、２次的な堆積状況の火山灰が検出されているほか、同じ扇状地面にある東本遺跡４次調査からも同様の火山灰が検出されている。

一方で、洪積世の最終氷期、約２万年～ 1.8 万年前には、石手川は道後城北地区を通り、松山市堀江地区へ流化していたものと推定されており、石手川南岸にある樽味地区では洪積世最末期から完新世にかけて石手川北岸に比べ、安定した地形を形成していたものと考えられている。

両遺跡の所在する桑原地区は、石手川がつくる扇状地の扇央、標高 39 ～ 40 mに立地しており、樽味遺跡をはじめとして弥生時代から中世にいたる遺跡が数多く存在している。



第１図　松山平野の地形概要図

2．環　境

両遺跡周辺には、樽味遺跡をはじめとして数多くの遺跡が存在している。主な遺跡について、その概要を時代別にまとめる。

旧石器時代

松山平野においては、旧石器時代の明確な遺構は確認されていない。経石山古墳からはスクレーパーや楔形石器、桑原西稲葉遺跡２次調査では角錐状石器、樽味四反地遺跡６次調査や東本遺跡４次調査ではナイフ形石器などがある。また、姶良 Tn 火山灰（AT 火山灰）の２次堆積では、樽味遺跡１次調査、樽味四反地遺跡１次調査、枝松遺跡３次調査などがあり、姶良 Tn 火山灰（AT 火山灰）の１次堆積では、東本遺跡４次調査がある。

縄文時代

東本遺跡４次調査からは、鬼界アカホヤ火山灰（6,300 年前）の堆積が確認され、堆積層直上からは槍先形石器、石鏃、スクレーパーなどの石器類が出土しており、草創期から早期に時期比定される。樽味立添遺跡３次調査や東野森ノ木遺跡２・４次調査からは晩期の貯蔵穴数基が検出されており、生活関連遺構の初現期を考える上で貴重な資料である。

弥生時代

前期から中期初頭にかけては樽味遺跡１・５次調査から竪穴住居や土坑などが検出されており、愛媛大学農学部から西側にかけて当該期の集落が展開していたことが窺える。また、樽味立添遺跡３次調査や樽味四反地遺跡７次調査からは、集落の構造解明に重要な役割を持つ大溝や小溝が検出されている。前期末～中期初頭では、樽味四反地遺跡 17 次調査で長方形土坑を検出したほか、樽味高木遺跡 12 次調査で楕円形周溝を検出した。中期後半では、樽味高木遺跡 13 次調査で隅丸方形土坑１基を検出した。土坑内より伐採斧などが出土し、土坑の性格は貯蔵穴の可能性がある。また、樽味四反地遺跡 14 次調査で楕円形土坑を検出した。中期後半～後期初頭では、樽味四反地遺跡 17 次調査で円形竪穴住居を検出したほか、樽味高木遺跡 12 次調査で円形竪穴住居を検出した。住居内より磨製石鏃が２点出土し、北部九州の製作技術の伝播を考える上で貴重な資料である。また、樽味高木遺跡 12 次調査で方形竪穴住居、円形竪穴住居、隅丸方形住居、長方形土坑を検出している。中期後葉から後期は遺跡の数が急増し、樽味遺跡１次調査、樽味高木遺跡２次調査や樽味四反地遺跡２～５次調査、樽味立添遺跡１次調査で円形及び方形竪穴住居や溝などが検出されている。また、樽味高木遺跡３次調査では土坑を検出している。後葉から終末期では竪穴住居の検出事例が増加すると共に、他地域との交流が知れる貴重な資料が数多く確認されている。後期後葉では、樽味立添遺跡や樽味四反地遺跡、樽味高木遺跡のほか、扇状地南側に所在する桑原高井遺跡１次調査や東本遺跡２・４・５次調査、枝松遺跡３・５次調査において竪穴住居が多数確認されている。特に、東本遺跡で検出した竪穴住居のうち、円形を呈する住居は直径８ｍを超える大型住居で、住居内からは鉄鏃や鉄斧などの鉄製品が多く出土することから、鍛冶関連の遺構である可能性が示唆されている。このほか、東本遺跡４次調査検出のＳＢ 203 号住居からは破鏡、包含層資料ではあるが樽味立添遺跡１次調査からは中国銭である『貨泉』、樽味高木遺跡３次調査では準構造船が描かれた絵画土器片などが出土しており、他地域との交流を知る貴重な考古資料が注目される。後期後半では、樽味四反地遺跡 17 次調査で長方形土坑を検出した。

古墳時代

古墳時代初頭では、3棟の超大型建物が注目されている。平成8年度に実施した樽味四反地遺跡6次調査において、床面積約130㎡を測る総柱構造の床束式建物が発見された。平成15年度に実施した樽味四反地遺跡8次調査では床面積160㎡前後を測る3棟のうち最大規模の建物が発見された。また平成17年度には樽味四反地遺跡13次調査にて3棟目の大型建物が確認され、これら3棟の建物群は当該期の首長階層にかかわる特殊建造物群の存在であることが確定されている。このほか、樽味四反地遺跡18次調査では方形竪穴住居と大型掘立柱建物を検出した。前期後半では、樽味四反地遺跡16次調査で方形竪穴住居を検出した。

中期になると、樽味高木遺跡7・8・11次調査、樽味四反地遺跡7～9次調査で竪穴住居が数多く検出され、その中には渡来系遺物の共伴がある。中期初頭～前半では、樽味四反地遺跡16次調査や樽味四反地遺跡17次調査において、方形竪穴住居を検出している。中期前半～中頃では、樽味四反地遺跡17次調査で方形と長方形の竪穴住居を検出した。このうち、方形竪穴住居からは住居南東隅にてカマドを検出している。中期後半では、樽味高木遺跡13次調査で方形竪穴住居を検出した。住居内からは、ガラス玉、臼玉、分銅形土製品、有孔円板などが出土し、装飾品は住居廃絶に伴う祭祀行為の一様相であり、祭祀のあり方を考える上での貴重な資料である。中期末では、樽味高木遺跡13次調査で方形竪穴住居を検出した。中期末～後期では遺跡数が増加し、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡、樽味四反地遺跡などの多くの地点から竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑が数多く検出されている。後期前半では、樽味高木遺跡12次調査で方形竪穴住居と掘立柱建物を検出した。また、樽味四反地遺跡16次調査では、方形竪穴住居と掘立柱建物を検出しているほか、樽味高木遺跡12次調査では方形竪穴住居、掘立柱建物、楕円形土坑、不整楕円形土坑、溝を検出した。後期後半では、樽味四反地遺跡16次調査で隅丸長方形竪穴住居と掘立柱建物を検出したほか、後期末では樽味四反地遺跡17次調査で掘立柱建物を検出した。

古　代

樽味四反地遺跡1・5次調査では平安時代の自然流路が検出され、樽味四反地5次調査では、溝内より円面硯や奈良三彩などが出土している。樽味四反地遺跡17次調査では、飛鳥時代中頃の掘立柱建物を検出している。

中　世

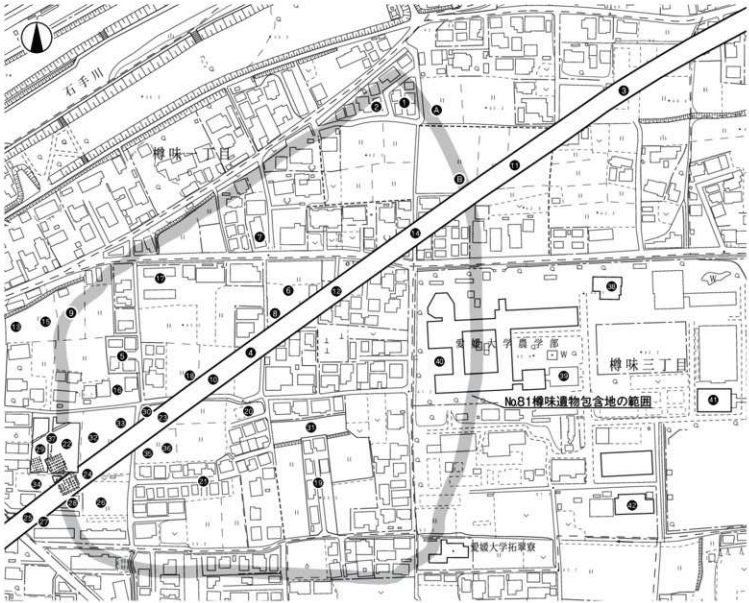
13世紀代では、樽味高木遺跡12次調査で隅丸長方形の土坑墓を検出した。樽味遺跡2次調査では、14～16世紀の集落関連遺構が検出されている。東野森ノ木遺跡1次調査からは掘立柱建物や溝に伴い、土坑内から白磁四耳壺が埋納された状態で検出している。

近　世

16世紀～17世紀では、樽味四反地遺跡17次調査で土坑を検出した。17世紀前半では、樽味高木遺跡12次調査で隅丸長方形の桶棺墓と溝を検出している。

【参考文献】

愛媛県史編纂委員会　1980『愛媛県史　古代Ⅱ・中世』愛媛県
宮本一夫編　1989『鷹ノ子・樽味遺跡』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ
梅木謙一・山之内志郎　1992「樽味四反地遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 26
梅木謙一・宮内慎一　1992「樽味立添遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 26
梅木謙一・宮内慎一　1992「樽味高木遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 26
田崎博之編　1993『樽味遺跡Ⅱ－樽味遺跡２次調査報告－』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ
栗田正芳・河野史知　1994「樽味高木遺跡２次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書 46
梅木謙一・宮内慎一・武正良浩　1994「樽味高木遺跡３次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書 46
梅木謙一・宮内慎一・武正良浩・加島次郎　1994「樽味四反地遺跡４次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書 46
田崎博之編　1997『樽味遺跡３－樽味遺跡３次調査報告－』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅵ
高尾和長編　2002『樽味四反地遺跡５次調査』松山市文化財調査報告書 87
吉田　広　2003「樽味遺跡５次調査」『樽味遺跡Ⅳ』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅸ
小玉亜紀子編　2003『樽味四反地遺跡－６次調査－弥生時代～古墳時代初頭編』松山市文化財調査報告書 94
小玉亜紀子・梅木謙一編　2005『樽味四反地遺跡Ⅱ－６次調査－古墳時代中期～中世編』松山市文化財調査報告書 106
高尾和長編　2007『東野森ノ木遺跡１・２・３・４次調査地、樽味立添遺跡３次調査地、樽味高木遺跡７・８・９･11 次調査地、樽味四反地遺跡７・８・９･11 次調査地、枝松遺跡６次調査地』松山市文化財調査報告書 117
宮内慎一・河野史知　2009『樽味高木遺跡 12 次・13 次調査』松山市文化財調査報告書 131
宮内慎一・永本完児　2009『樽味四反地遺跡 14 次・16 次調査』松山市文化財調査報告書 133
橋本雄一　2010『樽味四反地遺跡 17 次・18 次調査』松山市文化財調査報告書 139



A 樽味立添遺跡4次
B 樽味高木遺跡15次
1 樽味立添遺跡1次
2 樽味立添遺跡2次
3 樽味立添遺跡3次
4 樽味高木遺跡1次
5 樽味高木遺跡2次
6 樽味高木遺跡3次
7 樽味高木遺跡4次
8 樽味高木遺跡5次
9 樽味高木遺跡6次
10 樽味高木遺跡7次
11 樽味高木遺跡8次
12 樽味高木遺跡9次
13 樽味高木遺跡10次
14 樽味高木遺跡11次
15 樽味高木遺跡12次
16 樽味高木遺跡13次
17 樽味高木遺跡14次
18 樽味高木遺跡16次
19 樽味四反地遺跡1次
20 樽味四反地遺跡2-3-4次
21 樽味四反地遺跡5次
22 樽味四反地遺跡6次
23 樽味四反地遺跡7次
24 樽味四反地遺跡8次
25 樽味四反地遺跡9次
26 樽味四反地遺跡10次
27 樽味四反地遺跡11次
28 樽味四反地遺跡12次
29 樽味四反地遺跡13次
30 樽味四反地遺跡14次
31 樽味四反地遺跡15次
32 樽味四反地遺跡16次
33 樽味四反地遺跡17次
34 樽味四反地遺跡18次
35 樽味四反地遺跡19次
36 樽味四反地遺跡20次
37 樽味四反地遺跡21次
38 樽味遺跡1次
39 樽味遺跡2次
40 樽味遺跡3次
41 樽味遺跡4次
42 樽味遺跡5次

第２図　遺跡分布図（S=1：3,000）

表２　樽味高木遺跡・樽味立添遺跡一覧

調　査　名	年度	時　代	遺　構	遺　物	文献
①樽味高木（１次）	S63	弥生～古墳	竪穴･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･石･種	1
②樽味高木（２次）	H3	弥生～中世	竪穴･溝･土坑･経塚･柱穴	弥生･土師･須恵･陶･玉	2
③樽味高木（３次）	H3～4	弥生～古墳	竪穴･掘立･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･石･絵画	2
④樽味高木（４次）	H7	古墳～近世	溝･流路･土坑･欅･柱穴	弥生･土師･須恵･石･玉	3
⑤樽味高木（５次）	H14	弥生～古墳	竪穴･掘立･柱穴	弥生･土師･須恵･石･玉	7
⑥樽味高木（６次）	H14	弥生～古代	竪穴･掘立･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･石	7
⑦樽味高木（７次）	H15	弥生～古墳	竪穴･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･石	4
⑧樽味高木（８次）	H15	弥生～中世	竪穴･掘立･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･石･鉄	4
⑨樽味高木（９次）	H16～17	弥生～古代	竪穴･掘立･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･石	4
⑩樽味高木（10次）	H16	弥生～古墳	竪穴･掘立･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･鉄	8
⑪樽味高木（11次）	H17～18	弥生～中世	竪穴･掘立･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･軟質･石	4
⑫樽味高木（12次）	H17	弥生～中世	竪穴･掘立･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･陶･石･骨	5
⑬樽味高木（13次）	H18	弥生～中世	竪穴･掘立･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･石･玉	5
⑭樽味高木（14次）	H19	弥生～古代	溝･土坑･柱穴	縄文･弥生･土師･須恵･硯	10
⑮樽味高木（15次）	H19	弥生～古墳	竪穴･掘立･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･石･玉	10
⑯樽味高木（16次）	H20	弥生～中世	溝･土坑･柱穴	弥生･土師	11
⑰樽味立添（１次）	S63	弥生～古墳	竪穴･掘立･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･玉･貨泉	1
⑱樽味立添（２次）	H10	古墳～近世	掘立･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･石･鉄･玉	6
⑲樽味立添（３次）	H15～16	縄文～中世	竪穴･掘立･溝･土坑･柱穴	縄文･弥生･土師･須恵･鉄	4
⑳樽味立添（４次）	H18	弥生～古代	竪穴･掘立･溝･土坑･柱穴	弥生･土師･須恵･陶･瓦･鉄	9

〔竪穴：竪穴住居、掘立：掘立柱建物、縄文：縄文土器、弥生：弥生土器、土師：土師器、須恵：須恵器、陶：陶磁器、軟質：軟質土器、絵画：絵画土器、石：石器、鉄：鉄器・鉄滓、玉：臼玉・勾玉・ガラス玉、種：種実〕

【文献】

1　『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書　第26集
2　『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書　第46集
3　『桑原地区の遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書　第58集
4　『東野森ノ木遺跡1･2･3･4次調査地、樽味立添遺跡3次調査地、樽味高木遺跡7･8･9･11次調査地、樽味四反地遺跡7･8･9･11次調査地、枝松遺跡6次調査地』松山市文化財調査報告書　第117集
5　『樽味高木遺跡12次・13次調査』松山市文化財調査報告書　第131集
6　『松山市埋蔵文化財調査年報11』
7　『松山市埋蔵文化財調査年報15』
8　『松山市埋蔵文化財調査年報17』
9　『松山市埋蔵文化財調査年報19』
10　『松山市埋蔵文化財調査年報20』
11　『松山市埋蔵文化財調査年報21』

第３章　樽味立添遺跡４次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2006（平成 18）年５月 11 日、野本フミ子氏より松山市樽味二丁目 18 番地内における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。確認願が提出された申請地の南西側 170 ｍの地点には樽味立添遺跡１次調査地と２次調査地があり、弥生時代から中世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。また、申請地の北東側 200 ｍの地点には樽味立添遺跡３次調査地があり、縄文時代晩期から弥生時代までの集落関連遺構と縄文時代晩期から古墳時代までの遺物が多数確認されている。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、申請地内における埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、2006（平成 18）年５月 30 日に試掘調査を実施することとなった。調査の結果、竪穴住居や土坑、柱穴のほか、弥生土器や土師器、須恵器を含む遺物包含層を確認した。

この結果を受け、文化財課と申請地の両者は遺跡の取り扱いについての協議を重ね、宅地造成工事によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、申請地内における古墳時代から中世までの集落構造解明を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり、2007（平成 19）年１月９日より開始した。

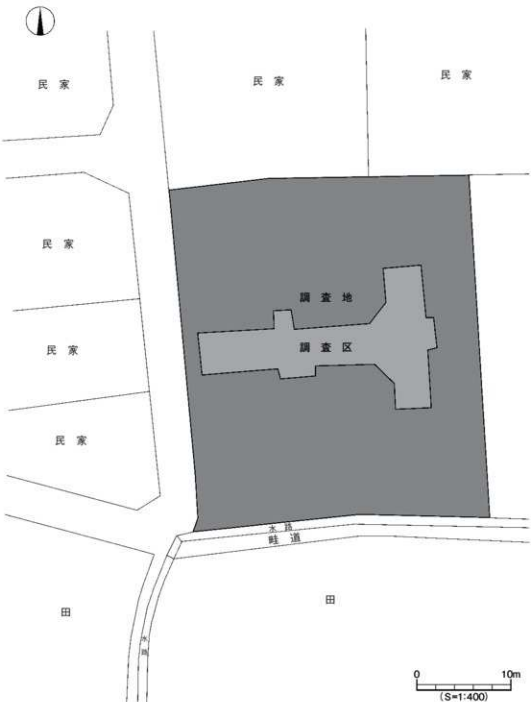
（２）調査の経緯

調査は、2007（平成 19）年１月９日から同年２月８日までの間に屋外調査を実施した。その後、３月８日まで埋文センターにて整理作業を実施した。以下、屋外調査の工程を略記する。

2007（平成 19）年１月９日、申請者の立会いのもとに調査区を設定し、調査を開始する。重機を使用して、表土層を掘削する。１月 11 日、第Ⅵ層上面にて遺構検出作業をし、竪穴住居や溝、土坑等を確認する。１月 15 日、遺構検出状況写真を撮影後、各遺構の掘り下げや測量作業をおこなう。２月２日、高所作業車を用いて遺構完掘状況写真を撮影し、２月７日、重機を使用して調査区の埋め戻しをする。２月８日、発掘用具や機材を撤去して屋外調査を終了する。

（３）調査組織

所 在 地：松山市樽味二丁目 18 番の一部
調査期間：2007（平成 19）年１月９日～同年２月８日
調査面積：約 174.0 ㎡
調査主体：松山市教育委員会
　　財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当：水本完児、宮内慎一



第３図　調査地測量図

2．層　位

（1）基本層位（第4・5図）

調査地は松山平野北東部、石手川左岸の標高42.96～43.16mに立地する。調査以前は水田として利用されていた。調査で確認した土層は、以下の六種類（Ⅰ～Ⅵ層）である。

Ⅰ層：水田耕作に伴う耕作土で、三種類に分層される。

Ⅰ①層：灰色（10Y 6/1）土で調査地ほぼ全域にみられ、層厚6～21cmを測る。

Ⅰ②層：灰色（5Y 6/1）土で調査地ほぼ全域にみられ、層厚2～10cmを測る。

Ⅰ③層：灰黄色（2.5Y 6/2）土で調査地北東部を除く地域にみられ、層厚4～20cmを測る。

Ⅱ層：黄褐色（10YR 5/6）土で水田耕作に伴う床土である。調査地東側を除く地域でみられ、層厚6～22cmを測る。

Ⅲ層：灰黄褐色（10YR 6/2）土で調査地西半部にみられ、層厚8～30cmを測る。本層は、調査地北側から南側に向けて傾斜堆積をなす。本層中からは、少量の土師器片や陶磁器片が出土した。

Ⅳ層：暗褐色（7.5Y 3/3）を呈するシルト層で調査地西半部にみられ、層厚8～40cmを測る。本層は調査地北側から南側に向けて傾斜堆積をなす。なお、自然流路（ＳＲ1）の上面は本層が覆っている。本層中からは、主に古代の土師器片が出土した。

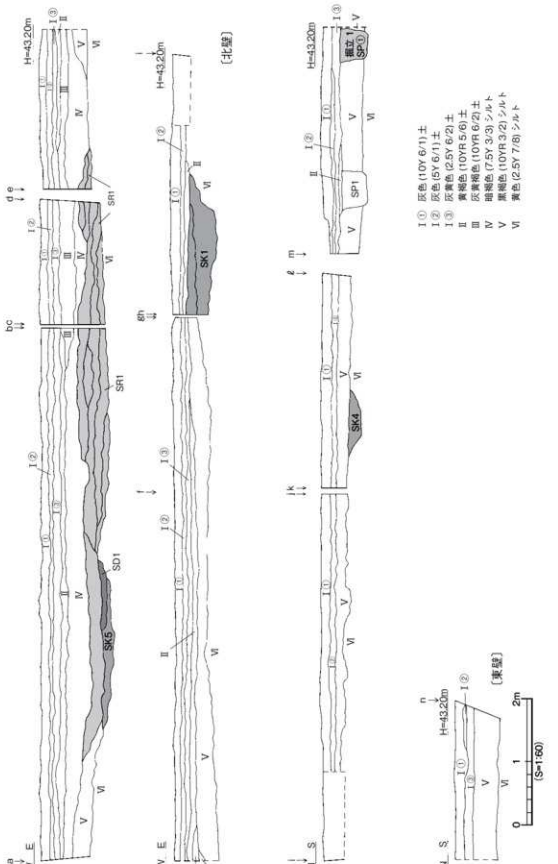
Ⅴ層：黒褐色（10YR 3/2）を呈するシルト層で調査地北西側を除く地域に広くみられ、層厚4～40cmを測る。本層は調査地北東側から南西側に向けて傾斜堆積をなす。調査壁の土層観察により、竪穴住居（ＳＢ2）や掘立柱建物（掘立1）、土坑（ＳＫ7）、柱穴（ＳＰ1・ＳＰ13）は、本層上面より掘削された遺構であることを確認した。

Ⅵ層：黄色（2.5Y 7/8）を呈するシルト層で 本層上面が調査における最終遺構検出面である。

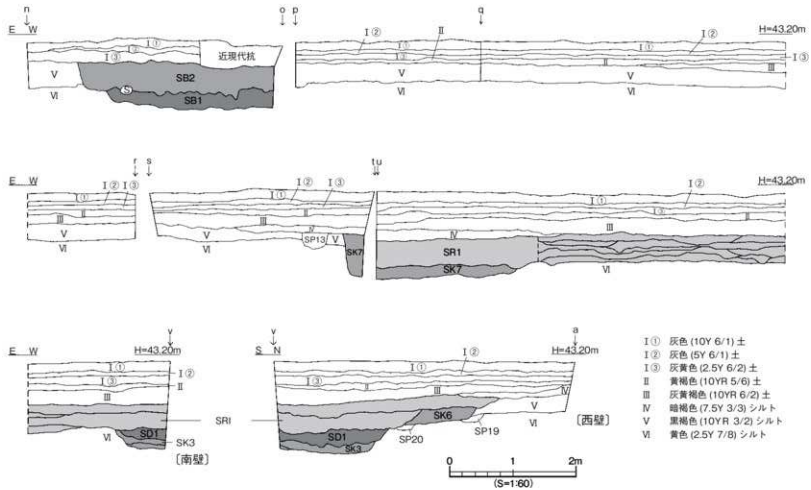
検出した遺構や出土遺物より、Ⅴ層は古墳時代、Ⅳ層は古代から中世までに堆積したものと推測される。なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは北から南へA・B・C・D、西から東へ1・2・・・5とし、A1・A2・・・・D6といったグリット名を付した。グリットは、遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。

（2）検出遺構・遺物（第6図）

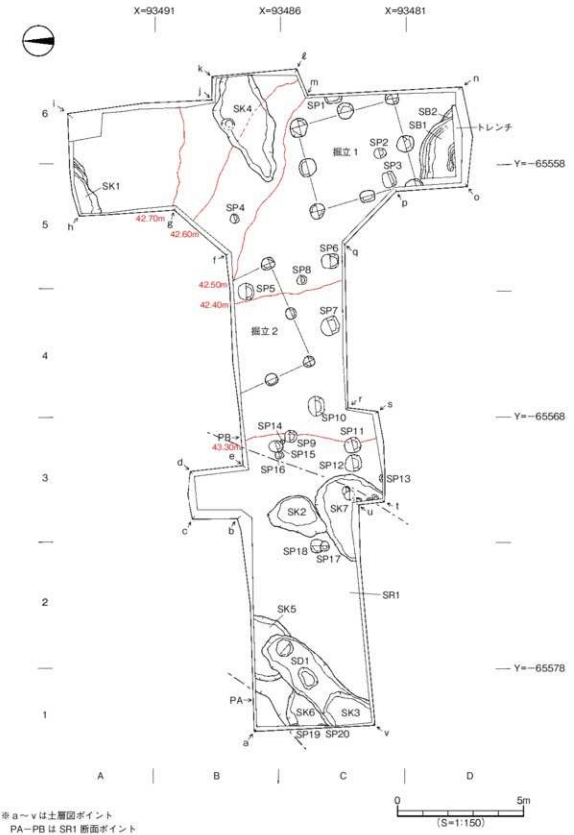
調査では竪穴住居2棟〔ＳＢ1：弥生末、ＳＢ2：6世紀後半〕、掘立柱建物2棟〔掘立1・2：6世紀前半以降〕、溝1条〔ＳＤ1：7世紀前半〕、自然流路1条〔ＳＲ1：10世紀〕、土坑7基〔ＳＫ1：6世紀中葉、ＳＫ2：7世紀初～前半、ＳＫ3・7：7世紀初頭、ＳＫ4：古墳以前、ＳＫ5・6：7世紀前半以前〕、柱穴20基を検出した。遺物は遺構や包含層及び重機掘削時に出土したもので、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）、陶磁器（近世）、緑釉陶器（古代）、瓦（古代）、石器、鉄滓である。なお、遺物の出土量は収納箱（44×60×14cm）約8箱分である。


H=43.20m
〔北壁〕
〔東壁〕
SK1
SK4
SK5
SP1
SP①
SR1
SD1
(S=1:60)
0
1
2m
Ⅰ① 灰色 (10Y 6/1) 土
Ⅰ② 灰色 (5Y 6/1) 土
Ⅰ③ 灰黄色 (2.5Y 6/2) 土
Ⅱ 黄褐色 (10YR 5/6) 土
Ⅲ 灰黄褐色 (10YR 6/2) 土
Ⅳ 暗褐色 (7.5Y 3/3) シルト
Ⅴ 黒褐色 (10YR 3/2) シルト
Ⅵ 黄色 (2.5Y 7/8) シルト

第４図　北壁・東壁土層図


n
E W
o p
q
H=43.20m
近現代抗
SB2
SB1
r s
tu
SP13
SK7
SR1
v
a
S N
SR1
SD1
SK3
SK6
SP20
SP19
〔南壁〕
〔西壁〕
0 1 2m
(S=1:60)
Ⅰ① 灰色 (10Y 6/1) 土
Ⅰ② 灰色 (5Y 6/1) 土
Ⅰ③ 灰黄色 (2.5Y 6/2) 土
Ⅱ 黄褐色 (10YR 5/6) 土
Ⅲ 灰黄褐色 (10YR 6/2) 土
Ⅳ 暗褐色 (7.5Y 3/3) シルト
Ⅴ 黒褐色 (10YR 3/2) シルト
Ⅵ 黄色 (2.5Y 7/8) シルト

第５図　南壁・西壁土層図



※ａ～ｖは土層図ポイント
PA−PB は SR1 断面ポイント

第６図　遺構配置図

3．遺構と遺物

（1）竪穴住居

[調査工程]

発掘調査時、調査区南東部にて竪穴住居を検出した。調査区壁面に沿ってトレンチを掘削し、土層観察を行った結果、二種類の土層を確認した。調査開始当初は埋土上位の掘り下げが終了した時点では1棟の住居と判断し、遺物の取り上げを行った。その後、住居下位にて円形状の掘り方を検出した。遺物の取り上げは埋土上位とは別に行い、住居底面にて壁体沿いに周溝状の溝を検出した。調査終了後の整理作業では埋土上位と下位で出土した遺物は明らかに時期差が認められ、住居の平面形態についても、住居東側には一部突出する部分が確認された。平面形態や遺物の出土状況から、検出した竪穴住居は本来2棟の重複であったと考えられる。ここでは、埋土上位部分として掘り下げた遺構をＳＢ2、埋土下位部分をＳＢ1として報告する。

ＳＢ1（第7図、図版4）

調査区南東部Ｄ5・6区に位置し、住居西側と南側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、埋土上位はＳＢ2が覆う。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.35 m、南北検出長1.30 m、壁高は30 cmを測る。ＳＢ1の底面は平坦で、埋土は黒色粘質シルトに黄色シルトがブロック状に混入するものである。住居床面にて、周壁溝を検出した。規模は幅20 cm、深さ14 cmを測り、埋土は黒色粘質シルトに黄色シルトがブロック状に混入するものである。住居壁体に沿って幅10～20 cm程度のテラス状の高まり（高床部）をもつ。このほか、床面中央部より溝状遺構（ＳＤ①）を検出した。規模は長さ1.0 m、幅10～20 cm、深さ7.5 cmを測り、埋土は住居埋土と同様である。遺物は、埋土中より弥生土器片が散在して出土した。

出土遺物（第7図、図版7）

1～6は弥生土器である。1～4は甕形土器である。1は口縁部小片で口縁端部を上方に拡張し、口縁端面はナデ凹む。2は「く」の字状口縁で、口縁端部は丸い。口縁部内外面共にハケメ調整を施し、頸部内面には指頭痕が顕著にみられる。3は胴部の小片で、外面にはタタキ調整後ハケメ調整（8本/cm）、内面にハケメ調整（8本/cm）を施す。4は平底で、1/2の残存である。底部外面に煤が付着し、内面には指頭痕が顕著にみられる。5は壺形土器の口縁部で口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に径0.4 cm大の竹管文1列と半截竹管文1列を施す。6は高坏形土器の脚部で、裾部に凹線文1条と脚部端面に凹線文2条を施す。なお、脚柱部には矢羽根状の文様がわずかに残る。裾部外面にはハケメ調整、裾部外面と脚部外端面には板状工具によるナデを施す。

時期：出土遺物には時期幅があるが、甕形土器(3)や壺形土器(5)の出土より、ＳＢ1の廃棄・埋没時期は弥生時代末とする。

ＳＢ2（第7図、図版4）

調査区南東部Ｄ5・6区に位置し、住居北西隅は掘立1柱穴に切られ、住居西側と南側は調査区外に続く。第Ⅵ層上面の検出であるが、調査壁の土層観察により第Ⅴ層上面より掘削された遺構である。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.70 m、南北検出長1.20 m、壁高は検出面下10 cmを測る。住居底面には凸凹がみられ、埋土は黒色シルト単層である。遺物は埋土中

より土師器片、須恵器片のほか、石器が出土した。

出土遺物（第７図、図版７）

７～９は須恵器である。７・８は坏身片で、たちあがりは欠損する。７は内外面共に回転ナデ調整を施す。９は有蓋高坏のつまみで、つまみ上部が凹む。内外面共に回転ナデ調整を施す。10は土師器の甕形土器で口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。胴部内外面共にハケメ調整を施し、内面には指頭痕が顕著にみられる。11はサヌカイトの剥片である。

時期：出土遺物の特徴より、ＳＢ２の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、６世紀後半とする。

（２）掘立柱建物

掘立１（第８図、図版４）

調査区南東部Ｃ５～Ｄ６区に位置し、建物南西側はＳＢ１を切る。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第Ⅴ層上面から掘削された遺構である。８基の柱穴（ＳＰ①～⑧）で構成される２間×２間の南北棟で、規模は桁行長3.58ｍ、梁行長3.00ｍ、柱穴間隔は1.7～2.0ｍである。建物を構成する各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、柱穴掘り方規模は径46～80㎝、深さ５～29㎝を測る。柱穴掘り方埋土は三種類あり、１層：暗褐色シルト、２層：暗褐色シルトに黄色シルトがブロック状に混入、３層：暗褐色シルトに黄橙色シルトがブロック状に混入するものである。なお、柱痕はＳＰ⑧で検出され、規模は径15～20㎝、深さ15㎝を測る。柱痕埋土は、柱穴掘り方埋土より色調の明るい暗褐色粘質土である。遺物は、掘り方埋土中より弥生土器、土師器、須恵器の小片が少量出土した。

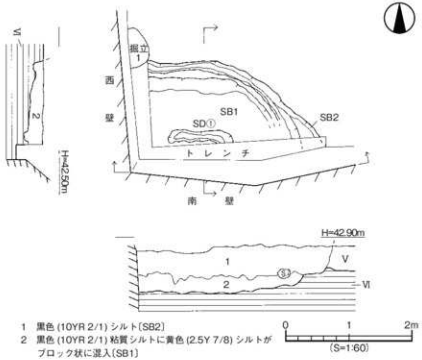
出土遺物（第８図）

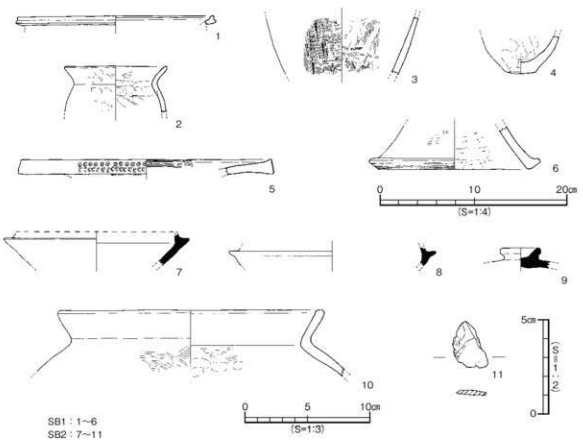
12・16はＳＰ④、13はＳＰ③、14はＳＰ②、15はＳＰ⑧出土品。12・13は須恵器の坏蓋である。12は口縁部の小片で、丸みのある断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。内外面共に回転ナデ調整を施す。13の稜は断面三角形状の丸みをもち、内外面共に回転ナデ調整を施す。14は土師器の甕形土器の頸部片で、内面に明瞭な稜をもつ。15・16は、弥生土器の甕形土器である。15は「く」の字状を呈する口縁部の小片で、口縁端部は丸くおさめる。弥生後期。16は口縁部の小片で、口唇部より下がった位置に凸帯を貼り付け、凸帯上に指頭押圧を施す。弥生前期。

時期：出土した須恵器の特徴より古墳時代後期、６世紀前半以降の建物とする。

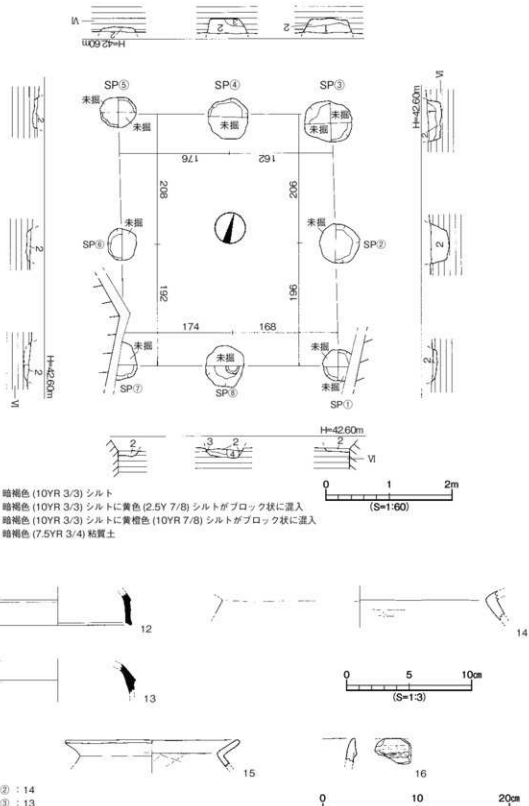
掘立２（第９図）

調査区中央部東寄りＢ・Ｃ４区に位置し、建物北側は調査区外へ続く。第Ⅵ層上面での検出であり、４基の柱穴（ＳＰ①～④）を確認した。２間×１間以上の建物で、規模は東西長4.20ｍ、南北検出長2.50ｍ、柱穴間隔は1.7～2.1ｍである。建物を構成する各柱穴の平面形態は円形を呈し、柱穴掘り方規模は径40～45㎝、深さ５～15㎝を測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色シルトに黄色シルトがブロック状に混入するものである。遺物は柱穴掘り方埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が出土したほか、ＳＰ④からは径10㎝、厚さ５㎝の扁平石が２点出土した。





第７図　ＳＢ１・２測量図・出土遺物実測図

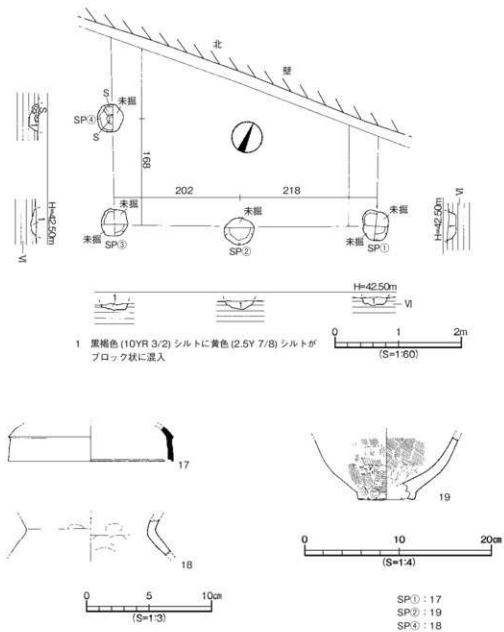


第８図　掘立１測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第９図）

17はＳＰ①、18はＳＰ④、19はＳＰ②出土品。17は須恵器の坏蓋である。口縁部の小片で丸みのある断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する段をもつ。内外面共に回転ナデ調整を施す。18は土師器の甕形土器である。口頸部の小片で、内面には指頭痕が顕著にみられる。19は弥生土器の鉢形土器で、突出する上げ底である。外面はハケメ調整後、板状工具によるナデを施し、底部内面には指頭痕が顕著である。

時期：出土遺物や検出状況などから古墳時代後期、６世紀前半以降の建物とする。



第９図　掘立２測量図・出土遺物実測図

（３）溝

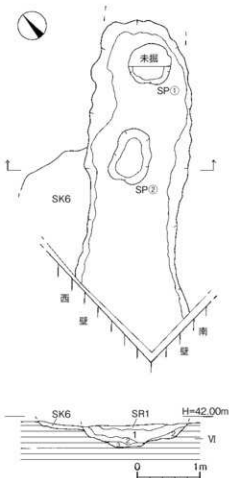
ＳＤ１（第10図、図版５）

調査区西部Ｂ１～Ｃ２区で検出した北東－南西方向の溝で、南西側は調査区外へ続く。第Ⅵ層上面での検出であり溝上面は自然流路ＳＲ１が覆い、溝北側は土坑ＳＫ５、西側は土坑ＳＫ６を切り、溝基底では土坑ＳＫ３を検出した。規模は検出長5.20ｍ、幅1.60ｍ、深さは検出面下34㎝を測る。溝基底面は、北東から南西へ向けて緩やかに傾斜をなす（比高差10㎝）。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は三種類に分かれ、１層：灰色砂、２層：黒色粘質土、３層：黒色粘質土に黄色シルトがブロック状に少量混入するものである。発掘調査時は、層毎に掘り下げと遺物の取り上げを行った。

溝基底面では２基の柱穴（ＳＰ①・②）を検出した。ＳＰ①は径60～65㎝、深さ６㎝を測る円形柱穴、ＳＰ②は長径0.85ｍ、短径0.60ｍ、深さ８㎝を測る楕円形柱穴で、埋土は黒色粘質土に黄色シルトがブロック状に少量混入するものである。ＳＰ①からは、須恵器の坏身と高坏片が出土した。溝埋土中からは弥生土器片や土師器片、須恵器片が散在して数多く出土した。

出土遺物（第11・12図、図版７）

20～25は埋土３層、26～35は埋土２層、36～44は埋土１層出土品、45・46はＳＰ①、47はトレンチ出土品である。



第10図　ＳＤ１測量図

埋土３層出土品（20～25）

20～23は須恵器である。20は坏蓋で丸みのある断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。天井部外面には回転ヘラケズリ調整（１／２）を施す。21・22は坏身で、たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みが巡る。23は短頸壺の口縁部小片である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は丸い。体部外面には回転カキメ調整を施す。24は土師器甕形土器の肩部片で、頸部内面には明瞭な稜をもつ。25は弥生土器である。甕形土器の胴部片で、２条１組によるヘラ描き沈線文４条と刻目を施す。

埋土２層出土品（26～35）

26～30は須恵器である。26～28は坏身で、26・27はたちあがり端部が内傾し、受部は上外方に短く延び、受部端に沈線状の凹みが巡る。28のたちあがり端部は丸くおさめ、内外面共に回転ナデ調整を施し、外面に回転ヘラケズリ調整を施す。29・30は高坏である。29は無蓋高坏で坏部中位に凸線１条と８条の波状文、柱部には長方形透かし３ヶ所を施す。柱部外面には回転カキメ調整を施し、

内面は回転ナデ調整を施す。30は脚部の小片である。裾部は段をなし、脚端部は丸い。柱部に透かし2ヶ所以上を施し、柱部外面には回転カキメ調整を施す。31は陶質系の壺である。口縁部は外反し、口縁端面はナデ凹む。頸部外面に凸線1条と凸線の上下に11条と4条以上の波状文を施す。32・33は土師器である。32は甕形土器の口縁部で口縁部中位に稜をもち、口縁端部は丸い。33は甑形土器で口縁部は直立し、口縁端部は平らな面をなす。口縁部外面にはタテ方向のハケメ調整（6本/cm）、内面はヨコ方向のハケメ調整（6～7本/cm）を施す。34・35は弥生土器である。34は鉢形土器で口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味である。35は壺の肩胴部小片である。外面にハケメ調整（4本・8本/cm）、内面には粘土接合痕と指頭痕が顕著にみられる。

埋土1層出土品（36～44）

36～40は須恵器である。36・37は坏蓋で断面三角形状の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する。36は扁平な天井部をもち、天井部外面には回転ヘラケズリ調整（1/3）を施す。38・39は高坏である。38は無蓋高坏で、坏部中位に凸線2条と凸線下に8～9条の波状文を施す。39は脚部で脚裾部は下内方へ屈曲し、脚端部は丸い。柱部には、長方形状の透かし2ヶ所を看取する。40は椀の胴部で、胴部中位に沈線2条を施す。外面には、平行叩き後回転カキメ調整を施す。41～43は土師器の甕形土器である。41は口縁部がやや内湾し、口縁端部は丸くおさめる。42・43は肩部片で、42はヘラ描き沈線文1条、43はヘラ描き沈線文2条を施す（記号か）。44は弥生土器である。脚付鉢の脚部で、脚端部は丸い。

ＳＰ①出土品（45・46）

45・46は須恵器である。45は坏身でたちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に丸い。46は高坏の脚部小片で脚端部は段をなし、下外方へ屈曲する。脚端面には、凹線状の凹みが巡る。

ＳＤ1トレンチ出土品（47）

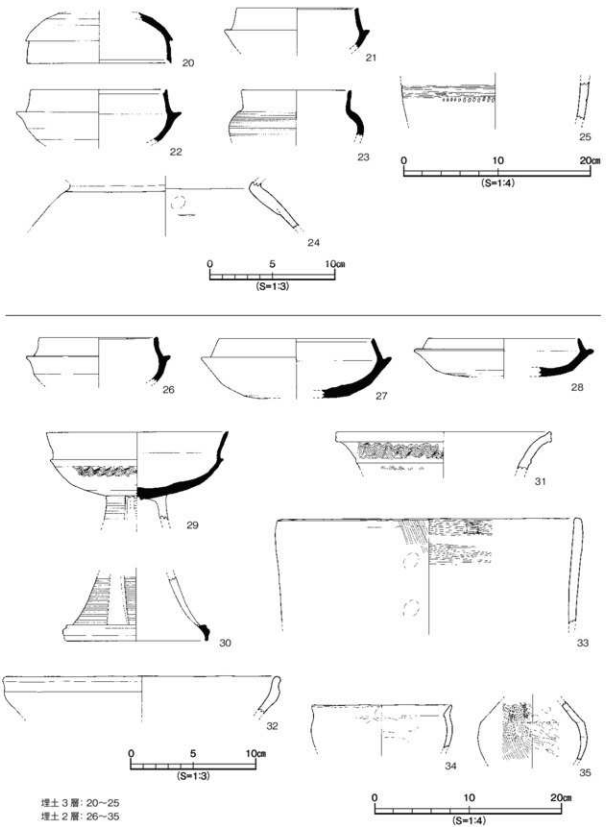
47は須恵器の高坏である。脚裾部は垂直に下がり上端部には凸線が巡り、脚端部は丸い。柱部には、長方形状の透かしを2ヶ所看取する。

時期：出土した遺物には時期幅が認められるが、溝の最終埋没時期は古墳時代終末、7世紀前半とする。

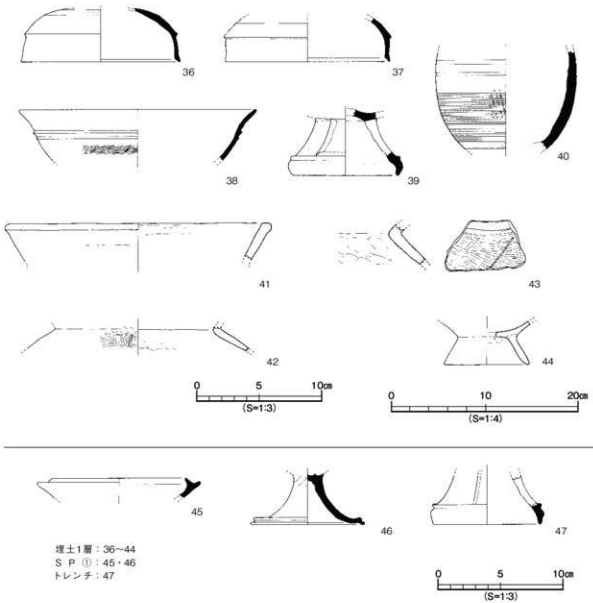
（4）自然流路

ＳＲ1（第6・13図）

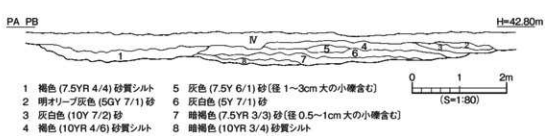
調査区西部Ｂ3～Ｃ3区で検出した北東－南西方向の流路で、平面精査では流路西側壁体のみを検出した。調査壁の土層観察により、流路の範囲を想定線で示している。第Ⅵ層または第Ⅶ層上面の検出であり、流路上面は第Ⅳ層が覆う。規模は東西検出長12.00ｍ、幅8.80ｍ、深さ50㎝を測る。流路基底面は、北東から南西へ向けて緩やかに傾斜をなす（比高差6㎝）。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は八種類あり、上位より1層：褐色砂質シルト、2層：明オリーブ灰色砂、3層：灰白色砂、4層：褐色砂質シルト、5層：灰色砂に径1～3㎝大の小礫を含む、6層：灰白色砂、7層：暗褐色砂に径0.5～1㎝大の小礫を含む、8層：暗褐色砂質シルトである。堆積状況をみると砂や小礫が数多くみられることから、激しい水流があったことが伺われる。遺物は埋土中より、弥生土器や土師器、須恵器、瓦のほか、緑釉陶器片や、石器、鉄滓が出土した。



第 11 図　ＳＤ１出土遺物実測図（１）



第12図　ＳＤ１出土遺物実測図（２）

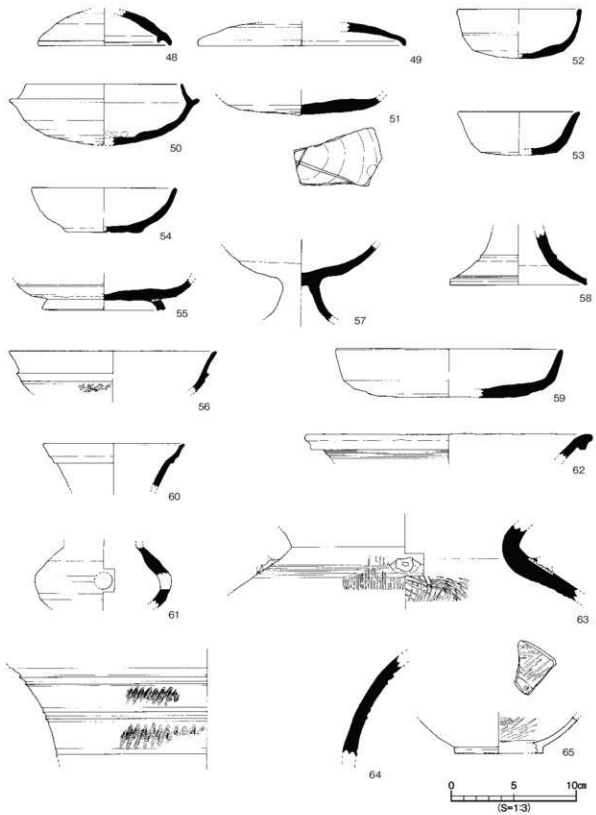


第13図　ＳＲ１断面図

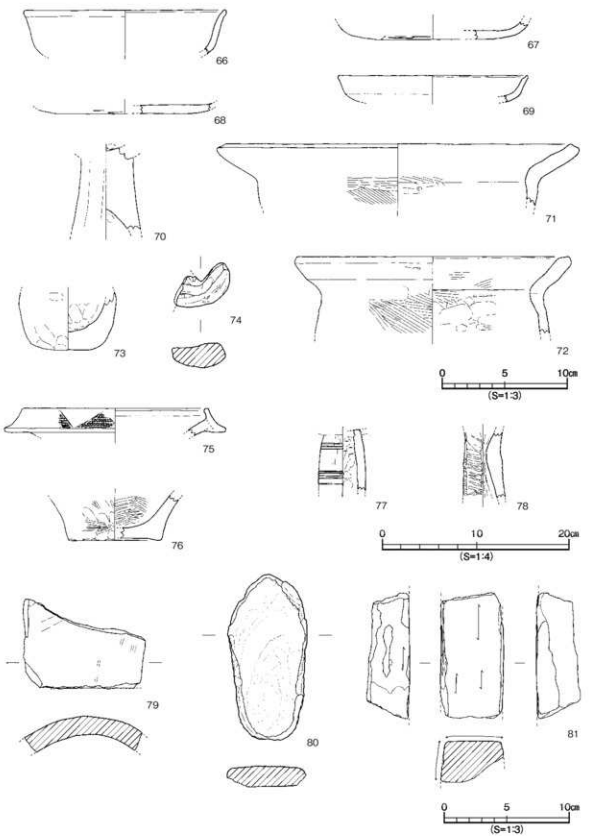
出土遺物（第14～16図、図版８・９）

48～64は須恵器である。48・49は坏蓋である。48は天井部が丸みを帯び、かえりはわずかに内傾する。49は天井部が扁平で、口縁部は下方に屈曲する。内外面共に回転ナデ調整を施し、天井部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。50・51は坏身である。50はたちあがりが内傾し、端部は丸い。内外面共に回転ナデ調整を施し、底部外面には回転ヘラケズリ調整（反時計回り）を施す。51の底部には、ヘラ記号を施す。52～55は坏である。52は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。体部中位に沈線１条が巡る。53は口縁部がわずかに外反し、口縁端部は尖り気味に丸い。54は突出する平底である。52～54の底部外面には、回転ヘラケズリ調整を施す。55は高台の付く坏で、高台は「ハ」の字状に開く。56～58は高坏である。56は無蓋高坏で口縁部は緩やかに外反し、坏部中位に凸線１条と波状文５条以上を施す。57は坏脚部片、58は脚部である。58は柱部中位に凸線１条が巡り、脚端面は凹む。59は皿である。底部は平底で口縁部は短く内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸い。底部外面には回転ヘラ切り痕を残し、内面には回転ナデ調整を施す。60・61は甕である。60は口縁部が外反し頸部上位には屈曲部をもち、口縁端部は内傾する。61は体部小片で径1.4㎝大の円孔を穿ち、外面には回転ヘラケズリ調整を施す。62・63は壺である。62は口縁部が外反し、口縁端部は下方に肥厚する。なお、口縁部に歪みがみられる。63は四耳壺の頸部で、突起物の痕跡を残す。外面には平行叩き後回転カキメ調整を施し、内面には円弧叩きを施す。64は大甕の頸部片であり、２条の凸線と凸線間に波状文（11条と14条）を施す。65は緑釉陶器の椀である。削出高台で、底部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。須恵質で胎土は灰色を呈し、内外面には濃緑色の釉が部分的に残る。66～73は土師器である。66～68は坏で66は口縁部が内傾し、口縁端部内面に沈線状の凹みをもつ。67・68は平底である。69は皿で、口縁端部は内傾する凹面をなす。66～69は赤色塗彩土器。70は高坏で、脚柱部は中実である。71・72は甕形土器で、71は口縁部が内湾し、口縁端面はナデ凹み、器壁は厚い。胴部内外面に、粗いハケメ調整（５本／㎝）を施す。72は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。73は壺形土器である。平底の完形品で、器壁は厚い。内外面には指頭痕が顕著にみられる。74は瓦質の瓮形土器で、上外方に屈曲する把手部である。75～78は弥生土器である。75･76は壺形土器である。75は複合口縁壺で口縁端部は上下方に肥厚し、口縁部外面に山形文（縦横沈線で充塡）を施す。76はわずかに上底で、内外面共にヨコ方向のヘラミガキを施す。77は高坏形土器で、柱部に３条と４条の櫛描き沈線文を施す。78は支脚形土器であり、柱部は中空である。79は丸瓦である。凸面は細縄叩き、凹面には布目痕を施す。80・81は石製品である。80は扁平片刃石斧で、敲打段階の未成品である。材質は緑色片岩である。81は砂岩製の砥石で、２面の砥面をもつ。82～84は鉄滓である。表面には無数の気泡がみられる。

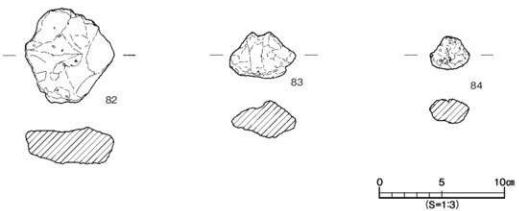
時期：出土した須恵器や緑釉陶器の特徴より、ＳＲ１の最終埋没時期は平安時代中期、10世紀代とする。



第14図　ＳＲ１出土遺物実測図（１）



第15図　ＳＲ１出土遺物実測図（２）

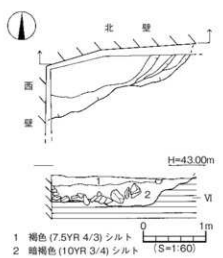


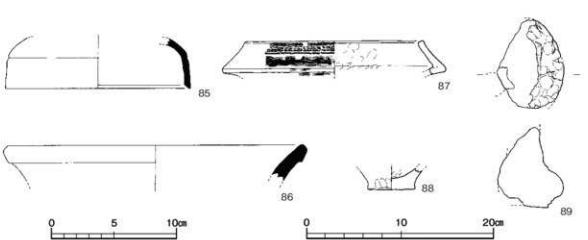
第16図　ＳＲ１出土遺物実測図（３）

（５）土　坑

ＳＫ１（第17図、図版５）

調査区北東部Ａ５区に位置し、土坑北側と西側は調査区外へ続く。第Ⅵ層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.20ｍ、南北検出長0.96ｍ、深さは検出面下50㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑東側にはテラス状の段部をもつ。埋土は二種類に分層され、上層は褐色シルト（１層）、下層は暗褐色シルト（２層）である。遺物は埋土中より弥生土器片や須恵器が出土したほか、径５～20㎝、厚さ３～10㎝大の河原石がまとまって出土した。





第17図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第17図）

85・86は須恵器である。85は坏蓋で、天井部と口縁部の境界に沈線状の凹みが巡る。86は甕で口縁部は外反し、口縁端部は方形状に肥厚する。87・88は弥生土器である。87は複合口縁壺で、口縁部に７条の櫛描き沈線文を２段に施す。88は甕形土器の底部で、平底となる。89は支脚形土器で柱部は中空となり、外面には指頭痕が顕著にみられる。

時期：出土した須恵器の特徴から古墳時代後期、６世紀中葉とする。

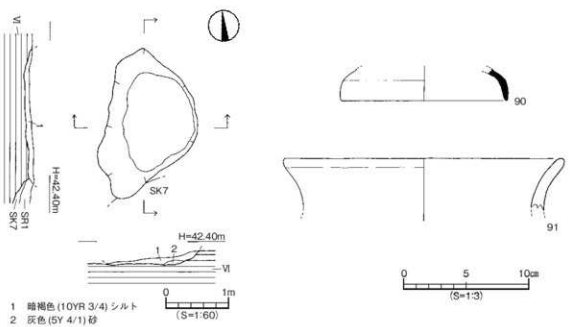
ＳＫ２（第18図）

調査区中央部Ｂ・Ｃ３区に位置し、土坑南側は土坑ＳＫ７を切る。第Ⅵ層上面での検出である。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は南北長2.38ｍ、東西長1.60ｍ、深さ20㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑西側壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色シルトを基調とし、基底面付近には灰色砂が部分的に堆積する。土坑基底面は平坦である。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片が少量出土した。

出土遺物（第18図）

90は須恵器である。坏蓋の小片で、口縁端部は丸い。内外面共に回転ナデ調整を施す。91は土師器の甕形土器で口縁部は外反し、口縁端部は丸い。

時期：出土遺物の特徴から古墳時代終末、７世紀初頭から前半とする。



第18図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図

ＳＫ３（第19図、図版６）

調査区南西部Ｃ１区に位置し、土坑南側と西側は調査区外へ続く。溝ＳＤ１基底面にて検出した土坑で、平面形態は楕円形を呈し、規模は南北検出長1.84ｍ、東西検出長1.40ｍ、深さは25㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は二種類に分層され、上層は灰色粘質土（１層）、下層は暗褐色シルトに黄色シルトがブロック状に混入（２層）である。土坑基底面には、多少の凸凹がみられる。土坑内には、基底面よりやや高い位置に径５～15㎝、厚さ３～10㎝大の河原石が散在しており、石の上面や石と石との間からは土師器片や須恵器片のほか敲石などが出土した。

出土遺物（第19図、図版９）

92～95は須恵器である。92・93は坏蓋である。天井部は扁平で、口縁端部は内傾する面をもつ。天井部外面は回転ヘラケズリ調整（１/２）、口縁部は内外面共に回転ナデ調整を施す。94・95は甕である。94の口縁部は外反し、口縁端部は下方に肥厚する。内外面共に回転ナデ調整を施す。95は頸肩部片で、外面は平行叩き、内面には円弧叩きを施す。96は土師器の高坏で、柱部は中実となる。97はほぼ完形の敲石で、使用痕を顕著に残す。砂岩製。

時期：出土遺物の特徴と土坑上面を溝ＳＤ１が覆うことから古墳時代終末、７世紀初頭とする。

ＳＫ４（第20図）

調査区東側Ｂ５・６区に位置し、土坑東側は調査区外へ続く。第Ⅵ層上面での検出であり、土坑上面は第Ⅴ層が覆う。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は東西検出長4.48ｍ、南北長2.16ｍ、深さ22㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体は比較的緩やかに立ち上がる。埋土は、暗褐色シルトに褐色シルトがブロック状に混入するものである。土坑基底面には凸凹がみられ、土坑北側基底面にて柱穴１基（ＳＰ①）を検出した。ＳＰ①は径40㎝、深さ17㎝を測る円形柱穴で、埋土は暗褐色シルト単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片や石が少量出土したが、実測しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で時期決定は難しいが第Ⅴ層が覆うことから、概ね古墳時代以前とする。

ＳＫ５（第20図）

調査区北西部Ｂ１～Ｃ２区に位置し、土坑南側は溝ＳＤ１に切られ、土坑北側は調査区外へ続く。調査壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅴ層と流路ＳＲ１が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.42ｍ、南北検出長1.66ｍ、深さ18㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色粘質土単層である。土坑基底面は、中央部が凹んでいる。土坑内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、ＳＤ１に切られることや第Ⅴ層が覆うことから、７世紀前半以前とする。

ＳＫ６（第20図）

調査区西側Ｃ１区に位置し、土坑南東部は溝ＳＤ１に切られ、土坑西側は調査区外へ続く。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第Ⅴ層上面より掘削された遺構である。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.60ｍ、東西検出長1.40ｍ、深さは検出面下12㎝を測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色シルト単層である。土坑基底面は、中央部が凹んでいる。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、ＳＤ１に切られることや第Ⅴ層上面から掘削されていることから、概ね７世紀前半以前とする。

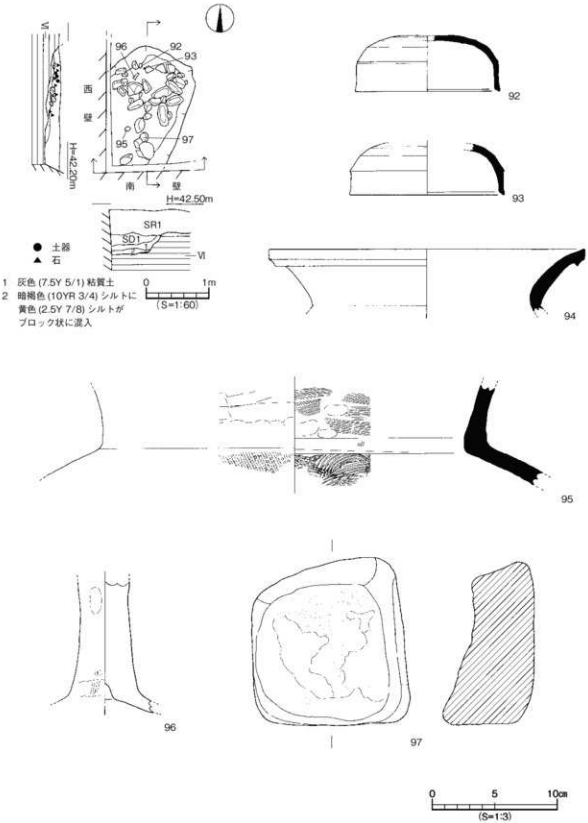
ＳＫ７（第21図、図版６）

調査区中央部Ｃ２・３区に位置し、土坑北側は土坑ＳＫ２に切られ、南側は調査区外へ続く。第Ⅵ層上面での検出であり、土坑上位は流路ＳＲ１が覆っている。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西長3.30ｍ、南北検出長2.70ｍ、深さ60㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、壁体は鋭角的に立ち上がる。埋土は六種類に分層され、１層：暗褐色シルト、２層：暗褐色シルトに褐色シルトがブロック状に混入、３層：暗褐色シルト、４層：灰黄褐色粘質土、５層：灰色シルトに黄色シルトがブロック状に混入、６層：暗褐色シルトに黄色シルトがブロック状に混入である。埋土の堆積状況をみると、ほぼ水平堆積をなす。土坑基底面にて、５基の柱穴（ＳＰ①～⑤）を検出した。各柱穴の規模は径20～40㎝、深さ10～15㎝を測り、柱穴掘り方埋土は土坑埋土６と同様である。遺物は土坑埋土中より弥生土器片のほか、土師器片や須恵器片が数多く出土した。なお、埋土下位からは径５～30㎝、厚さ３～10㎝大の河原石が散在して出土した。

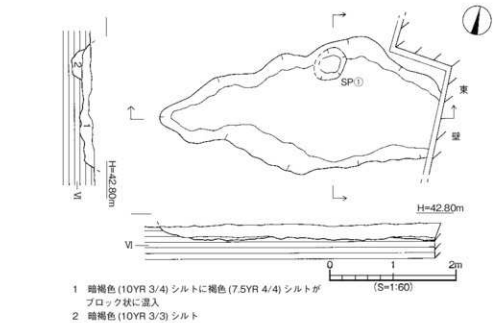
出土遺物（第22図、図版９）

98～107は須恵器である。98～100は坏身である。98のたちあがり端部は内傾する段をなし、受部は上外方に延びる。99のたちあがり端部は丸く仕上げられ、100のたちあがりは欠損する。101は高坏の脚部で、脚柱部に透かしが１ヶ所以上施される。内外面共に回転ナデ調整を施し、裾部外面に工具痕を残す。102・103は提瓶である。102は口縁部が外反し、口縁端部は丸く仕上げる。103は体部片で、外面に回転カキメ調整を施す。104・105は壺である。104は口縁部が上外方に屈曲し、口縁端部は尖り気味に丸い。105は肩胴部である。やや扁平な球状の胴部で、下半部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。106・107は甕である。106は口縁部が下外方に肥厚し、107の口縁部は長方形状に肥厚する。106の頸部外面には平行叩きを施す。108～110は土師器の甕である。108は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する面をなす。109・110は口縁部が外反し、109は口縁端面に凹線状の凹みが巡る。110は胴部外面にハケメ調整（５～６本／㎝）を施す。111・112は弥生土器である。111は脚付の鉢形土器、112は甕形土器で上げ底となる。

時期：出土遺物の特徴とＳＫ２との切り合いより古墳時代終末、７世紀初頭頃とする。

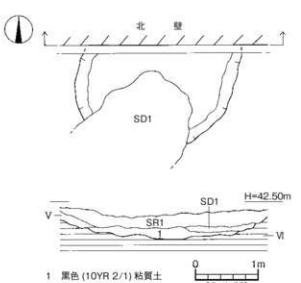


第19図　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図



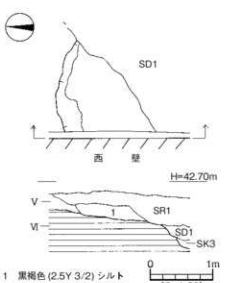
1　暗褐色 (10YR 3/4) シルトに褐色 (7.5YR 4/4) シルトがブロック状に混入
2　暗褐色 (10YR 3/3) シルト

〔ＳＫ４〕



1　黒色 (10YR 2/1) 粘質土

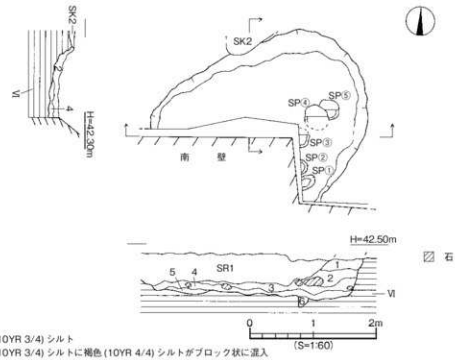
〔ＳＫ５〕



1　黒褐色 (2.5Y 3/2) シルト

〔ＳＫ６〕

第20図　ＳＫ４・５・６測量図



1 暗褐色 (10YR 3/4) シルト
2 暗褐色 (10YR 3/4) シルトに褐色 (10YR 4/4) シルトがブロック状に混入
3 暗褐色 (10YR 3/3) シルト
4 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土
5 灰色 (5Y 4/1) シルトに黄色 (2.5Y 7/8) シルトがブロック状に混入
6 暗褐色 (10YR 3/3) シルトに黄色 (2.5Y 7/8) シルトがブロック状に混入

第 21 図　ＳＫ７測量図

（6）その他の遺構と遺物

調査では遺構内及び掘立柱建物柱穴を除き、20 基の柱穴を検出した。このほか、包含層掘削時や重機掘削時に遺物が出土した。なお、重機掘削時の出土品は層位や地点が不明であるため、ここでは地点不明遺物として取り扱う。

1）柱　穴

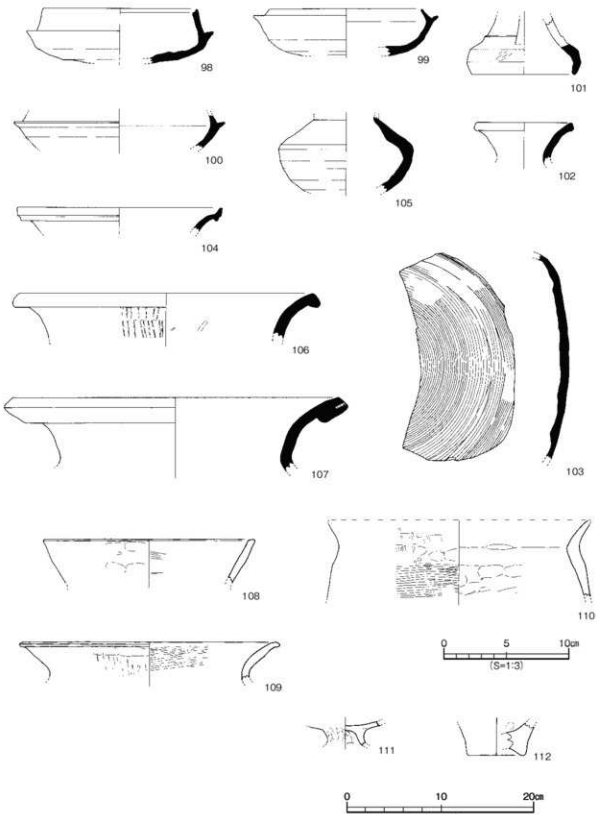
調査で検出した柱穴は、掘り方埋土で分類すると以下の四種類（１類～４類）である。

１類：黒褐色土……　９基［ＳＰ４・６～13］
２類：褐色土……　１基［ＳＰ５］
３類：暗褐色土（黄色土混入）……　６基［ＳＰ１～３・15・19・20］
４類：灰色土……　４基［ＳＰ 14・16 ～ 18］

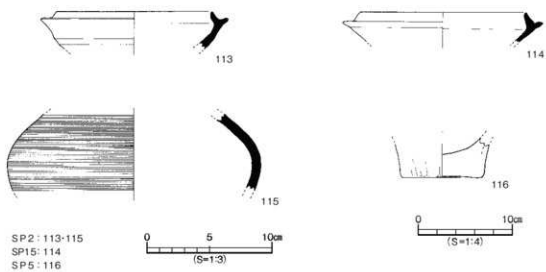
上記の柱穴のうち、２・３・４類の柱穴から出土した遺物を４点掲載した。

出土遺物（第 23 図）

113・115 はＳＰ２、114 はＳＰ 15、116 はＳＰ５出土品。113 ～ 115 は須恵器である。113・114 は坏身で、たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。113 の外面には回転ヘラケズリ調整を施す。114 は受部端に沈線状の凹みが巡る。115 は短頸壺の肩部である。外面には回転カキメ調整を施し、内面は回転ナデ調整を施す。116 は弥生土器の壺形土器である。底部の完形品で、わずかに上げ底である。



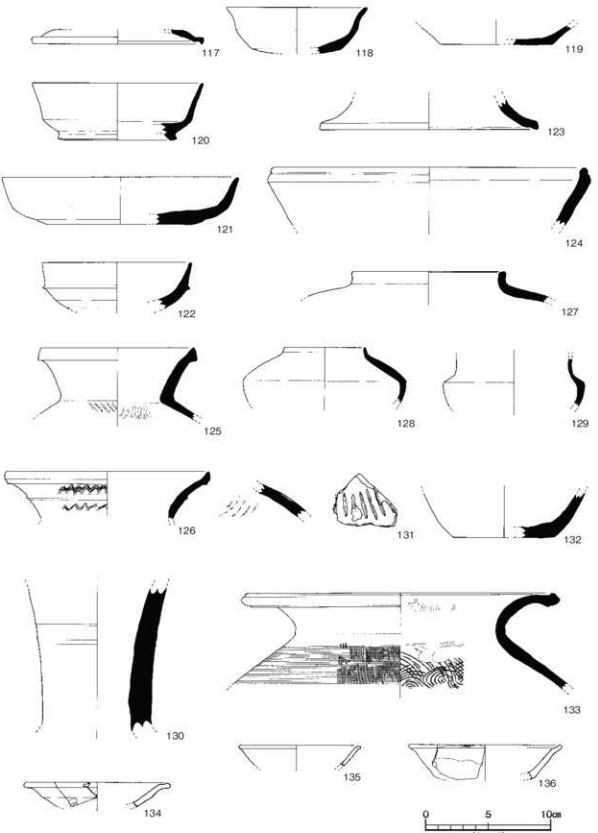
第22図　ＳＫ７出土遺物実測図



第 23 図　柱穴出土遺物実測図

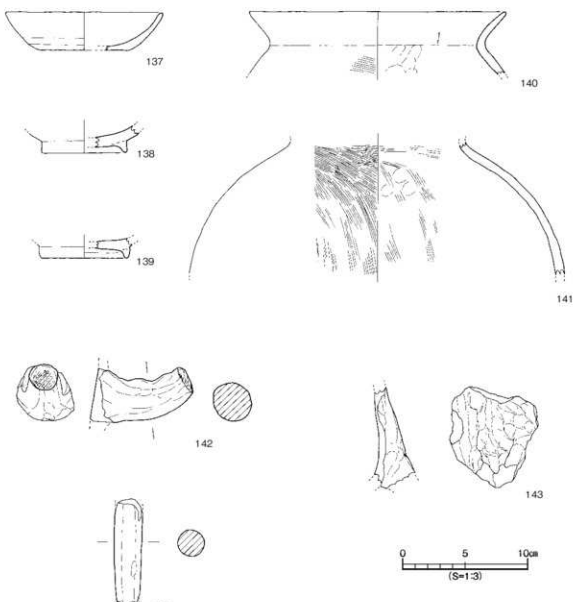
2）包含層出土遺物（第 24 ～ 26 図、図版 10）

117 ～ 133 は須恵器である。117 は坏蓋で天井部は屈曲部をもち、口縁部は下方に屈曲する。118 ～ 120 は坏である。118 は口縁部がわずかに外反し、口縁端部は尖り気味となる。底部外面には、回転ヘラケズリ調整を施す。119 は平底で、底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。120 は高台の付く坏である。121 は皿で、口縁部がわずかに外反し、口縁端部は尖り気味となる。底部外面には、回転ヘラケズリ調整を施す。122・123 は高坏である。122 は無蓋高坏で、坏部中位に凸線が巡る。坏下部外面には、回転ヘラケズリ調整を施す。123 は脚部が「ハ」字状に開き、脚端部は尖り気味である。124 は鉢で口縁端部は上内方に肥厚し、口縁端面に凹線状の凹みがある。125 ～ 132 は壺である。125 は口縁部が外反し、口縁端部は尖り気味である。内外面共に回転ナデ調整を施し、外面は平行叩き、内面には円弧叩きを施す。126 は頸部に凸線 1 条を施し、凸線上に波状文（6 ～ 8 条）、凸線下に波状文（4 ～ 5 本）を施す。127 ～ 129 は短頸壺である。127 は口縁部が短く直立気味に立ち上がり、口縁端面はナデ凹む。128 は口縁部が短く直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。130・131 は長頸壺である。130 は頸部に沈線 2 条を施す。131 は肩部小片で刺突文を施し、内面には円弧叩きを施す。赤焼土器。132 は底部側面から貫通させたような径 0.3 ㎝大の円孔が、断面に一部看取される。内外面共に回転ナデ調整を施し、底部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。133 は甕の口頸部で口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に沈線状の凹みがある。肩部外面は平行叩き後回転カキメ調整、内面には円弧叩きを施す。134 ～ 136 は陶磁器である。134・135 は磁器製の段皿で口縁部は上外方に屈曲し、口縁端部は丸く仕上げる。胎土は 134 が灰白色、135 は灰色を呈し、透明釉が全面に掛けられている。136 は肥前系陶器の段皿で、胎土は灰黄褐色を呈し、灰白色の釉が部分的に掛けられている。137 ～ 144 は土師器である。137 は坏で口縁部は内傾し、口縁端部は尖り気味に丸い。底部は平底で、外面には回転ヘラ切り痕を施す。138・139 は内黒椀の底部で、貼付による高台が付く。140・141 は甕形土器である。140 は口縁部が外反し、口縁端部は尖り気味に丸い。141 は肩部片で、外面にハケメ調整（6 ～ 7 本 / ㎝）を施す。142 は韓式系の甑形土器の把手部で、把手先端部は面取りされる。143・144 は土釜の底部片と脚部片である。

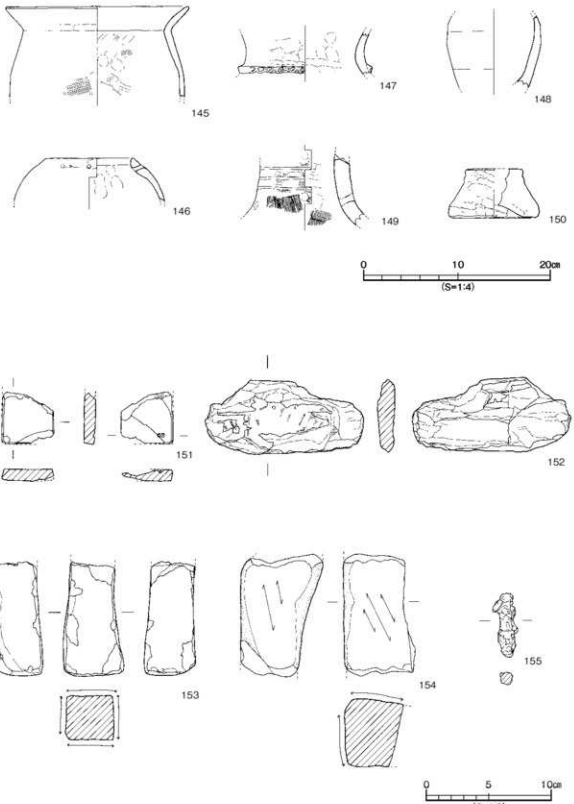


第24図　包含層出土遺物実測図（１）

145 ～ 150 は弥生土器である。145 は甕形土器で口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸い。146 ～ 148 は壺形土器である。146 は無頸壺で、口縁部に径 0.3 ㎝大の円孔２ヶを看取する。147 は頸部で断面三角形状の凸帯を貼付け、凸帯上に刺突文を施す。148 は胴部である。149 は器台形土器の柱部で、沈線文３条と径 0.7 ～ 0.9cm 大の円孔２ヶを看取する。外面にはタテ方向、内面にはヨコ方向のハケメ調整（８本／cm）を施す。150 は支脚形土器で、１／２の残存である。151 は石帯で、径２㎜大の孔を穿つ。152 は緑色片岩製の石庖丁で、敲打段階の未成品である。153・154 は砥石で、153 は四面、154 は二面の砥面をもつ。石材は 153 が石英粗面岩、154 は砂岩である。155 は鉄釘である。



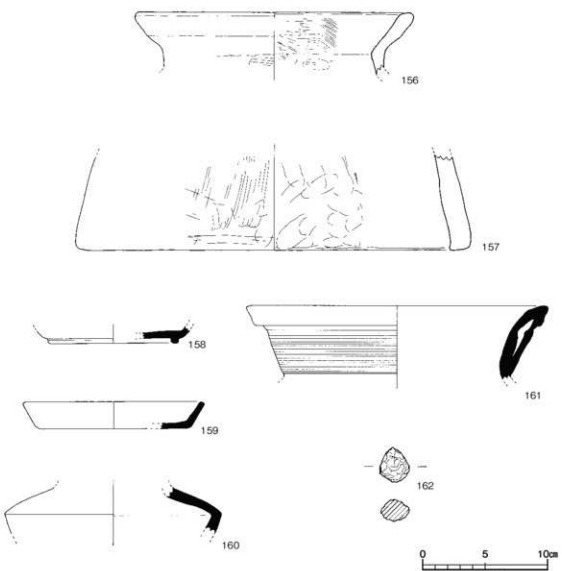
第 25 図　包含層出土遺物実測図（２）



第26図　包含層出土遺物実測図（3）

3）地点不明出土遺物（第 27 図、図版 10）

156・157 は土師器である。156 は甕形土器で口縁部は内傾し、口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部中位には、わずかに稜をもつ。157 は移動式カマドの底部で、裾端部は平坦面をなす。器壁は、厚さ 1.7 cmを測る。外面はハケメ調整を施し、内面には指頭痕を顕著に残す。158 ～ 161 は須恵器である。158 は坏の底部で、直立する短い高台が付く。159 は皿で口縁部は外傾し、口縁端部は丸い。160 は長頸壺の肩部で、内外面共に回転ナデ調整を施す。161 は甕で口縁端部は肥厚し、頸部には火ぶくれ痕がみられる。頸部外面には、回転カキメ調整を施す。162 は鉄滓で、重量 8.4 g を測る。



第 27 図　地点不明出土遺物実測図

４．まとめ

本調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認した。ここでは、時代別にまとめを行う。

弥生時代では、終末期の竪穴住居ＳＢ１を検出した。規模は不明であるが円形住居と考えられ、住居内からは該期の遺物が少量出土した。なお、住居内や住居以外の遺構内からは弥生時代前期から後期に時期比定される土器の出土も見られた。

古墳時代では、竪穴住居や掘立柱建物のほか溝や土坑を検出した。いずれも、古墳時代後期から終末期に時期比定される遺構である。ＳＢ２は隅丸方形住居で、住居の廃絶時期は古墳時代後期後半、６世紀後半頃と考えられる。掘立１・２は２× ２間または２× １間以上の小型建物で、構築時期は出土遺物より６世紀前半以降と思われる。ＳＤ１は北東－南西方向に延びる直線的な溝で、溝内からは古墳時代中期後半から７世紀前半頃の土器類が混在して出土した。このほか７基の土坑を検出したが、ＳＫ１は６世紀中葉、その他は７世紀初頭から前半期に時期比定されるものである。このうち、ＳＫ１とＳＫ３からは径５～ 20 ㎝、厚さ３～ 10 ㎝大の河原石が土器類と共に数多く出土した。遺物ではＳＤ１より線刻を施した土器片や、包含層中からは韓式系土器などが出土している。

古代では平安時代中期、10 世紀代の自然流路ＳＲ１を検出した。北東－南西方向の流路で、流路幅は推定 10 ｍ以上を測る。ＳＲ１からは弥生土器や土師器、須恵器のほか緑釉陶器片や瓦片、鉄滓などが出土している。樽味地区における古代の遺構は検出事例が少なく、調査地南方にある樽味四反地遺跡１次調査ではＳＲ１と同時期の流路が報告されている。なお、１次調査検出の流路内からは土師器や須恵器のほか緑釉陶器や灰釉陶器の破片などが出土している。このほか、包含層資料ではあるが石帯が１点出土している。

中・近世の遺構は未検出であるが、包含層中より室町時代から江戸時代に時期比定される土師器片や陶磁器片などが少量出土している。

今回の調査で注目される遺構は、古代の流路ＳＲ１である。樽味地区における古代の遺構は検出事例が少なく、集落様相は不明な点が多い。しかしながら、流路出土の緑釉陶器や瓦などの遺物は樽味地区において官衙あるいは寺院に関連する施設の存在を伺わせる資料といえよう。今後、樽味地区の集落変遷を解明するうえで、古代集落の解明も重要課題のひとつになろう。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）遺物観察表の各記載について。

法量欄　（　）：復元推定値

調整欄　土器の各部位名称を略記した。
例）口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部、
体→体部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土、赤粒→赤色酸化土粒。
（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）石・長（１～４）→「１～４㎜大の石英・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表3　竪穴住居一覧

竪穴(SB)	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	内部施設	出土遺物	時　期	備　考
1	D5･6	円形	(2.35)×(1.30)×0.30	周壁溝･高床部	弥生	弥生末	掘立1に切られる
2	D5･6	隅丸方形	(2.70)×(1.20)×0.10		土師･須恵･石	6世紀後半	

表4　掘立柱建物一覧

掘立	地　区	方　位	規　模 （間）	桁行長 （m）	梁行長 （m）	出土遺物	時　期	備　考
1	C5～D6	南北	2×2	3.58	3.00	弥生･土師･須恵	6世紀前半以降	SB1を切る
2	B･C4	東西	(1)×2	4.20	(2.50)	弥生･土師･須恵･石	6世紀前半以降	

表5　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B1～C2	レンズ状	(5.20)×1.60×0.34	灰色砂 他	弥生･土師･須恵	7世紀前半	SK5･6を切る

表6　自然流路一覧

流路(SR)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B3～C3	レンズ状	(12.00)×8.80×0.50	褐色砂質シルト 他	弥生･土師･須恵 瓦･緑釉･石･鉄	10世紀	Ⅳ層が覆う

表7　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	A5	（楕円形）	逆台形状	(2.20)×(0.96)×0.50	褐色シルト 他	弥生･須恵･石	6世紀中葉	
2	B･C3	不整楕円形	逆台形状	2.38×1.60×0.20	暗褐色シルト	土師･須恵	7世紀初頭～前半	SK7を切る
3	C1	楕円形	逆台形状	(1.84)×(1.40)×0.25	灰色粘質土 他	土師･須恵･石	7世紀初頭	
4	B5･6	不整楕円形	逆台形状	(4.48)×2.16×0.22	暗褐色シルト （褐色シルト混）	弥生･石	古墳時代以前	V層が覆う
5	B1～C2	（楕円形）	皿状	(2.42)×(1.66)×0.18	黒色粘質土		7世紀前半以前	SD1に切られる
6	C1	（円形）	皿状	(1.60)×(1.40)×0.12	黒褐色シルト		7世紀前半以前	SD1に切られる
7	C2･3	楕円形	逆台形状	3.30×(2.70)×0.60	暗褐色シルト 他	弥生･土師 須恵･石	7世紀初頭	SK2に切られる

表8　柱穴一覧　（1）

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
1	C6	（円形）	(0.55)×(0.52)×0.12	暗褐色土（黄色土混）		
2	C6	円形	0.35×0.35×0.08	暗褐色土（黄色土混）	土師･須恵	
3	C5	楕円形	0.60×0.45×0.21	暗褐色土（黄色土混）		
4	B5	円形	0.30×0.28×0.31	黒褐色土	弥生	
5	B4･5	円形	0.60×0.60×0.17	褐色土	弥生	
6	C5	楕円形	0.75×0.53×0.20	黒褐色土	弥生	
7	C4	楕円形	0.80×0.60×0.12	黒褐色土	弥生	
8	C5	円形	0.25×0.25×0.08	黒褐色土		
9	C3	円形	0.45×0.43×0.06	黒褐色土		
10	C3･4	楕円形	0.68×0.60×0.10	黒褐色土		

柱穴一覧　（2）

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
11	C3	楕円形	0.58×0.46×0.21	黒褐色土	弥生	
12	C3	楕円形	0.64×0.54×0.12	黒褐色土		
13	C3	円形	(0.35)×(0.12)×0.09	黒褐色土		
14	C3	円形	0.20×0.20×0.06	灰色土		
15	B·C3	円形	0.40×0.38×0.06	暗褐色土（黄色土混）	須恵·石	
16	B·C3	円形	0.30×0.30×0.07	灰色土	土師	
17	C2	円形	0.25×0.25×0.06	灰色土		
18	C2·3	円形	0.50×(0.43)×0.06	灰色土		
19	C1	（円形）	(0.35)×(0.10)×0.10	暗褐色土（黄色土混）	土師·須恵	SK6基底面検出
20	C1	（円形）	(0.35)×(0.08)×0.08	暗褐色土（黄色土混）		SK6基底面検出

表９　ＳＢ１出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径 (20.8) 残高 0.9	口縁端部は上方に拡張し、口縁端面はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石·長(1) ○		
2	甕	口径 (10.8) 残高 4.8	「く」の字状口縁。	ハケ→ナデ	①ハケ→ヨコナデ ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石·長(1~5)金 ○	黒斑	7
3	甕	残高 6.1	胴部小片。	タタキ→ ハケ(8本/cm)	ハケ(8本/cm) →ナデアゲ	暗灰褐色 淡茶色	石·長(1) ○	黒斑	
4	甕	底径 3.1 残高 4.5	平底。1/2の残存。	ナデ ⑥ナデ·ヨコナデ	ナデ ナデアゲ	暗黒褐色 淡茶色	石·長(1~2) ○	黒斑 煤付着	
5	壺	口径 (26.5) 残高 1.6	口縁端面に竹管文（径0.4cm）1列と半截竹管文1列あり。	①④ヨコナデ ハケ(10本/cm) →ヨコナデ	ヨコハケ (10本/cm)	淡茶褐色 淡茶褐色	石·長(1~2)金 ○	黒斑	7
6	高坏	底径 (16.2) 残高 4.6	脚部に凹線文1条と矢羽根透かしを施す。脚部端面に凹線文2条あり。	⑥ハケ→ヨコナデ ④⑤ヨコナデ	板ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石·長(1)金 ○		

表10　ＳＢ２出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
7	坏身	残高 2.5	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 白灰色	密 ○		
8	坏身	残高 1.5	受部は上外方に短く伸びる。	マメツ	マメツ	淡灰色 淡灰色	密 ○		
9	高坏	つまみ径 3.2 残高 1.6	有蓋高坏。つまみ上部は凹む。	回転ナデ	ナデ	淡灰白色 灰色	密 ○		
10	甕	口径 (20.7) 残高 5.3	内湾口縁。口縁端部は内傾する面をもつ。	①ヨコナデ ハケ(マメツ)	①ヨコナデ ハケ(マメツ)	赤茶色 赤茶色	石(1~3)金 赤粒 ○		7

表11　ＳＢ２出土遺物観察表　　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備　考	図版
11	剥片	—	サヌカイト	2.5	1.7	0.2	1.1		

表12　掘立1出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
12	坏蓋	口径 (11.5) 残高 2.5	断面三角形状の丸味をもつ稜。口縁端部は内傾する面をもつ。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	SP④	
13	坏蓋	残高 2.3	断面三角形状の丸味をもつ稜。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 黒灰色	密 ○	SP③	
14	甕	残高 2.4	頸部片。	①ヨコナデ ハケ→ナデ	①ヨコナデ ハケ→ナデ	茶褐色 明茶褐色	石・長(1)金 ○	SP②	
15	甕	口径 (18.1) 残高 3.0	「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。小片。	マメツ (ヨコナデ)	①ヨコナデ ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～2)金 ○	SP⑧	
16	甕	残高 2.7	貼付凸帯。凸帯上に指頭押圧を施す。	ナデ	ナデ	茶褐色 黄褐色	石・長(1～2) ○	SP④	

表13　掘立2出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
17	坏蓋	口径 (12.9) 残高 2.8	断面三角形状の丸味をもつ稜。口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	SP①	
18	甕	残高 2.8	口頸部小片。	マメツ	ナデ(マメツ)	橙色 橙色	長(1) ○	SP④	
19	鉢	底径 (5.6) 残高 7.6	突出する上げ底。	⑧板ナデ→ハケ ⑧ハケ→ナデ	⑨ナデ→ハケ ⑨ナデ	暗褐色 淡灰褐色	石・長(1～2) ○	SP② 黒斑 葉付着?	

表14　ＳＤ１出土遺物観察表　　土製品　　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
20	坏蓋	口径 (11.3) 残高 4.0	断面三角形状の丸味をもつ稜。口縁端部は内傾する面をもつ。	①回転ヘラケズリ ①回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	3層	
21	坏身	口径 (9.5) 残高 3.2	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	3層	7
22	坏身	口径 (10.6) 残高 4.1	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みあり。小片。	①回転ナデ ⑩回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	3層	
23	壺	(8.5) 3.7	短頸壺。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は丸い。小片。	①回転ナデ ⑩カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	3層	7
24	甕	残高 3.8	胴部片。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ(マメツ)	明橙色 明橙色	石・長(1～2)金 ○	3層	
25	甕	残高 4.1	2条1組によるヘラ描き沈線文4条と刻目あり。小片。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡橙茶色	石・長(1～2)金 赤粒 ○	3層 黒斑	7
26	坏身	口径 (9.2) 残高 3.5	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みあり。	①回転ナデ ⑩回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	2層	
27	坏身	口径 (12.1) 残高 4.7	底部は平底風。たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みあり。	①回転ナデ ⑩回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	2層	7
28	坏身	口径 (12.0) 残高 3.0	底部は平底風。たちあがり端部は丸くおさめ、受部端は丸い。	①回転ナデ ⑩回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	2層	7
29	高坏	口径 (14.4) 残高 7.0	無蓋高坏。坏部外面に8条の波状文、柱部外面に長方形透かし3ヶ所あり。	①回転ナデ ⑤⑥回転ヘラケズリ ⑩カキメ	①回転ナデ ⑪⑫ナデ ⑩回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	2層	7
30	高坏	底径 (11.0) 残高 5.1	2ヶ所以上の透かしあり。小片。	⑩カキメ ⑪⑫回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ○	2層	

ＳＤ１出土遺物観察表　　土製品　　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
31	壺	口径 (16.8) 残高 3.0	陶質系。脈部に1条の凸線と4条以上と11条の波状文あり。	回転ナデ	マメツ	暗灰色 灰色	密 ○	2層	7
32	甕	口径 (21.2) 残高 3.0	口縁部中位に稜をもち、口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	密 ○	2層	
33	甕	口径 (23.0) 残高 8.4	口縁部は直立し、口縁端部は平坦面をなす。	①ハケ（6本/cm） ナデ	②ハケ（6～7本/cm） ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長（1～4）金 ○	2層	
34	鉢	口径 (14.4) 残高 4.5	外反口縁。口縁端部は尖り気味。	ナデ（マメツ）	①ヨコナデ ナデ	赤茶色 黄褐色	石・長（1～5）金 ○	2層	
35	壺	残高 6.2	胴胴部小片。	⑧ハケ（8本/cm） ⑨ハケ（4本/cm）	⑧ナデ ⑨ハケ→ナデ	褐色 褐色	石・長（1～2）金 ○	2層	
36	坏蓋	口径 (12.5) 残高 4.2	扁平な天井部。断面三角形状の鍔い稜をもち、口縁端部は内傾する。	①回転ヘラケズリ ①回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密・金 ○	1層	
37	坏蓋	口径 (13.0) 残高 3.4	断面三角形状の鍔い稜をもち、口縁端部は内傾する。	②回転ヘラケズリ ①回転ナデ	②ナデ ①回転ナデ	灰色 青灰色	密 ○	1層	
38	高坏	口径 (18.7) 残高 4.0	無蓋高坏。坏部中位に凸線2条と凸線下に8～9条の波状文あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 淡灰色	密 ○	1層	
39	高坏	底径 (8.2) 残高 5.2	脚部に透かしが2ヶ所以上あり。	回転ナデ	⑧ナデ ⑧回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	1層	
40	椀	残高 7.7	胴部中位に沈線2条あり。	⑩回転ナデ ⑩平行叩き→カキメ	回転ナデ	灰色 淡灰色	密 ○	1層	
41	甕	口径 (19.4) 残高 3.0	内湾口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ （マメツ）	①⑩ヨコナデ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長（1～2）金 ○	1層	
42	甕	残高 1.9	胴部にヘラ描き沈線文1条あり（記号か）。	①ヨコナデ ハケ→ナデ	①ヨコナデ ナデ（工具痕?）	明褐色 明褐色	石・長（1）金 ○	1層	
43	甕	残高 3.4	胴部にヘラ描き沈線文2条あり（記号か）。	ハケ	①ヨコナデ ナデ（ハケ?）	淡褐色 淡褐色	石・長（1～2）金 ○	1層	7
44	鉢	底径 (8.9) 残高 4.6	脚付鉢。	ナデ（マメツ）	ナデ（マメツ）	明橙褐色 明橙褐色	石・長（1～3） 赤粒 ○	1層	
45	坏身	口径 (10.5) 残高 1.6	たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	乳白色 乳白色	密 ○	SP①	
46	高坏	底径 (9.0) 残高 3.9	脚端部は段をなし、下外方へ屈曲する。脚端面に凹線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ○	SP①	
47	高坏	底径 (8.3) 残高 3.8	脚裾部には凸線が巡り、柱部に透かしが2ヶ所以上あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰色	密 ○	トンチ	

表15　ＳＲ１出土遺物観察表　　土製品　　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
48	坏蓋	口径 (10.4) 残高 2.7	天井部は丸味を帯び、かえりはわずかに内傾し、端部は丸い。	①回転ヘラケズリ ①回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○		
49	坏蓋	口径 (16.3) 残高 1.8	扁平な天井部。かえりは下方に屈曲し、端部は尖り気味。	①回転ヘラケズリ ①回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○		
50	坏身	口径 (12.1) 残高 4.8	たちあがりは内傾し、端部は丸い。	①回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	①回転ナデ ⑥ナデ	青灰色 灰色	密・金 ○		8

ＳＲ１出土遺物観察表　　土製品　　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
51	坏身	残高　14	底部にヘラ記号あり。	回転ヘラケズリ	回転ナデ ④ナデ	灰茶色 灰茶色	密 ○		8
52	坏	口径　(9.6) 器高　3.9	口縁部は内湾気味に立ち上がり、体部中位に沈線1条あり。	①回転ナデ ④回転ヘラケズリ	①回転ナデ ④ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		8
53	坏	口径　(9.6) 底径　(6.0) 器高　3.4	平底、口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸い。	①回転ナデ ④回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
54	坏	口径　(11.2) 底径　(5.7) 器高　3.5	突出する平底の底部。	回転ナデ ④回転ヘラ切り	①回転ナデ ④ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		8
55	坏	底径　(9.5) 残高　2.5	「ハ」字状に開く高台。	④カキメ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
56	高坏	口径　(16.3) 残高　3.2	無蓋高坏。坏部中位に凸線1条と波状文5条以上あり。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	青灰色 灰色	密 ○		
57	高坏	残高　6.3	1/3の残存。	④回転ナデ →ナデ ⑧回転ナデ	⑤回転ナデ →ナデ ⑧回転ナデ	灰黄白色 灰黄白色	密 ○		
58	高坏	底径　(10.8) 残高　4.2	柱部中位に凸線1条あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 淡灰色	密 ○		8
59	皿	口径　(17.7) 底径　(8.4) 器高　3.8	平底、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味。	ナデ ④回転ヘラ切り	①回転ナデ ④ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ○		
60	鉢	口径　(11.2) 残高　3.4	口縁部は屈曲し、口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 淡灰色	密 ○		
61	鉢	残高　4.8	円孔（径14cm）あり。	⑤ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
62	壺	口径　(22.2) 残高　1.9	口縁端部は下方に肥厚し、口縁部に歪みあり。	①回転ナデ ④カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
63	壺	残高　6.0	四耳壺。	④回転ナデ ④平行叩き カキメ	④回転ナデ ④円弧叩き	灰黄色 灰色	密 ○	自然釉	8
64	甕	残高　8.0	2条の凸線と凸線間に11条と14条の波状文あり。	同転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	自然釉?	
65	甕	底径　(7.0) 残高　2.9	緑釉陶器。畑出高台。内外面に濃緑色の釉が残る。	施釉	施釉	濃緑色 濃緑色	密 ○	胎土 灰色	8
66	坏	口径　(15.8) 残高　3.5	口縁端部内面に沈線状の凹みあり。赤色塗彩土器。	ヨコナデ	①ヨコナデ ⑨ミガキ?	橙褐色 橙褐色	密・金 ○		8
67	坏	底径　(9.4) 残高　1.4	平底、赤色塗彩土器。	ヨコナデ ⑥ヘラケズリ	ヨコナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	密・金 ○		
68	坏	底径　(10.6) 残高　0.8	平底。赤色塗彩土器。	ヘラケズリ	ヨコナデ	淡乳白色 淡乳白色	密 ○		
69	皿	口径　(14.9) 残高　2.0	口縁端部は内傾する凹面をもつ。赤色塗彩土器。	ヨコナデ ⑥ヘラケズリ	ヨコナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	密 ○		
70	高坏	残高　6.4	中実。	面取り→ナデ （マメツ）	ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長（1～2） ○		
71	甕	口径　(21.2) 残高　4.8	口縁端面はナデ凹む。器壁は厚い。	④ヨコナデ ハケ（5本/cm）	⑤ヨコナデ・ハケ ⑨ケズリ	淡茶褐色 淡灰茶色	石・長（1～3）金 ○	黒斑	

ＳＲ１出土遺物観察表　　土製品　　（3）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
72	甕	口径 (21.5) 残高 6.1	口縁端部は内傾する面をもつ。	①ヨコナデ ハケ(5本/cm)	ハケ→ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1～4) ◎		8
73	壺	残高 4.6	平底。器壁は厚い。	ナデ	指頭痕	淡褐色 淡褐色	石・長(1～3)金 赤粒 ◎		8
74	甕	残高 3.4	瓦質土器。把手部。	ナデ	—	灰色	密・金 ◎		
75	壺	口径 (19.4) 残高 2.9	複合口縁壺。山形文を縦横沈線で充填。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1～2)金 ◎		8
76	壺	底径 (7.8) 残高 4.8	わずかに上げ底。	ナデ・ミガキ ◎工具ナデ	ナデ→ミガキ	乳橙色 乳黄色	石・長(1～3) ◎		
77	高坏	残高 6.4	柱部に3条と4条の沈線文あり。	ミガキ→ナデ	ナデ(工具痕)	淡乳褐色 灰褐色	石・長(1～3)金 赤粒 ◎		
78	支脚	残高 7.0	中空。	タタキ	シボリ痕	淡乳橙褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
79	瓦	残長 9.5 厚さ 1.4	丸瓦。	組縄叩き →ナデ消し	布目痕 →ナデ消し	青灰色 青灰色	密 ◎		

表16　ＳＲ１出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
80	扁平片刃石斧	完形	緑色片岩	13.1	6.4	1.6	201.1	未成品	9
81	砥石	約2/3	砂岩	10.0	4.9	3.2	220.7		9

表17　ＳＲ１出土遺物観察表　　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
82	鉄滓	—	鉄	7.5	7.0	2.8	142.2		9
83	鉄滓	—	鉄	3.6	5.2	2.9	38.4		9
84	鉄滓	—	鉄	2.6	3.1	1.9	12.8		9

表18　ＳＫ１出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
85	坏蓋	口径 (14.6) 残高 3.9	天井部と口縁部の境界に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 青灰色	密 ◎		
86	甕	口径 (23.3) 残高 2.8	口縁端部は方形状に肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
87	壺	口径 (18.8) 残高 3.6	複合口縁壺。櫛描き波状文(7条2段)あり。	ハケ→ナデ	ナデ ヨコナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～3) ◎		
88	甕	底径 4.7 残高 2.3	平底。完形品。	ミガキ→ナデ (マメツ)	ハケ・ミガキ →ナデ	褐橙色 暗褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑?	
89	支脚	残高 8.4	中空。	ナデ 指頭痕	ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1～2)金 赤粒 ◎		

表19　ＳＫ２出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考	図版
90	坏蓋	口径 (13.2) 残高 2.5	小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎			
91	甕	口径 (22.0) 残高 4.1	外反口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	㋑ヨコナデ ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～2)金 赤粒 ◎			

表20　ＳＫ３出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考	図版
92	坏蓋	口径 (11.4) 器高 4.4	扁平な天井部。天井部と口縁部の境界は凹み、口縁端部は内傾する面をもつ。	②回転ヘラケズリ ①回転ナデ	回転ナデ	暗灰黄褐色 灰色	密 ◎			9
93	坏蓋	口径 (12.2) 残高 4.0	扁平な天井部。断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。	③回転ヘラケズリ ②回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎			
94	甕	口径 (24.8) 残高 4.9	口縁端部は下方に肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎			
95	甕	残高 7.9	頸胴部片。大型品。	①ナデ ⑩平行叩き	①ナデ ハケ(15本/cm) ⑩円弧叩き	灰色 灰色	密 ◎			
96	高坏	残高 10.3	中実。	ナデ (ミガキ痕)	ナデ(マメツ)	乳橙色 橙褐色	石・長(1～2) 赤粒 ◎			9

表21　ＳＫ３出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
97	敲石	ほぼ完形	砂岩	13.3	12.4	6.6	1761.1		9

表22　ＳＫ７出土遺物観察表　　土製品　　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考	図版
98	坏身	口径 (12.2) 残高 4.3	たちあがり端部は内傾する段をなす。	回転ナデ ⑩回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎			
99	坏身	口径 (12.0) 残高 3.7	たちあがり端部は丸い。	回転ナデ ⑩回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎			
100	坏身	残高 2.6	受部は外方に伸びる。	回転ナデ ⑩回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎			
101	高坏	底径 (8.2) 残高 4.5	脚柱部に透かしが1ヶ所以上あり。	回転ナデ (工具痕)	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎			
102	提瓶	口径 (7.4) 残高 3.2	外反口縁。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎			
103	提瓶	残高 16.2	体部片。	カキメ 回転ヘラケズリ	ナデ (指頭痕)	暗灰色 暗灰色	密 ◎		自然釉	9
104	壺	口径 (17.0) 残高 1.9	口縁部は上外方に屈曲。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎			
105	壺	残高 6.0	やや扁球形の胴部。	㊧回転ナデ ㊨回転ヘラケズリ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎			
106	甕	口径 (23.4) 残高 4.1	口縁部は下外方に肥厚。	㋑回転ナデ 叩き→回転ナデ	ナデ・回転ナデ 叩き?	青灰色 青灰色	密 ◎			

ＳＫ７出土遺物観察表　　土製品　　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
107	甕	口径 (25.7) 残高 5.8	口縁部は長方形状に肥厚。	回転ナデ	ナデ	青灰色 灰褐色	密 ◎		9
108	甕	口径 (16.6) 残高 3.4	内湾口縁、口縁端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ （マメツ）	マメツ （ハケ）	淡乳褐色 褐黄色	石・長(1)金 赤粒 ◎		
109	甕	口径 (21.0) 残高 3.0	口縁端面に凹線状の凹みあり。	㋐㋑ヨコナデ ミガキかハケ →ナデ	㋐㋑ヨコナデ ハケ（マメツ）	淡黄橙色 淡黄褐色	長(1)赤粒 ◎		
110	甕	残高 6.0	外反口縁。	①ハケ→ナデ ⑧ハケ （5～6本/cm）	ナデ ヨコナデ	褐黄色 褐黄色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
111	鉢	残高 2.7	脚付鉢。小片。	ナデ ミガキ	ミガキ（マメツ） ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) 赤粒 ◎		
112	甕	底径 (6.0) 残高 3.4	上げ底。	マメツ	ナデ	橙褐色 暗灰色	石・長(1～4)金 赤粒 ◎	黒斑	

表 23　柱穴出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
113	坏身	口径 (12.2) 残高 2.9	たちあがりは内傾し、受部はやや外上方向に伸びる。	回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP2	
114	坏身	口径 (13.0) 残高 2.3	たちあがりは内傾し、受部はやや外上方向に伸びる。受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎	SP15	
115	壺	残高 6.1	短頸壺の肩部。	カキメ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP2 自然釉	
116	壺	底径 8.4 残高 4.2	わずかに上げ底。	ミガキ （マメツ）	ナデ （マメツ）	浅黄橙色 に.ぶい黄橙色	石・長(1～4) ○	SP5	

表 24　包含層出土遺物観察表　　土製品　　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
117	坏蓋	口径 (13.4) 残高 1.1	天井部は屈曲部をもち、口縁部は下方に屈曲する。	マメツ	マメツ	灰白色 淡黄色	密 ○		
118	坏	口径 (10.9) 残高 3.6	口縁部はわずかに外反し、口縁端部は尖り気味。	回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
119	坏	底径 (8.9) 残高 1.5	底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。	回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑧ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
120	坏	口径 (13.4) 底径 (8.4) 器高 4.5	高台付の坏。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎	自然釉	10
121	皿	口径 (18.5) 底径 (11.6) 器高 3.7	平底、口縁部はわずかに外反し、口縁端部は尖り気味。	回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑧ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
122	高坏	口径 (11.7) 残高 3.6	無蓋高坏。坏部中位に凸線あり。	回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		10
123	高坏	底径 (17.2) 残高 2.3	脚端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ◎	自然釉	10
124	鉢	口径 (24.4) 残高 4.6	口縁端部は上内方に肥厚し、口縁端面に凹線状の凹みあり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
125	壺	口径 (12.0) 残高 5.7	口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味。	①回転ナデ ⑧平行叩き	①回転ナデ ⑧円弧叩き	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	

包含層出土遺物観察表　　土製品　　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
126	壺	口径 （15.9） 残高 3.7	凸線1条と波状文（6～8本と4～5本）あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		
127	壺	口径 （11.9） 残高 2.4	短頸壺。口縁端面はナデ凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	自然釉	
128	壺	口径 （6.4） 残高 4.4	短頸壺。口縁端部は実り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
129	壺	残高 3.8	短頸壺の頸胴部片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
130	壺	残高 11.3	長頸壺。頸部に沈線2条あり。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ○	自然釉	
131	壺	残高 2.5	長頸壺の肩部小片。刺突文あり。赤焼土器。	回転ナデ	円弧叩き →回転ナデ	にぶい赤褐色 褐灰色	密 ◎		
132	壺	底径 （8.1） 残高 3.5	平底。円孔（径0.3cm）を看取。	回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
133	甕	口径 （24.0） 残高 7.5	口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に沈線状の凹みあり。	①回転ナデ ⑨平行叩き →カキメ	①回転ナデ ⑨円弧叩き	暗オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ◎	自然釉	10
134	皿	口径 （11.2） 残高 1.9	磁器の段皿。口縁部は土外方に屈曲し、口縁端部は丸い。	施釉	施釉	透明釉	密 ◎	胎土 灰白色	
135	皿	口径 （9.9） 残高 1.6	磁器の段皿。口縁部は外傾し、端部は丸い。	施釉	施釉	透明釉	密 ◎	胎土 灰色	
136	皿	口径 （11.9） 残高 2.7	肥前系陶器の段皿。口縁部は外傾し、端部は丸い。	①施釉 ⑧回転ナデ	施釉	灰白色釉	密 ○	胎土 灰黄褐色	
137	坏	口径 （12.2） 底径 （7.0） 器高 3.0	平底。口縁端部は実り気味。	回転ナデ ⑧回転ヘラ切り	回転ナデ	橙色 橙色	長（1） ○		
138	椀	底径 （6.6） 残高 2.1	内黒椀。貼付輪高台。	ヨコナデ ナデ	ナデ	浅黄橙色 褐灰色	石・長（1～2） ○		
139	椀	底径 （6.8） 残高 1.6	内黒椀。貼付輪高台。	ヨコナデ ナデ	ナデ	暗灰色 黒褐色	石・長（1） ○		
140	甕	口径 （20.2） 残高 5.0	外反口縁。口縁端部は実り気味に丸い。	⑰マメツ ⑲ハケ （5本/cm）	④マメツ（ハケ） ⑲ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～5） ○		
141	甕	残高 10.5	胴部片。	ハケ （6～7本/cm）	ナデ→ハケ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ◎		
142	甑	残高 4.4	把手先端部は面取りされる。韓式系土器。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	長（1）金・赤粒 ◎		10
143	土釜	残高 8.0	底部片。	ナデ	マメツ	淡黄色 にぶい橙色	石・長（1～4） ○		
144	土釜	残高 8.5	脚部片。断面三角形。	ナデ	—	にぶい橙色	石・長（1～2） ○		
145	甕	口径 （19.2） 残高 9.6	外反口縁。口縁端部は丸い。	マメツ（ハケ）	④マメツ ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石（1～2） ○		
146	壺	口径 （9.0） 残高 4.6	無頸壺。口縁部に円孔（径0.3cm）2ヶを看取。	ナデ	㉑⑱ヨコナデ ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○		10

包含層出土遺物観察表　土製品　（3）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
147	壺	残高 4.4	貼付凸帯。凸帯上に刺突文あり。	ナデ・ヨコナデ（マメツ）	ナデ（マメツ）	灰白色 灰白色	石・長（1～3） ○		
148	壺	残高 7.7	胴部。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 浅黄橙色	石・長（1～2） ◎		
149	器台	残高 7.7	沈線文3条と円孔（径0.7～0.9cm）2ヶを看取。	ハケ（8本/cm）	板ナデ→ナデ ハケ（8本/cm）	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ◎		
150	支脚	底径 （8.6） 器高 5.2	1/2の残存。	ナデ	—	にぶい橙色	石・長（1～4） ○	黒斑	

表25　包含層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
151	石皿	約3/4	粘板岩	4.1	4.1	0.9	24.9		10
152	石庖丁	完形	緑色片岩	12.5	5.8	1.3	132.5	未成品	10
153	砥石	約1/2	石英粗面岩	9.0	4.7	3.5	253.9		10
154	砥石	約1/2	砂岩	9.6	6.3	7.4	453.3		10

表26　包含層出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
155	釘	破片	鉄	5.0	1.8	0.9	11.0		

表27　地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
156	甕	口径 （21.6） 残高 4.9	内湾口縁。口縁端部は内傾。口縁部中位に稜あり。	ヨコナデ ハケ・ナデ	ハケ→ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎		
157	カマド	底径 （30.8） 残高 7.5	鍔端部は平坦面をなす。	ナデ・ハケ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～6） ◎		10
158	坏	底径 （10.0） 残高 1.3	高台坏。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
159	皿	口径 （13.8） 底径 （11.5） 器高 2.1	平底。口縁部は外傾し、口縁端部は丸い。	マメツ（ナデ）	マメツ	灰白色 灰白色	密 △		
160	壺	残高 3.7	長胴壺。肩部と体部の境界は明瞭。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
161	甕	口径 （23.0） 残高 5.8	火ぶくれ痕あり。	㊀回転ナデ カキメ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	密・金 ◎	自然釉	10

表28　地点不明出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
162	鉄滓	—	鉄	2.7	2.4	1.7	8.4		

第４章　樽味高木遺跡15次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2006（平成18）年５月18日、浅川ハツコ氏より松山市樽味二丁目90－２地内における宅地開発に伴う埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

確認願が提出された申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地『No.81　樽味遺物包含地』内に所在する。申請地周辺には、樽味高木遺跡（１～14次調査）、樽味立添遺跡（１～４次調査）、樽味四反地遺跡（１～19次調査）、樽味遺跡（愛媛大学構内）などがあり、縄文時代晩期から中世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、申請地内における埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、2006（平成18）年５月31日に試掘調査を実施することとなった。調査の結果、竪穴住居や土坑、溝、柱穴のほか、弥生土器や土師器、須恵器を含む遺物包含層を検出した。

2007（平成19）年10月15日には同じ申請地内において、みどり建設興業株式会社代表取締役濱田憲史郎氏より共同住宅建築に伴う埋蔵文化財の確認願が文化財課に提出された。文化財課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについての協議を重ね、共同住宅建築によって消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は申請者と埋文センターが委託契約を結び、申請地内における弥生時代から中世までの集落構造解明を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり、2007（平成19）年12月４日より開始した。

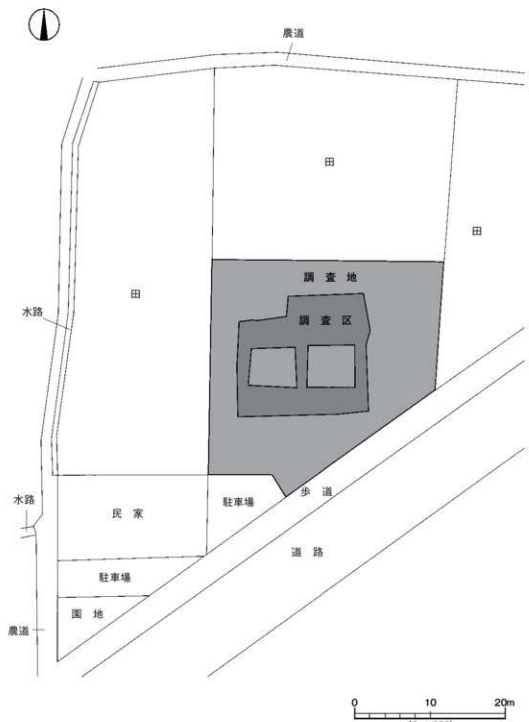
（２）調査の経緯

調査は、2007（平成19）年12月４日から2008（平成20）年１月31日まで屋外調査を実施した。

2007（平成19）年12月４日、調査を開始する。重機の使用により表土の掘削を行い、12月５日、第Ⅳ層上面にて遺構検出作業を行う。調査では竪穴住居や土坑、柱穴を確認する。12月19日、遺構検出状況写真を撮影し、遺構の掘り下げや遺構・遺物の測量を行う。2008（平成20）年１月28日、ローリングタワーを用いて遺構完掘状況写真を撮影し、同日、現地説明会を行う。１月29日、発掘用具の撤去を行い、１月31日に屋外調査を終了する。

（３）調査組織

所　在　地：松山市樽味二丁目90－２の一部
調査期間：2007（平成19）年12月４日～2008（平成20）年１月31日
調査面積：169.5㎡
調査主体：松山市教育委員会
　　財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当：水本完児、宮内慎一



第 28 図　調査地測量図

2．層　位

（1）基本層位（第29・30図）

調査地は松山平野北東部、石手川左岸の標高42.50～42.85ｍに立地する。調査以前は水田として利用されていた。調査で確認した土層は、以下の四種類である。

Ⅰ層－水田耕作に伴う耕作土で、土色・土質の違いにより２つに分層される。

Ⅰ①層：明褐灰色（7.5YR 7/1）土で調査区南側と南東部にみられ、層厚３～10㎝を測る。

Ⅰ②層：明黄褐色（2.5YR 7/6）土で調査区南東部を除く地域にみられ、層厚２～15㎝を測る。

Ⅱ層－灰褐色（7.5YR 5/2）土で調査区ほぼ全域にみられ、層厚２～30㎝を測る。調査壁の土層観察により、本層上面にて柱穴を確認した。遺物は、本層中より古代の土師器片や須恵器片が出土した。

Ⅲ層－暗褐色（7.5YR 3/3）を呈する粘質土で調査区ほぼ全域にみられ、層厚５～43㎝を測る。なお、本層は調査区北東部から南西部に向けて傾斜堆積をなす。調査壁の土層観察により、本層上面から竪穴住居や柱穴等が掘削されていることを確認した。遺物は、本層中より弥生土器や土師器、須恵器が出土した。

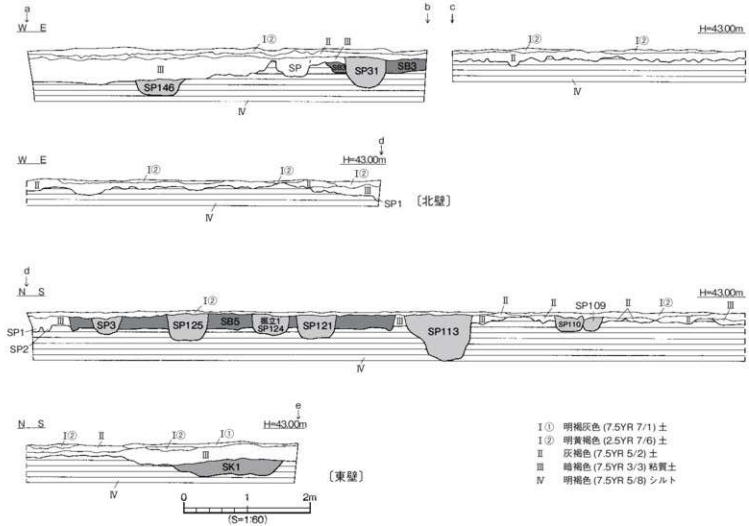
Ⅳ層－明褐色（7.5YR 5/8）を呈するシルト層で本層上面が調査における最終遺構検出面である。なお、調査壁の土層観察により第Ⅳ層上面にて検出した遺構は本来、本層中または本層上面から掘削された可能性が高いものばかりである。

検出した遺構や出土遺物より、Ⅱ層は古代、Ⅲ層は古墳時代までに堆積したものと推測される。なお、調査にあたり調査地内を５m四方のグリットに分けた。グリットは北から南へA・B・C・D・E、西から東へ１・２・・・４とし、A１・A２・・・・E４といったグリット名を付した。グリットは、遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。

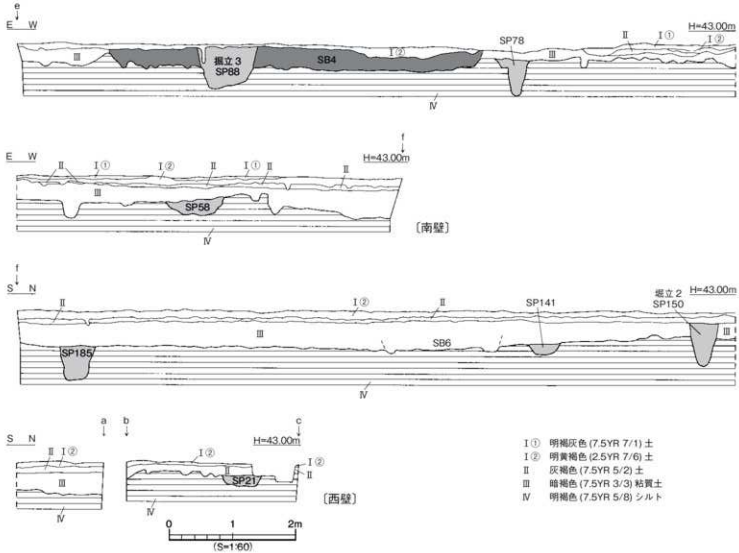
（2）検出遺構・遺物（第31図）

調査では、竪穴住居６棟〔ＳＢ１：古墳中期後半、ＳＢ２：古墳後期後半、ＳＢ３：弥生末、ＳＢ４:古墳後期後半以前、ＳＢ５:古墳中期後半以前、ＳＢ６:古墳後期後半以前〕、掘立柱建物３棟〔掘立１:古墳中期後半以降、掘立２:古墳後期中葉以降、掘立３:古墳後期末以降〕、土坑２基〔ＳＫ１・２：古墳以前〕、柱穴141基を検出した。

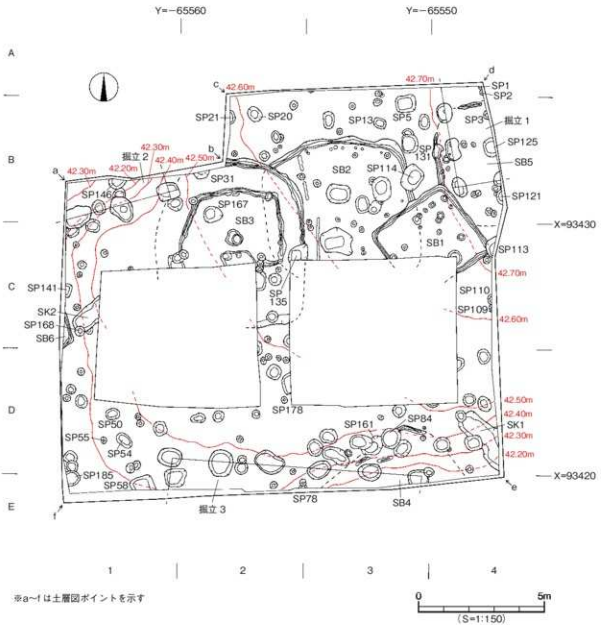
遺物は遺構や包含層及び重機掘削時に出土したもので、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）、瓦質土器、軟質土器、石器、鉄滓、ガラス玉である。なお、包含層中より完形の匙形土製品が１点出土している。遺物の出土量は、収納箱（44×60×14㎝）約10箱分である。



第 29 図　北壁・東壁土層図



第 30 図　南壁・西壁土層図


Y=−65560
Y=−65550
A
B
C
D
E
1
2
3
4
X=93430
X=93420
a
b
c
d
e
f
42.60m
42.70m
42.30m
42.20m
42.40m
42.50m
SP1
SP2
SP3
SP5
SP13
SP20
SP21
SP125
SP131
SB5
SB2
SP114
SP31
SP146
SP167
SB3
SP121
SB1
SP113
SP141
SP135
SP110
SP109
SK2
SP168
SB6
SP178
SP50
SP161
SP84
SK1
SP55
SP54
SP185
SP58
SP78
SB4
掘立 1
掘立 2
掘立 3
※a~f は土層図ポイントを示す
0
5m
(S=1:150)

第 31 図　遺構配置図

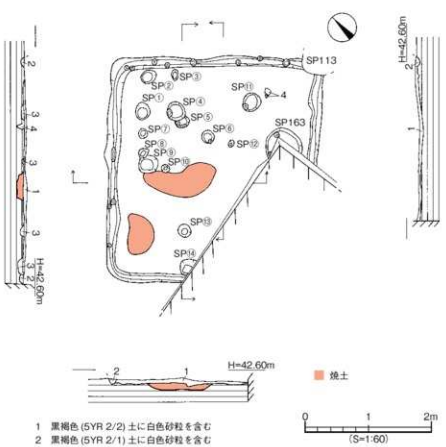
3．遺構と遺物

調査では、弥生時代から中世までの遺構と遺物を確認した。検出した遺構は、竪穴住居６棟（弥生時代～古墳時代）、掘立柱建物３棟（古墳時代）、土坑２基（古墳時代）、柱穴 141 基（掘立柱建物柱穴 20 基を含む）である。

（１）竪穴住居

ＳＢ１（第 32 図、図版 13）

調査区北東部Ｂ３～Ｃ４区に位置し、住居南東隅はＳＰ 113 に切られ、住居北西部はＳＢ２と重複し、住居南西側は調査区外へ続く。平面形態は方形を呈し、規模は南北長 3.54 m、東西長 3.40 m、壁高は６cmを測る。住居埋土は黒褐色土を基調とし、白色砂粒や明黄褐色シルトが部分的に混入するものである。内部施設は、周壁溝と柱穴を検出した。周壁溝は住居壁体に沿って全周し、幅 10 ～ 20 cm、深さ 4.5 ～ 15 cmを測る。溝内には径５～８cm、深さ３～５cm大の小ピットが点在しており、杭痕跡と考えられる。住居床面にて大小 14 基のピットを検出したが､主柱穴は特定できなかった。また、住居中央部と南西部の床面にて、焼土（厚さ３～ 10 cm）を検出した。遺物はＳＢ１埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が散在して出土した。

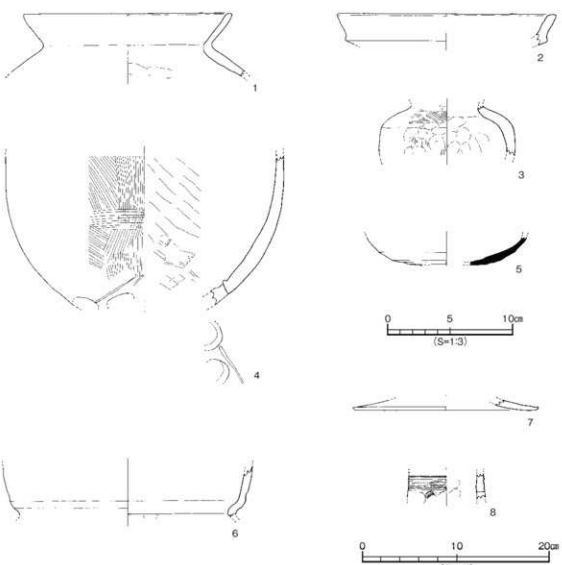


第 32 図　ＳＢ１測量図

出土遺物（第 33 図、図版 17）

1～4 は土師器である。1 は甕形土器で口縁部は内湾し、口縁端部はわずかに内傾する。2 は壺形土器の口縁部片で、口縁端部は平坦面をなす。3 は壺形土器の胴部片で、内外面共に指頭痕を顕著に残す。4 は甑形土器で、推定直径 2㎝を測る円孔 2 ケを看取する。また、胴下部には幅 1 ㎜程度の線刻がみられる。外面はハケメ調整、内面には板状工具によるナナメ方向のナデ調整を施す。5 は須恵器坏身片で、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。6～8 は弥生土器。6 は出雲系の鉢形土器で、色調は浅黄橙色を呈する。7 は脚付鉢の脚部片で、裾端部は尖り気味に仕上げる。8 は器台形土器の脚部片で、ヘラ描き沈線文 6 条と推定直径 1.5 ㎝大の円孔を穿つ。

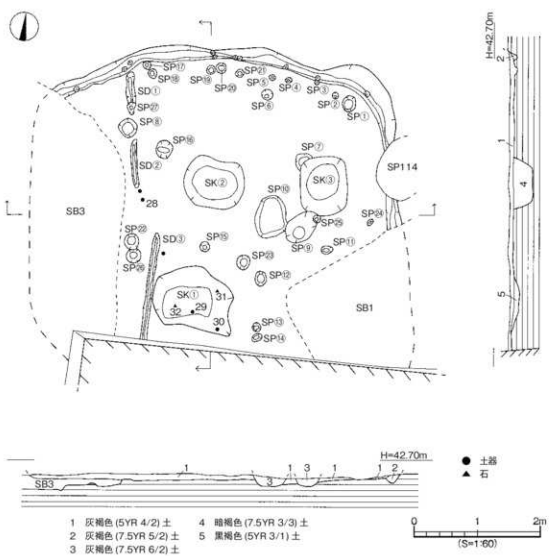
時期：出土した土師器・須恵器の特徴より、ＳＢ１の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、5 世紀後半とする。



第 33 図　ＳＢ１出土遺物実測図

ＳＢ２（第34図、図版14・15）

調査区北東部Ｂ２～Ｃ３区に位置し、住居西側はＳＢ３、南東部はＳＢ１と重複し、住居東側壁体はＳＰ114に切られ、住居南側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長5.52ｍ、南北検出長4.90ｍ、壁高は10㎝を測る。住居埋土は、灰褐色土である。内部施設は周壁溝や土坑、溝、小ピットを検出した。周壁溝は住居壁体に沿って検出され、幅10～40㎝、深さ７～22㎝を測り、埋土は住居埋土より色調の明るい灰褐色土である。土坑は、住居床面にて３基を検出した。ＳＫ①は不整楕円形を呈する土坑で、規模は長径1.46ｍ、短径0.85ｍ、深さ10㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑北半部壁体は緩やかに立ち上がる。土坑埋土は、黒褐色土単層である。ＳＫ②は楕円形土坑で、規模は長径0.96ｍ、短径0.77ｍ、深さ33㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。ＳＫ③は楕円形土坑で、規模は長径0.98ｍ、短径0.97ｍ、深さ29㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、土坑北半部壁体は緩やかに立ち上がる。土坑埋土は、ＳＫ②と同様の暗褐色土単層である。このほか、住居西側では南北方向の溝３条（ＳＤ



第34図　ＳＢ２測量図

①～③）を検出した。溝幅８～12㎝、深さ３～５㎝を測り、埋土は住居埋土と同様の灰褐色土である。これら３条の溝は、住居内を区画するための仕切り溝と推測される。

これらの遺構のほかに、住居床面にて大小26基のピットを検出した。このうち、ＳＰ⑨・⑩は断面観察より住居埋没後に掘削されたピットである。その他のピット埋土は、すべて住居埋土と同様の灰褐色土であるが、主柱穴を特定することはできなかった。

遺物は住居埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が混在して出土した。しかしながら、ＳＢ２はＳＢ１やＳＢ３と重複しており、弥生時代や古墳時代中期に時期比定される土器類は、本来ＳＢ１やＳＢ３に帰属する遺物と考えられる。住居床面検出のＳＫ①からは、弥生時代末に時期比定される土器（29・30）のほかに、砥石２点（31・32）が出土した。遺物の出土状況や埋土等から、ＳＫ①はＳＢ２構築以前の遺構と考えられる。また、ＳＫ②からは土師器椀（33）や弥生土器片、ＳＫ③からは須恵器坏身片（36）や弥生土器片が混在して出土した。出土遺物や検出状況から、ＳＫ②・③はＳＢ２に伴う可能性が高い遺構である。このほか、ＳＰ⑱からは須恵器坏身片（15）が出土している。

出土遺物（第35～37図、図版17）

１）ＳＢ２埋土出土品（９～28）

９～12は土師器。９・10は甕形土器で、９の口縁端部は内側に肥厚し、頸部に幅１㎜大の線刻を施す。胴部外面はハケメ調整、内面には指頭痕が顕著に残る。10の口縁部は内湾し、端部は丸く仕上げる。11は高坏形土器の脚部で、坏脚部の接合は指込技法による。外面にはタテ方向のヘラミガキを施し、色調は灰白色を呈する。12は甑形土器で口縁部はわずかに外反し、外面は粗いハケメ調整、内面はハケメ調整後ヨコ方向のヘラケズリを施す。13～16は須恵器。13は坏蓋で、断面三角形状の鋭い稜をもつ。14～16は坏身で、15のたちあがり端部は丸く仕上げる。なお、15の受部には焼成の際に付着した別個体の破片がみられる。

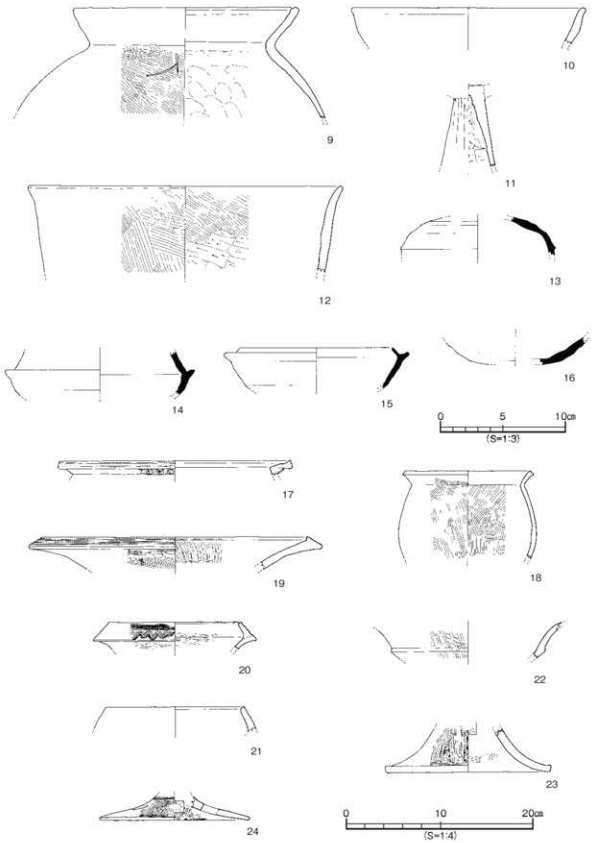
17～28は弥生土器。17・18は甕形土器で、17は口縁端面に凹線文２条、頸部には凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。18の口縁部は「く」の字状を呈し、内外面共にハケメ調整を施す。19～21は壺形土器。19は広口壺で口縁端面に凹線文４条を施し、口縁部内面には細かなヘラミガキを施す。20･21は複合口縁壺で口縁端部は内傾し、20は口縁部に櫛描き波状文を施す。22･23は高坏形土器で、23は径1.6㎝大の円孔を看取する。22・23共に、外面には丁寧なヘラミガキを施す。24は脚付鉢の脚部で、径1.7㎝大の円孔２ケを看取する。内外面には、丁寧なヘラミガキを施す。25は器台形土器の柱部片で、径1.7㎝大の円孔と櫛描き沈線文５条を施す。26は支脚形土器で受部上面は凹み、脚部は中空となる。27は甕形土器、28は鉢形土器の底部である。27は平底で、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。28は外面にハケメ調整、内面には板状工具によるナデ調整を施す。

２）ＳＫ①出土品（29～32）

29・30は弥生土器。29は広口壺の口縁部片で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。30は鉢形土器の底部で、底部外面には指頭痕が顕著に残る。31・32は砂岩製の砥石で31は１面の砥面をもち、側面は一部火を受けている。32は２面の砥面をもち、部分的に欠損している。

３）ＳＫ②出土品（33～35）

33は土師器の椀形土器で体部は内湾し、体部下半部から底部の外面には板状工具によるナデを施す。34･35は弥生土器の高坏形土器。34は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に櫛描き波状文を施す。35は口縁部が外反し、外面にはハケメ調整後にヘラミガキを加える。

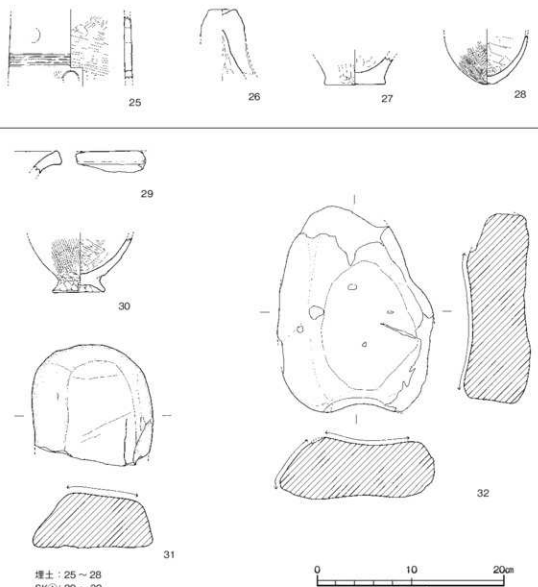


第35図　ＳＢ２出土遺物実測図（１）

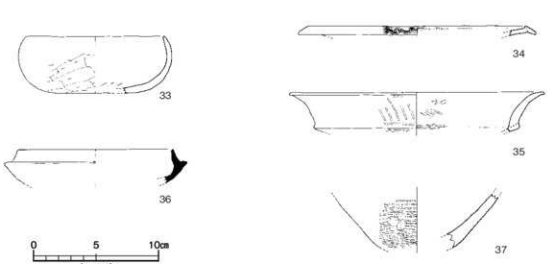
4）ＳＫ③出土品（36・37）

36 は須恵器坏身片で、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。37 は弥生土器の甕形土器で、外面に細かなタタキ調整を施す。

時期：出土した土師器や須恵器の特徴より、ＳＢ２の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、６世紀後半とする。



第 36 図　ＳＢ２出土遺物実測図（２）



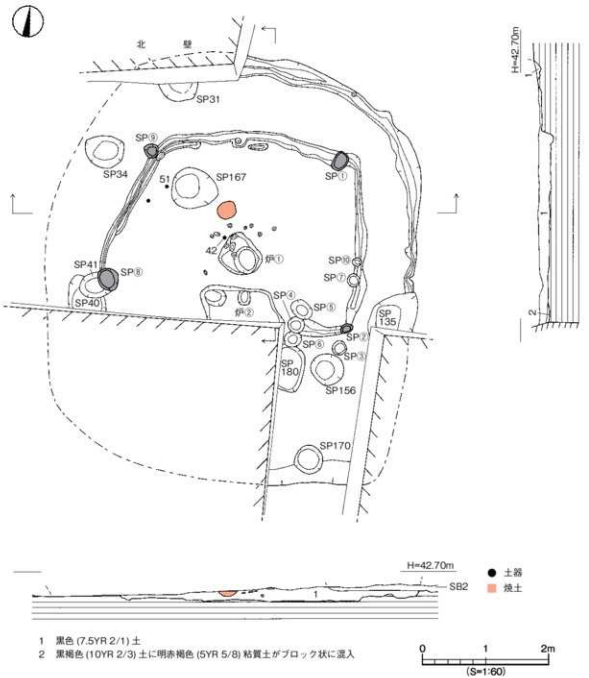
第37図　ＳＢ２出土遺物実測図（３）

ＳＢ３（第38～40図、図版15）

調査区中央部北側Ｂ１～Ｃ２区に位置し、住居東側はＳＰ135に切られ、住居南側や北側は調査区外に続き、西側壁体は消失している。調査壁の土層観察により、ＳＢ３上面は第Ⅲ層が覆う。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西長6.70ｍ、南北検出長5.70ｍ、壁高は26㎝を測る。住居埋土は、黒色土単層である。住居床面には段差がみられ、住居壁体より内側に幅0.8～1.0ｍ、高さ15㎝程度の高床部を付設している。なお、高床部の内側には幅10～25㎝、深さ５㎝程度の溝が二重に巡る。さらに、住居壁体沿いには幅10～40㎝、深さ８㎝程度の溝が巡っており、北側壁体付近には溝の重複する箇所が見られる。溝の検出状況より、ＳＢ３は建替えが施された住居と考えられる。

内部施設は、主柱穴と炉を検出した。主柱穴はＳＰ①・②・⑧・⑨の４本を検出した。柱穴は高床部内側に巡る溝の埋没後に掘削されており、柱穴掘り方埋土は黒褐色土である。柱穴規模は径16～38㎝、深さ28～48㎝を測る。なお、柱穴の配置から、本来は５本柱構造であったと思われる。

住居中央部にて、２基の炉を検出した。炉①は不整楕円形を呈し、規模は長径0.68ｍ、短径0.60ｍ、深さ24㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、二段掘り構造となっている。埋土は二種類あり、上層は暗褐色土に鈍い褐色砂や焼土、炭化物が混入するものであり、下層は黒褐色土である。炉基底面には径５～13㎝、深さ３㎝程度の小ピットが点在している。炉内からは径３～20㎝、厚さ２～６㎝大の円礫が数点出土したほか、土器片が少量出土した。なお、炉①周辺には径３～７㎝、深さ２～４㎝大の小ピットが点在している。炉②は不整長方形状を呈し、規模は東西長1.30ｍ、南北検出長0.53ｍ、深さ10㎝を測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土である。なお、埋土中には明赤褐色粘質土のブロックや炭化物のほか、径１～３㎝大の小礫が少量含まれている。炉基底面には２箇所で深さ３㎝程度の凹みを検出したが、埋土は炉埋土と同様の黒褐色土である。炉②からは、土器の出土はない。


北 壁
SP31
SP⑨
SP34
51
SP167
SP①
42
40
炉①
SP41
SP⑧
SP40
炉②
SP④
SP⑤
SP⑥
SP②
SP③
SP⑨
SP⑦
SP 135
SP 180
SP156
SP170
H=42.70m
1
2
H=42.70m
SB2
1
土器
焼土
1 黒色 (7.5YR 2/1) 土
2 黒褐色 (10YR 2/3) 土に明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土がブロック状に混入
0
1
2m
(S=1:60)

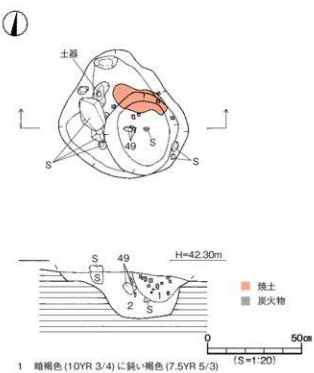
第 38 図　ＳＢ３測量図

このほか、住居床面にて15基の柱穴（ＳＰ③～⑦・⑩、ＳＰ31・34・40・41・135・156・167・170・180）を検出した。このうち、6基の柱穴（ＳＰ③～⑦・⑩）の埋土は黒褐色土であり、ＳＰ135は褐色土、その他の柱穴埋土は暗褐色土である。

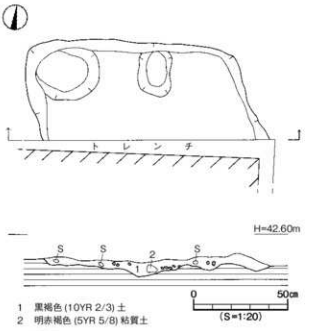
遺物は住居埋土中より弥生土器片や土師器片のほか、鉄滓やガラス小玉が出土した。また、ＳＰ⑦からは壺形土器の口縁部片（44）が出土している。なお、ＳＢ3はＳＢ2と重複していることから、ＳＢ3で取り上げた土師器や須恵器は本来、ＳＢ2に帰属する可能性が高い遺物である。

出土遺物（第41・42図、図版18）

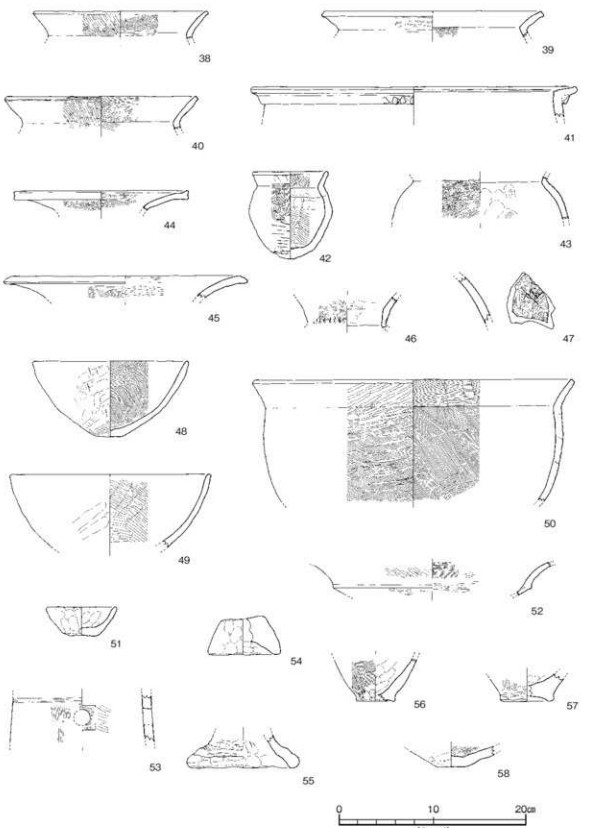
38～58は弥生土器。38～43は甕形土器で38～40は「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。41は逆「L」字状口縁で頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。42は小型品で胴下部外面にはタタキ調整がみられ、口縁部及び胴下部内面はヨコ方向のハケメ調整を施す。43は胴部片で、外面にヨコ方向の細かなタタキ調整がみられる。44～47は壺形土器。44・45は広口壺の口縁部で、内外面共にハケメ調整を施す。46は頸部片で、刺突文を1列施す。47は5×5㎝を測る肩部片で、ヘラ状工具による線刻がみられる（記号か）。48～51は鉢形土器。48・49は直口口縁で、口縁端部は丸く仕上げる。48の外面にはシワ状の凹みが多数みられ、底部は平底となる。内面にはハケメ調整を施し、底部内面には黒斑が残る。50は推定口径33.2㎝を測る大型品で口縁部は外反し、外面には粗いタタキ調整がみられ、内面は細かなハケメ調整を施す。なお、胴部内面には煤が付着している。51は完形の小型品で、口径7.3㎝、底径2.8㎝、器高3.0㎝を測る。色調は茶褐色を呈し、内外面には指頭痕が顕著に残る。52は高坏形土器の坏部小片で、外面はハケメ調整後にヘラミガキを施し、内面



第39図　ＳＢ3炉①測量図



第40図　ＳＢ3炉②測量図

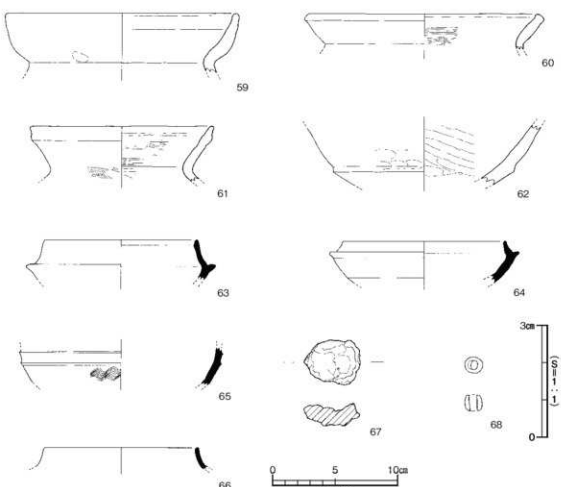


第 41 図　ＳＢ３出土遺物実測図（１）

はヨコ方向の細かなハケメ調整（14～15本／cm）を施す。53は器台形土器の柱部片で、沈線文2条と径1.7cm大の円孔を看取する。54･55は支脚形土器で、54は受部がやや凹み、外面には指頭痕が残る。55は脚部片で外面には工具痕、内面はシボリ痕を残す。56・57は甕形土器、58は鉢形土器の底部である。56・57は上げ底を呈し、58の内面にはクモの巣状のハケメ調整を施す。

59～62は土師器。59・60は甕形土器で口縁部は内湾し、59の口縁端部は内傾する面をもち60は内方にやや肥厚する。61は壺形土器で、口縁部外面に沈線状の凹みが巡る。色調は灰白色を呈する。62は高坏形土器の坏部で、器壁は厚い。63～66は須恵器。63・64は坏身片で63のたちあがり端部には沈線状の凹みが巡り、64はたちあがり端部を丸く仕上げる。65は無蓋高坏の坏部小片で、2条の凸線と波状文を施す。66は短頸壺の口縁部片で、口縁端部は丸く仕上げる。67は鉄滓で、重量25.04 gを測る。68はガラス製の小玉で、直径0.47 cm、厚さ0.42 cmを測り、色調は青緑色を呈する。

時期：住居埋土や炉①から出土した弥生土器の特徴より、ＳＢ３の廃棄・埋没時期は弥生時代末とする。



第42図　ＳＢ３出土遺物実測図（2）

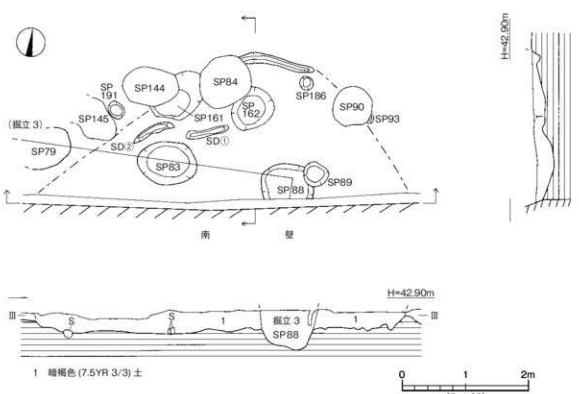
ＳＢ４（第43図）

調査区南東部Ｄ３～Ｅ４区に位置し、住居南側は調査区外に続く。平面精査では周壁溝の一部のみの検出であるが、調査壁の土層観察により竪穴住居と判断した。なお、ＳＢ４は掘立３（古墳後期末）に先行する遺構である。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.55ｍ、南北検出長3.35ｍ、壁高は13㎝を測る。住居埋土は、第Ⅲ層と同様の暗褐色土単層である。周壁溝は住居北側で検出され、幅10～15㎝、深さ８～10㎝を測り、埋土は住居埋土と同様の暗褐色土である。また、住居床面にて２条の溝（ＳＤ①・②）を検出した。規模は幅８～12㎝、深さ３～５㎝を測り、埋土は住居埋土と同様である。住居内からは、遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが掘立３に先行することから、概ね古墳時代後期後半、６世紀後半以前とする。

ＳＢ５（第44図、図版16）

調査区北東部Ｂ・Ｃ４区に位置し、住居東側は調査区外に続く。平面精査では周壁溝の一部のみの検出であるが、調査壁の土層観察により竪穴住居と判断した。なお、ＳＢ５は掘立１やＳＢ１に先行する遺構である。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長5.00ｍ、東西検出長2.50ｍ、壁高は３㎝を測る。住居埋土は、褐灰色土単層である。周壁溝は住居北西部で検出され、幅10～40㎝、深さ６～10㎝を測り、埋土は住居埋土と同様の褐灰色土である。住居床面にて大小



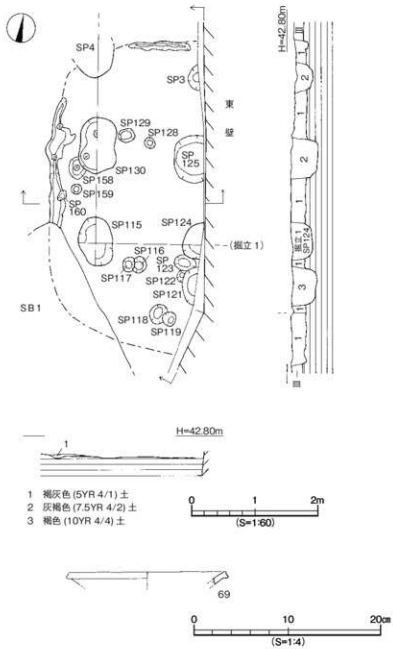
第43図　ＳＢ４測量図

10基の柱穴を検出したが、主柱穴は特定できなかった。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。図化しうるものを1点掲載した。

出土遺物（第44図）

69は弥生土器の甕形土器。口縁部の小片で、口縁端面はナデ凹む。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいがＳＢ１に先行することから、概ね古墳時代中期後半、5世紀後半以前とする。

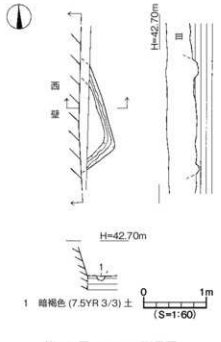


第44図　ＳＢ５測量図・出土遺物実測図

ＳＢ６（第 45 図）

調査区西側Ｃ・Ｄ１区に位置し、住居西側は調査区外に続く。平面精査では周壁溝のみの検出であるが、調査壁の土層観察により竪穴住居と判断した。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長 1.40 m、東西検出長 0.58 mを測る。住居埋土は、第Ⅲ層と同様の暗褐色土単層である。周壁溝は幅 10 ～ 15 cm、深さ６～ 10 cmを測り、埋土は住居埋土と同様の暗褐色土である。住居内からは、遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土や検出状況がＳＢ４と酷似することから、概ね古墳時代後期後半、６世紀後半以前とする。



第 45 図　ＳＢ６測量図

（２）掘立柱建物

掘立１（第 46 図、図版 16）

調査区北東部Ａ・Ｂ４区に位置し、建物東側は調査区外に続く。南北２間、東西１間以上の建物址で、４基の柱穴（ＳＰ４・115・124・130）で構成される。建物規模は南北検出長 3.70 m、東西検出長 1.98 m、柱穴間隔は 1.50 ～ 1.60 mである。建物を構成する各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、柱穴掘り方規模は径 30 ～ 90 cm、深さ５～ 20 cmを測る。柱穴掘り方埋土は、灰褐色土に白色砂粒が混入するものである。柱痕は２基の柱穴（ＳＰ４・130）で検出され、規模は径 10 ～ 17 cm、深さ 11 ～ 15 cmを測る。柱痕埋土は、柱穴掘り方埋土より色調の暗い灰褐色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より、少量の土師器片と須恵器片が出土した。

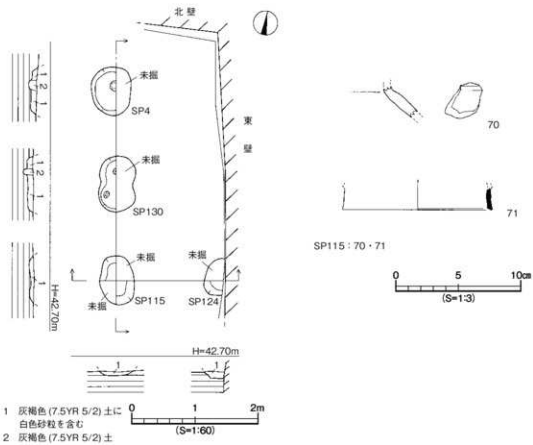
出土遺物（第 46 図）

70・71 はＳＰ 115 出土品。70 は土師器の甕形土器。肩部の小片で、頸部内面には明瞭な稜をもつ。71 は須恵器坏蓋の小片で、口縁端部は内傾する。

時期：出土遺物の特徴と検出状況などから、概ね古墳時代中期後半、５世紀後半以降とする。

掘立２（第 47 図、図版 16）

調査区北西部Ｂ１区に位置し、建物北側及び西側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、建物上面は第Ⅱ層が覆う。なお、各柱穴は全掘しておらず、未掘箇所がある。２間以上の建物址で、３基の柱穴（ＳＰ 33・148・150）で構成される。建物規模は東西長 4.68 m、柱穴間隔は 1.80 ～ 2.00 mである。建物を構成する各柱穴の平面形態は楕円形を呈し、柱穴掘り方規模は径 70 ～ 120 cm、深さ 20 ～ 55 cmを測る。柱穴掘り方埋土は、灰褐色土単層である。柱痕は２基の柱穴（ＳＰ 33・148）で検出され、規模は径 25 cm、深さ 33 ～ 55 cmを測る。柱痕埋土は、柱穴掘り方埋土より色調のやや暗い灰褐色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より少量の土師器片や須恵器片のほか、ＳＰ 33 からは



第46図　掘立1測量図・出土遺物実測図

ガラス小玉が1点出土した。

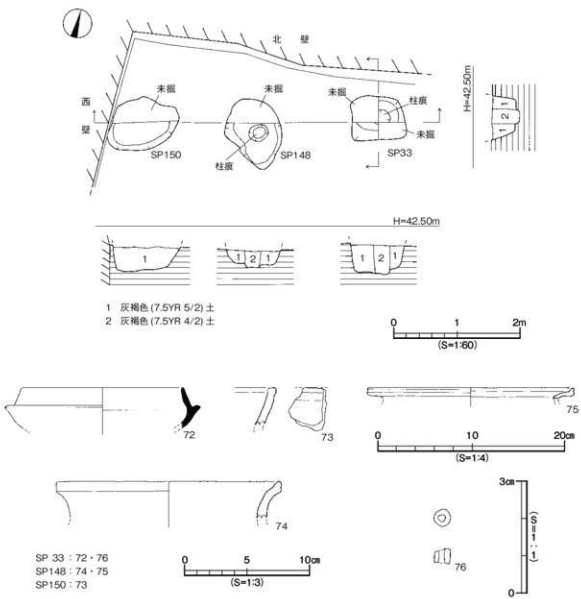
出土遺物（第47図、図版18）

72・76はＳＰ33、73はＳＰ150、74・75はＳＰ148出土品。72は須恵器坏身で、たちあがり端部は尖り気味に丸い。73は土師器の甕形土器で口縁部は内湾し、口縁端部は内側に肥厚する。74は瓦質の壺形土器で、口縁端部は上方にやや肥厚する。75は弥生土器の甕形土器で口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文1条を施す。76はガラス製の小玉で直径0.46㎝、厚さ0.40㎝を測り、色調は褐緑色を呈する。完存品。

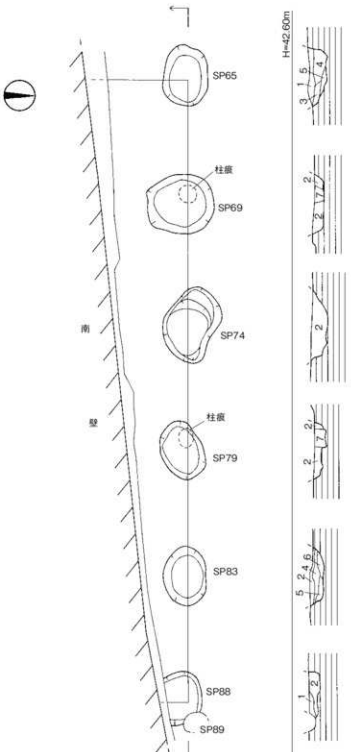
時期：出土した土師器や須恵器の特徴から、概ね古墳時代後期中葉、6世紀中葉以降とする。

掘立３（第 48 図、図版 16）

調査区南側Ｄ１～Ｅ３区に位置する。建物東側柱穴はＳＰ 89 に切られ、建物南側は調査区外に続く。５間以上の建物址で、６基の柱穴（ＳＰ 65・69・74・79・83・88）で構成される。建物規模は東西検出長 10.80 m、柱穴間隔は 2.00 mである。建物を構成する各柱穴の平面形態は円形を呈し、柱穴掘り方規模は径 55 ～ 117 ㎝、深さ 10 ～ 30 ㎝を測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色土を基調とし、黄色土ブロックや白色砂粒が混入するものである。柱痕は２基の柱穴（ＳＰ 69・79）で検出され、規模は径 15 ～ 30 ㎝、深さ 15 ～ 17 ㎝を測る。柱痕埋土は、暗褐色土単層である。遺物は柱穴掘り方埋土中より、少量の弥生土器片や土師器片、須恵器片のほか、ＳＰ 79 からは軟質土器片が１点出土した。



第 47 図　掘立２測量図・出土遺物実測図



1 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土〔黄色ブロックが極めて多含〕
2 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土
3 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土〔褐色傾向〕
4 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土〔黄色ブロックが多含〕
5 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土〔白色砂粒が多含〕
6 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土
7 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土〔黄色ブロックを含まず、暗色傾向〕(柱痕)

第 48 図　掘立 3 測量図

出土遺物（第 49 図、図版 19）

77 はＳＰ 74、78・79 はＳＰ 65、80 はＳＰ 79、81 はＳＰ 69 出土品。77 は土師器の甕形土器で口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。78・79 は須恵器坏身片で、78 のたちあがり端部は尖り気味に仕上げる。80 は軟質土器。甕形土器の胴部片で、一辺 1.0 ～ 1.5 ㎜大の格子目叩きを施す。色調は内外面共に黄褐色を呈し、器壁は厚さ 5 ㎜を測る。81 は弥生土器の壺形土器で、口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文３条を施す。

時期：出土した土師器や須恵器の特徴から、概ね古墳時代後期末、７世紀前半以降とする。

（3）土　坑

ＳＫ１（第 50 図）

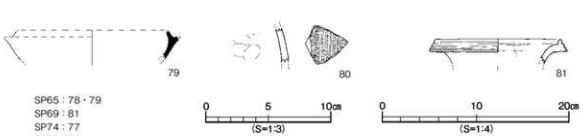
調査区南東隅Ｄ４区に位置し、土坑北側は２基の柱穴（ＳＰ 97・98）に切られ、東側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅲ層が覆う。平面形態は長楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西長 1.22 m、南北検出長 2.38 m、深さ 38 ㎝を測る。ＳＫ１基底面は平坦で、断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色シルト単層である。遺物は、埋土中より弥生土器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定をしうる遺物の出土はないが第Ⅲ層が覆うことから、概ね古墳時代以前とする。

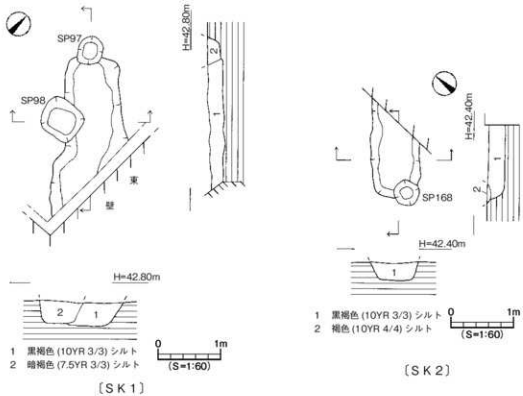
ＳＫ２（第 50 図）

調査区北東部Ｃ１区に位置し、土坑西側は柱穴ＳＰ 168 に切られ、東側は調査区外へ続く。調査壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅲ層が覆う。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北長 0.80 m、東西検出長 1.56 m、深さ 28 ㎝を測る。ＳＫ２基底面は平坦で、断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色シルト単層である。遺物は土坑底面中央部にて径 20 ㎝大の礫が出土したほか、埋土中より少量の土師器片と須恵器片とが出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが第Ⅲ層が覆うことから、概ね古墳時代以前とする。



第 49 図　掘立３出土遺物実測図



第50図　SK1・2測量図

（4）その他の遺構と遺物

調査では、遺構内及び掘立柱建物柱穴を含む141基の柱穴を検出した。このほか、包含層掘り下げ時や重機掘削時に遺物が出土した。なお、重機掘削時の出土品は層位や地点が不明であるため、ここでは「地点不明出土遺物」として実測図を掲載する。

1）柱　穴

調査で検出した141基の柱穴は、埋土で分類すると以下の六種類（A類～F類）である。

A類：灰色土……10基（土師器）
B類：褐色土……23基（弥生土器・須恵器・土師器・石器）
C類：灰褐色土……12基（弥生土器・土師器・須恵器）
D類：暗褐色土……57基（弥生土器・土師器・須恵器・石器・焼土・炭化物）
E類：暗褐色土（黄色土混）……16基（弥生土器・土師器）
F類：黒色土……23基（弥生土器・石器）

上記の柱穴のうち、B類の柱穴7基（SP84・113・114・121・135・168・178）、D類の柱穴3基（SP55・131・167）、E類の柱穴7基（SP5・50・54・161）、F類の柱穴2基（SP13・20）から出土した遺物を20点掲載した。

出土遺物（第 51・52 図、図版 19）

82 ～ 101 は、以下の柱穴出土品である（82：ＳＰ 113、83・92：ＳＰ 114、84：ＳＰ 161、85：ＳＰ 50、86・90・97：ＳＰ５、87：ＳＰ 168、88：ＳＰ 54、89：ＳＰ 121、91：ＳＰ 178、93：ＳＰ 167、94：ＳＰ 84、95・100：ＳＰ 131、96：ＳＰ 135、98：ＳＰ 20、99：ＳＰ 13、101：ＳＰ 55）。

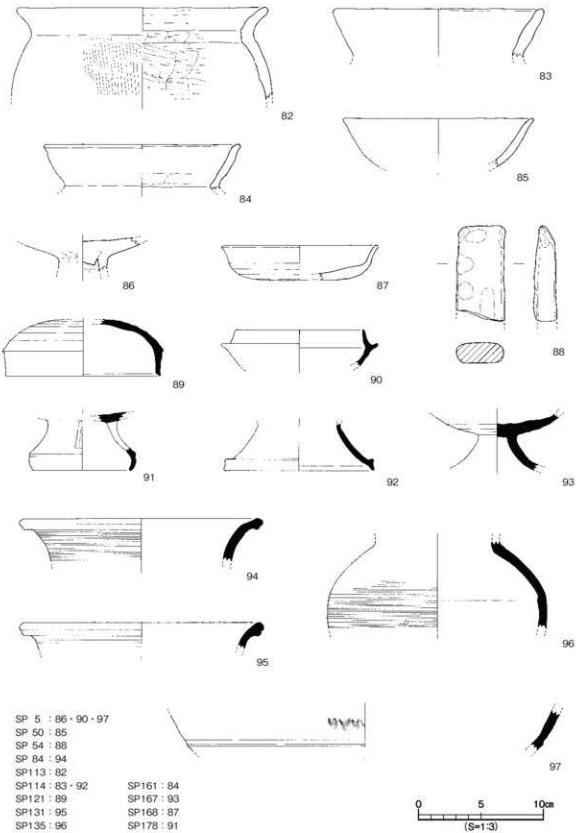
82 ～ 88 は土師器。82 ～ 84 は甕形土器で 82 は口縁部が外反し、胴部外面はタテ方向のハケメ調整、内面にはヨコ方向のヘラケズリを施す。83・84 は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する丸みのある面をもつ。85・86 は高坏形土器。85 は坏部の小片で、口縁部はやや外反する。86 の坏脚部の接合方法は、充填技法による。５世紀。87 は坏で口縁部はやや外反し、底部は平底となる。体部下半部から底部にかけての外面には回転ヘラケズリを施し、色調は内外面共に乳褐色を呈する。８世紀。88 は器種不明の把手部で、断面形態は長方形状を呈する。13 ～ 14 世紀。89 ～ 97 は須恵器。89 は坏蓋で断面三角形状の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する面をなす。５世紀後半。90 は坏身片で、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。６世紀後半。91 ～ 93 は高坏で、91 は長方形状の透かしを看取する。５世紀後半。92 は脚裾部を上下方に拡張し、端面は凹む。６世紀前半。94 ～ 96 は壺で 94 の口縁部は肥厚し、頸部に回転カキメ調整を施す。95 の口縁部は珠玉状を呈し、口縁端面に沈線が巡る。96 は短頸壺の肩胴部片で、胴部外面には平行叩き後に回転カキメ調整を施す。６世紀。97 は器台の坏部で、凸線と波状文を施す。５世紀後半。98 ～ 101 は弥生土器。98・99 は甕形土器。98 は口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文２条を施す。弥生中期後半。99 は底部で突出する上げ底を呈し、底部内面に黒斑を残す。弥生後期。100 は壺形土器の底部で、厚みのある平底となる。弥生後期。101 は支脚形土器で、欠損しているが角状突起２ケと羽根状の突起１ケをもつ。外面には、全面にタタキ調整を施す。弥生末。

２）包含層出土遺物（第 53・54 図、図版 19・20）

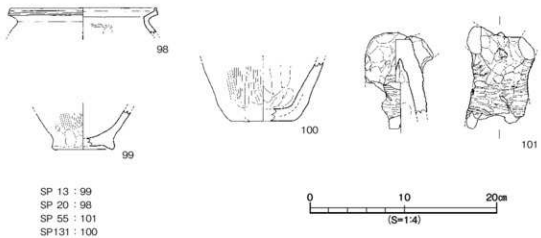
102 ～ 105 は壺形土器。102 は長頸壺の口頸部片で、口縁部内面に凸帯を貼付ける。弥生前期末。103 は肩部片で凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。弥生後期。104・105 は同一個体で、胴部最大径 48.6 ㎝を測る。外面にはタテ方向のヘラミガキ、内面はハケメ調整を施す。弥生後期。106 は器台形土器の柱部片で櫛描き沈線文と波状文を施し、径 1.6 ㎝大の円孔を穿つ。弥生後期。107 はほぼ完形の匙形土製品で、長さ 9.7 ㎝、幅 7.7 ㎝、厚さ 1.1 ㎝を測る。内面には指頭痕が顕著に残り、外面には黒斑が残る。

108・109 は土師器坏で、108 の底部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。10 世紀。110 は甕形土器の口縁部片で、口縁端部は先細りする。７世紀。111・112 は壺形土器。111 は口縁部が肥厚し、口縁部外面がやや凹む。112 は二重口縁壺で、口縁端部は内傾する面をもつ。古墳前期。113・114 は甑形土器で、113 の口縁端部はナデにより凹む。114 は３ケの穿孔を看取し、中央部は径 3.4 ㎝大の円孔、他の２孔は楕円形孔と推測される。５世紀。

115 ～ 126 は須恵器。115 ～ 117 は坏蓋で、115 は断面三角形状の丸みのある稜をもち、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。６世紀中葉。116・117 はかえり端部が尖り、117 の天井部外面１／３の範囲には回転ヘラケズリ調整を施す。７世紀後半。118 ～ 120 は坏身で、118 のたちあがり端部は内傾する凹面をなす。５世紀後半。119 は２／３の残存で、たちあがり径 12.0 ㎝、器高 5.1 ㎝を測る。たちあがり端部は丸く仕上げ、底部外面１／３の範囲には回転ヘラケズリ調整を施す。胎土中には石



第 51 図　柱穴出土遺物実測図（1）

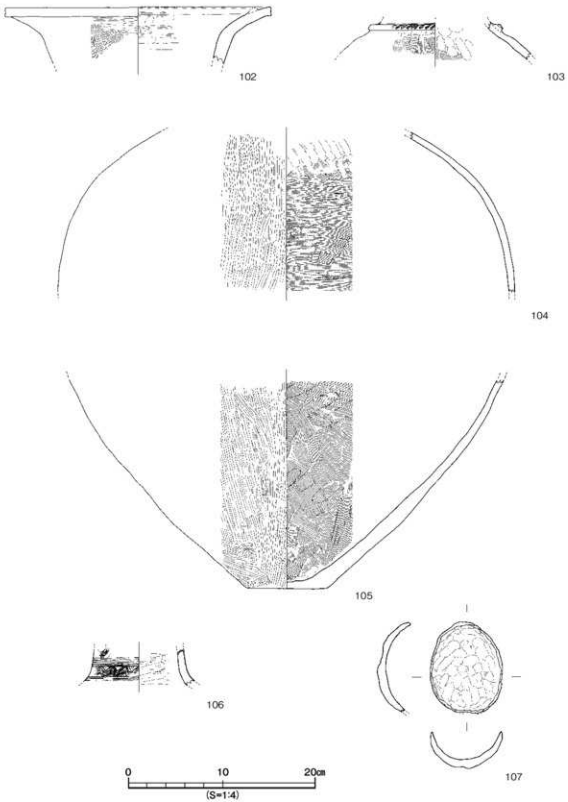


第 52 図　柱穴出土遺物実測図（2）

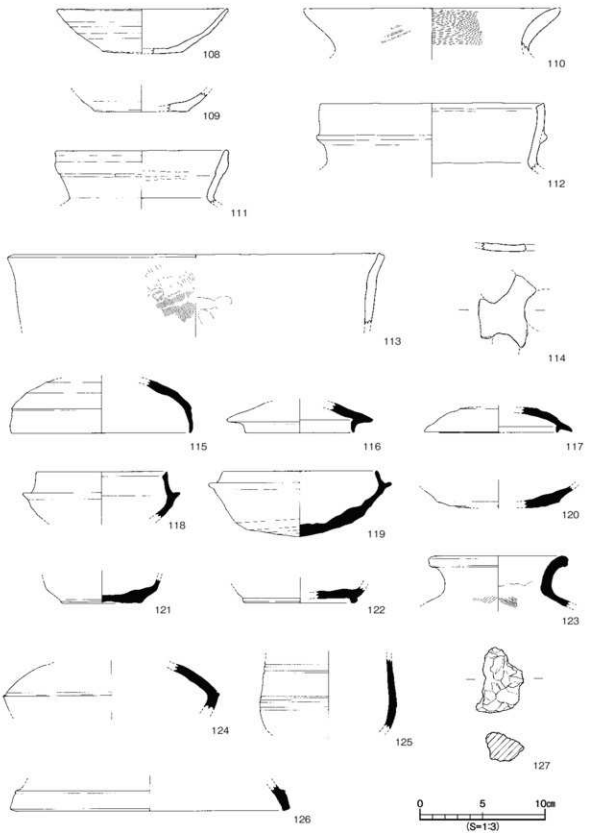
英や長石が数多く含まれ、色調は褐灰色を呈する。土師質土器。6 世紀後半。120 の底部外面には、回転ヘラケズリ調整がみられる。6 世紀。121 は坏の底部片で、底部外面には回転ヘラ切り痕を残す。10 世紀。122 は高台の付く坏で、高台は体底部境界付近に付き、内外面には回転ナデ調整を施す。8 世紀。123 は広口壺で、口縁端部は珠玉状に仕上げる。6 世紀後半。124 は長頸壺で、肩胴部境界に 1 条の沈線が巡る。7 世紀。125 は椀の体部片で、体部上下位には沈線が巡る。7 世紀。126 は器台の脚裾部小片で、端部は「コ」字状を呈する。6 世紀。127 は鉄滓で、重量 49.53 g を測る。

3）地点不明出土遺物（第 55 図、図版 20）

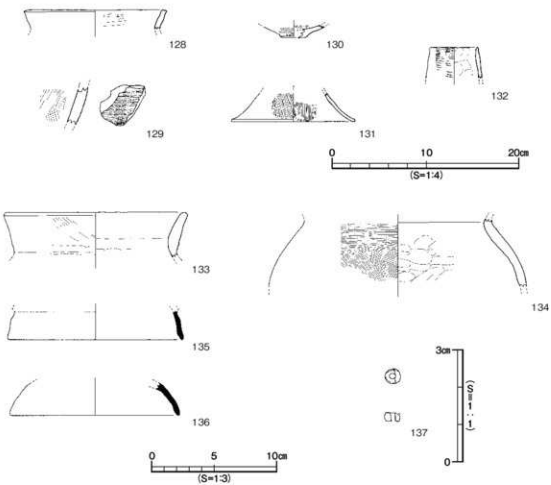
128・129 は弥生土器の甕形土器で、129 の外面にはタタキ調整を施す。弥生末。130 は鉢形土器の底部片で、突出する平底となる。弥生末。131 は高坏形土器の脚部片で、内外面には細かなヘラミガキを施す。弥生末。132 は製塩土器で、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。外面にはヨコ方向のタタキ調整がみられる。古墳前期。133・134 は土師器の甕形土器、135・136 は須恵器坏蓋で、135 は口縁端部が内傾する凹面をなす。6 世紀。137 はガラス製の小玉で、径 0.45 ㎝、厚さ 0.25 ㎝を測り、色調は黒色を呈する。



第 53 図　包含層出土遺物実測図（1）



第 54 図　包含層出土遺物実測図（2）



第 55 図　地点不明出土遺物実測図

4．まとめ

調査では、弥生時代から古代までの遺構や遺物を確認した。以下、時代別にまとめを行う。

弥生時代では、終末期の竪穴住居ＳＢ３を検出した。一辺 6.7 ｍを測る方形住居で、住居内には高床部と２基の炉を付設している。周壁溝は二重に巡り、一部は溝の重複する箇所がみられ、さらには住居の主柱穴が周壁溝埋没後に掘削されていることなどから、ＳＢ３は建て替えが施された住居と推測される。住居内からは弥生土器のほか、ガラス小玉や鉄滓が出土した。遺物では、遺構内や包含層中より弥生時代前期末から終末期の土器が出土した。このうち、包含層中資料ではあるが匙形土製品１点が含まれている。

古墳時代では、中期後半から終末期の遺構を検出した。ＳＢ１は一辺 3.5 ｍ前後を測る方形住居で、住居埋土中には焼土や炭化物が含まれており、出土した遺物も弥生土器や土師器などが混在していることから、ＳＢ１は人為的に埋め戻された住居と考えられる。なお、出土品よりＳＢ１の廃絶時期は古墳時代中期後半と考えられる。ＳＢ２は一辺 5.5 ｍ以上を測る方形住居で、住居床面には住居内の

間仕切りと思われる溝を検出した。ＳＢ２の廃絶時期は古墳時代後期後半、６世紀後半頃と推測される。このほか、３棟の竪穴住居（ＳＢ４～６）は周壁溝のみの検出であるが、廃絶時期は出土品よりＳＢ５は５世紀後半、ＳＢ４・６は６世紀後半以前と考えられる。掘立柱建物は１間×２間以上の建物（掘立１・２）と１間×６間以上の大型建物（掘立３）を検出した。出土品や切り合いより、各建物の構築時期は掘立１が５世紀後半、掘立２が６世紀中葉、掘立３が７世紀前半以降と考えられる。遺物では掘立３柱穴内より、格子目叩きを施した軟質土器片１点が出土している。

古代の遺構は未検出であるが、柱穴内や包含層、地点不明品の中に該期の遺物が含まれている。なかでも、平安時代に時期比定される土師器坏が柱穴や包含層中より出土しているほか、飛鳥時代から奈良時代に時期比定される須恵器片が包含層中に含まれている。

今回の調査では、主に古墳時代中期後半から終末期の遺構を数多く検出した。竪穴住居や掘立柱建物には重複関係が認められることから、調査地や周辺地域では当該期には継続的に集落が営まれていたことが容易に推測される。今後、檜味地区における弥生時代から古墳時代の集落様相や変遷を解明するうえで、今回の調査成果は貴重な資料となろう。また、古代においては明確な遺構は検出されなかったが、出土した遺物は調査地や周辺地域に古代集落の存在を示唆する資料といえよう。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）遺物観察表の各記載について。

法量欄　（　）：復元推定値

調整欄　土器の各部位名称を略記した。
例）口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、肩→肩部、胴→胴部、
体→体部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土、赤粒→赤色酸化土粒。
（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）石・長（１～４）→「１～４㎜大の石英・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表29　竪穴住居一覧

竪穴(SB)	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	内部施設	出土遺物	時　期	備　考
1	B3～C4	方形	3.54×3.40×0.06	黒褐色土 他	周壁溝	弥生・土師 須恵	5世紀後半	SB5を切る
2	B2～C3	隅丸方形	(5.52)×(4.90)×0.10	灰褐色土	土坑・周壁溝・ 溝	弥生・土師 須恵・石	6世紀後半	
3	B1～C2	隅丸方形	6.70×(5.70)×0.26	黒色土	主柱穴・周壁溝 炉・高床部	弥生・土師 須恵・鉄・玉	弥生末	
4	D3～E4	隅丸方形	(4.55)×(3.35)×0.13	暗褐色土	周壁溝・溝		6世紀後半以前	掘立3に切られる
5	B·C4	隅丸方形	(5.00)×(2.50)×0.03	褐灰色土	周壁溝	弥生	5世紀後半以前	SB1に切られる
6	C·D1	隅丸方形	(1.40)×(0.58)×0.10	暗褐色土	周壁溝		6世紀後半以前	

表30　掘立柱建物一覧

掘立	地　区	方　位	規　模	桁行長 (m)	梁行長 (m)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	A·B4	南北	1×2間以上	(3.70)	(1.98)	灰褐色土 (白色砂粒混)	土師・須恵	5世紀後半以降	SB5を切る
2	B1	東西	1×2間以上	(4.68)	(1.30)	灰褐色土	弥生・土師 須恵・玉	6世紀中葉以降	
3	D1～E3	東西	1×5間以上	(10.80)	(1.60)	暗褐色土	弥生・土師 須恵・軟質	7世紀前半以降	

表31　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	D4	長楕円形	逆台形状	(2.38)×1.22×0.38	黒褐色シルト	弥生	古墳時代以前	
2	C1	長方形	逆台形状	(1.56)×0.80×0.28	黒褐色シルト	土師・須恵	古墳時代以前	

表32　柱穴一覧　（1）

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
1	A4	円形	(0.12)×(0.08)×0.10	暗褐色土		
2	A4	円形	0.14×(0.12)×0.11	暗褐色土		
3	B4	楕円形	(0.39)×(0.16)×0.07	灰褐色土		
4	B4	楕円形	0.76×0.64×0.13	灰褐色土	土師	掘立1
5	A·B3	方形	0.71×0.62×0.46	暗褐色土（黄色土混）	弥生・土師	
6	A3	円形	0.24×(0.20)×0.05	灰色土		
7	A·B3	不整円形	0.18×(0.14)×0.13	暗褐色土		
8			欠　番			
9			欠　番			
10			欠　番			
11	B3	不整円形	0.34×0.28×0.10	暗褐色土		
12			欠　番			
13	B3	方形	0.48×0.47×0.32	黒色土		
14	B3	円形	0.28×0.27×0.24	暗褐色土		
15	B3	円形	0.24×0.23×0.03	灰色土		
16	B3	不整楕円形	0.64×0.38×0.20	暗褐色土（黄色土混）	弥生・土師	
17			欠　番			
18	B2	円形	0.32×0.30×0.30	暗褐色土		
19			欠　番			
20	B2	不定形	0.56×0.56×0.67	黒色土	弥生	
21	B2	円形	(0.54)×(0.19)×0.19	黒色土		
22	B2	円形	0.22×0.21×0.10	灰色土		
23			欠　番			
24			欠　番			
25	B2	円形	0.52×(0.26)×0.11	暗褐色土		
26	B2	楕円形	0.36×0.22×0.13	暗褐色土（黄色土混）		
27	B2	円形	0.42×0.41×0.14	暗褐色土		
28	B2	円形	0.17×0.17×0.05	暗褐色土		
29	B2	楕円形	0.20×0.15×0.08	暗褐色土		
30			欠　番			
31	B2	円形	(0.60)×(0.30)×0.22	灰色土		

柱穴一覧 （2）

柱穴(SP)	地　区	平面形	掘　模 長径 × 短径 × 深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
32			欠　番			
33	B1･2	方形	0.80×0.78×0.55	灰褐色土	須恵･臼玉	掘立2
34	B1･2	円形	0.60×(0.47)×0.10	暗褐色土		
35			欠　番			
36	B･C1	円形	0.57×0.55×0.07	暗褐色土		
37			欠　番			
38	C1	円形	0.20×0.19×0.33	暗褐色土		
39	C1	円形	0.32×0.30×0.33	暗褐色土(黄色土混)		
40	C1･2	楕円形	0.60×(0.36)×0.14	暗褐色土		SE3床面検出
41	C1･2	楕円形	0.42×(0.28)×0.48	暗褐色土	弥生･土師	SE3床面検出
42	C1	円形	0.23×0.22×0.16	褐色土		
43	C1	円形	(0.33)×(0.24)×0.12	褐色土		
44			欠　番			
45			欠　番			
46	D1	円形	0.24×0.24×0.05	暗褐色土		
47	D1	円形	0.37×0.36×0.12	暗褐色土		
48	D1	楕円形	0.52×0.41×0.19	暗褐色土(黄色土混)		
49			欠　番			
50	D1	円形	0.54×0.52×0.16	暗褐色土(黄色土混)	土師	
51			欠　番			
52			欠　番			
53			欠　番			
54	D1	不整円形	0.64×0.44×0.19	暗褐色土(黄色土混)	土師	
55	D1	円形	0.22×0.21×0.31	暗褐色土	弥生	
56	D1	円形	(0.34)×0.30×0.10	褐色土		
57	D1	円形	0.31×(0.23)×0.09	黒色土		
58	D･E1	不定形	(0.92)×(0.57)×0.32	黒色土	弥生	
59			欠　番			
60	D1	円形	0.22×0.22×0.05	暗褐色土		
61	D1	円形	0.26×0.26×0.07	暗褐色土		
62			欠　番			
63			欠　番			
64	D1	円形	0.52×0.51×0.32	黒色土	弥生	
65	D1･2	楕円形	0.96×0.72×0.30	暗褐色土	土師･須恵	掘立3
66			欠　番			
67	D1～E2	不定形	0.88×0.76×0.16	暗褐色土		
68			欠　番			
69	D･E2	楕円形	1.06×0.94×0.23	暗褐色土	土師･須恵	掘立3
70	D4	円形	0.36×(0.23)×0.05	褐色土		
71	D4	円形	0.52×0.50×0.14	黒色土		
72			欠　番			
73			欠　番			
74	D4	楕円形	1.18×0.92×0.25	暗褐色土	土師	掘立3
75			欠　番			
76	D4	円形	0.18×0.18×0.11	暗褐色土		
77	E2･3	楕円形	(0.29)×0.21×0.36	暗褐色土	弥生･土師･須恵	
78	E2･3	楕円形	(0.22)×0.12×0.40	黒色土	弥生･石	
79	D･E3	楕円形	0.94×0.65×0.14	暗褐色土		掘立3
80			欠　番			
81			欠　番			
82			欠　番			
83	D･E3	楕円形	0.94×0.68×0.22	暗褐色土	土師･須恵	掘立3
84	D3	円形	0.87×0.86×0.28	褐色土	須恵	
85			欠　番			
86	D3	楕円形	0.22×0.16×0.14	黒色土		
87	D3	円形	0.48×0.46×0.16	暗褐色土		
88	D･E3	方形	0.81×(0.55)×0.19	暗褐色土	弥生･土師	掘立3
89	D3～E4	円形	0.41×0.39×0.13	黒色土		
90	D4	円形	0.64×0.62×0.19	暗褐色土	弥生	
91	D3	円形	0.10×0.10×0.19	黒色土		
92	D3･4	円形	(0.50)×(0.12)×0.29	暗褐色土	弥生･土師･石	
93	D4	円形	(0.08)×(0.08)×0.04	暗褐色土(黄色土混)		
94			欠　番			

柱穴一覧

（3）

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模 長径 × 短径 × 深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
95			欠　番			
96	D4	円形	0.32×0.31×0.18	暗褐色土（黄色土混）		
97	D4	円形	0.41×0.41×0.17	暗褐色土		
98	D4	円形	0.66×0.64×0.35	暗褐色土	弥生・土師・須恵	
99	D4	円形	0.50×0.46×0.26	褐色土	弥生・土師	
100			欠　番			
101	D4	不整楕円形	0.59×0.46×0.06	褐色土		
102			欠　番			
103			欠　番			
104			欠　番			
105			欠　番			
106	D4	円形	0.56×（0.26）×0.17	褐色土	土師	
107	C・D4	円形	0.58×0.54×0.23	褐色土	弥生・土師	
108			欠　番			
109	C4	円形	（0.28）×（0.09）×0.08	褐色土		
110	C4	円形	（0.40）×（0.12）×0.06	灰褐色土		
111			欠　番			
112	C4	円形	0.31×0.29×0.39	黒色土	弥生	
113	C4	楕円形	（0.72）×（0.33）×0.46	褐色土	弥生・土師・石	
114	B3	楕円形	1.04×0.85×0.45	褐色土	土師・須恵	
115	B4	楕円形	0.76×0.54×0.10	灰褐色土	弥生・土師・須恵	掘立1
116	B4	円形	0.22×0.21×0.22	黒色土		
117	B4	円形	0.26×（0.19）×0.04	暗褐色土		
118	B4	円形	0.32×0.30×0.08	暗褐色土		
119	B4	円形	0.22×（0.14）×0.04	灰色土		
120			欠　番			
121	B4	円形	0.60×（0.22）×0.19	褐色土	須恵	
122	B4	円形	（0.19）×（0.11）×0.03	暗褐色土		
123	B4	楕円形	0.35×0.24×0.06	暗褐色土		
124	B4	円形	0.51×（0.28）×0.11	灰褐色土	土師	掘立1
125	B4	円形	0.74×（0.50）×0.16	灰褐色土	土師・須恵	
126			欠　番			
127			欠　番			
128	B4	円形	0.18×0.18×0.06	褐色土		
129	B4	円形	0.25×0.24×0.26	灰色土	土師	
130	B4	楕円形	0.86×0.60×0.10	灰褐色土	須恵	掘立1
131	B3	方形	0.77×0.69×0.31	暗褐色土	弥生・土師	
132	B3	方形	0.60×0.58×0.18	褐色土		
133			欠　番			
134			欠　番			
135	C2・3	不定形	（0.72）×（0.54）×0.05	褐色土	須恵	
136			欠　番			
137	D2	不定形	0.40×0.38×0.12	灰色土		
138			欠　番			
139	D1	円形	0.33×0.31×0.09	褐色土		
140			欠　番			
141	C1	不定形	0.57×（0.34）×0.14	黒色土		
142	D3	不定形	0.70×0.60×0.08	暗褐色土		
143	D3	楕円形	0.71×0.59×0.11	暗褐色土（黄色土混）		
144	D3	楕円形	（0.88）×0.58×0.13	暗褐色土		
145	D3	不定形	1.21×0.65×0.14	暗褐色土		
146	B1	楕円形	0.71×（0.40）×0.18	褐色土		
147	B1	楕円形	0.48×（0.31）×0.19	暗褐色土		
148	B・C1	楕円形	1.16×0.92×0.28	灰褐色土	土師・須恵	掘立2
149			欠　番			
150	B・C1	不定形	（1.08）×1.01×0.44	灰褐色土	土師・須恵	掘立2
151			欠　番			
152	C1	円形	0.26×0.25×0.38	灰色土	土師	
153	C1	円形	（0.30）×（0.11）×0.10	灰色土		
154			欠　番			
155	D1	円形	0.48×（0.40）×0.30	黒色土	弥生・石	
156	C2	円形	0.51×0.50×0.28	暗褐色土	弥生・土師	SB3床面検出
157			欠　番			

柱穴一覧 （4）

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模 長径 × 短径 × 深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
158	B4	円形	0.34×0.32×0.08	黒色土		
159	B4	円形	0.16×0.16×0.07	黒色土		
160	B4	円形	0.15×0.14×0.06	黒色土		
161	D3	楕円形	(0.85)×(0.68)×0.06	暗褐色土（黄色土混）		
162	D3	円形	0.68×0.66×0.06	暗褐色土（黄色土混）		
163	C4	円形	(0.68)×(0.56)×0.06	暗褐色土		
164	B3	方形	0.98×0.97×0.29	暗褐色土	焼土	SB2内SK③に変更
165	B3	楕円形	0.96×0.77×0.33	暗褐色土	炭化物	SB2内SK③に変更
166	B3	楕円形	0.16×(0.11)×0.03	褐色土		
167	B2	円形	0.74×0.55×0.24	暗褐色土	弥生・土師	
168	C1	円形	(0.35)×(0.32)×0.09	褐色土		
169			欠　番			
170	C2	円形	0.45×0.43×0.11	暗褐色土		
171	C·D2	不定形	(0.54)×(0.16)×0.23	暗褐色土	弥生・土師	
172	C2	円形	0.23×0.21×0.31	暗褐色土	土師・頃恵・石	
173	C2	円形	(0.40)×(0.20)×0.19	灰褐色土		
174			欠　番			
175	D2	円形	0.27×0.22×0.07	灰褐色土		
176	D2	方形	(0.77)×(0.24)×0.10	灰色土		
177	D2	不定形	0.61×0.49×0.22	褐色土	土師	
178	D2	円形	0.22×0.20×0.09	褐色土	頃恵	
179			欠　番			
180	C2	楕円形	0.71×(0.37)×0.28	暗褐色土（黄色土混）	頃恵	SB3床面検出
181			欠　番			
182	D2	不定形	0.24×0.23×0.06	黒色土		
183	D2	不定形	0.20×0.18×0.03	黒色土		
184	D1	円形	(0.35)×0.34×0.13	暗褐色土（黄色土混）		
185	D·E1	楕円形	(0.61)×(0.58)×0.56	暗褐色土	弥生・土師・頃恵	
186	D3	不定形	0.23×0.21×0.11	暗褐色土（黄色土混）	土師	
187	B3	楕円形	(0.46)×(0.25)×0.14	暗褐色土		
188	C1	楕円形	(1.05)×0.78×0.25	暗褐色土	土師・頃恵	
189	D2	円形	0.31×0.30×0.24	暗褐色土（黄色土混）		
190	D2	円形	0.26×0.24×0.31	黒色土	弥生	
191	D3	円形	0.27×0.27×0.09	黒色土		
192	B1	不定形	0.56×0.45×0.20	褐色土	土師・頃恵	
193	D2	不定形	0.54×0.40×0.10	暗褐色土		
194	D2	円形	0.22×0.20×0.12	暗褐色土		
195	E2	円形	0.26×0.25×0.09	暗褐色土		
196	B3~C4	円形	(0.21)×(0.07)×0.10	黒色土		

表33　ＳＢ１出土遺物観察表　　土製品 （1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	栗	口径　(16.2) 残高　5.0	内湾口縁。口縁端部はわずかに内傾。	ヨコナデ マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石·長(1~2) 金 ○		
2	壺	口径　(17.0) 残高　2.4	二重口縁壺。口縁端部は平坦。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石·長(1~3) ○		
3	壺	残高　4.0	鐘球形の胴部。1/3の残存。	⑧ハケ(7本/cm) ⑧ハケ→ナデ	ナデ(マメツ)	にぶい赤褐色 長(1) にぶい黄橙色 ○			
4	甕	残高　11.8	径2.0cm大の孔2ヶ。底部外面に工具痕あり。	ハケ(6本/cm) 工具痕	ナデ 板ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石·長(1~2) 金 ◎		17
5	坏身	残高　2.2	底部片。1/4の残存。	回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
6	鉢	残高　5.4	出雲系有段鉢。	ヨコナデ	マメツ (ヨコナデ)	浅黄橙色 にぶい橙色	石·長(1~2) ○		17
7	鉢	底径　(19.1) 残高　1.1	脚付鉢。脚端部は先細り。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 橙色	石(1) ◎		

ＳＢ１出土遺物観察表　　土製品　　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
8	器台	残高　3.3	ヘラ描き沈線文6条＋波状文＋円孔（径1.5cm）。小片。	ヨコナデ	ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長(1) ◎		17

表34　ＳＢ２出土遺物観察表　　土製品　　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
9	甕	口径　(17.7) 残高　8.8	内湾口縁。口縁端部は内方へ肥厚。胴部外面にヘラ記号。	①ヨコナデ （マメツ） ⑩ハケ(5本/cm)	①ヨコナデ （マメツ） ⑩指頭痕	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ○		17
10	甕	口径　(18.2) 残高　2.8	内湾口縁。口縁端部は外方に肥厚。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2)金 ○		
11	高坏	残高　6.4	指込技法。	ミガキ →ヨコナデ	ナデ→ 横方向の板ナデ	灰白色 にぶい橙色	密 ◎		17
12	瓶	口径　(24.5) 残高　6.8	口縁部はわずかに外反。	ハケ (4～5本/cm)	①ハケ （4～5本/cm） ケズリ	灰白色 にぶい橙色	石・長(1)金 ◎	黒斑	17
13	坏蓋	残高　3.0	断面三角形状の鋭い稜。小片。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○		
14	坏身	残高　3.5	たちあがりは内傾し、端部は欠損。小片。	①回転ナデ ⑩回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
15	坏身	口径　(12.0) 残高　3.2	たちあがりは短(内傾。焼成時の剥離体片が付着。	①回転ナデ ⑩回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
16	坏身	残高　2.2	小片。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	乳白色 乳白色	密・赤粒 ○		
17	甕	口径　(24.4) 残高　1.5	凹線文2条＋刺目凸帯。凸帯上に布目押圧あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～4) ◎		
18	甕	口径　(13.2) 残高　9.3	「く」の字状口縁。	①ヨコナデ ⑩ハケ(5～6本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm)	灰白色 灰白色	石・長(1～2)金 ○	黒斑	
19	壺	口径　(27.6) 残高　3.4	広口壺。口縁端面に凹線文4条あり。	ヨコナデ ハケ (4～5本/cm)	ミガキ→ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) ◎		17
20	壺	口径　(14.1) 残高　2.9	複合口縁壺。櫛描き波状文6条＋4条。	ヨコナデ ハケ(6本/cm) →ナデ	工具ナデ ヨコナデ	浅黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	17
21	壺	口径　(14.5) 残高　2.7	複合口縁壺。小片。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～4) ○		
22	高坏	残高　3.8	口縁部は短(外反、口縁端部を欠損。	ミガキ	マメツ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 小粒 ○		
23	高坏	底径　(16.9) 残高　4.6	径1.6cm大の円孔を看取。	ハケ(12本/cm) →ミガキ ⑩⑪ヨコナデ	ハケ→ナデ ⑩⑪ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	17
24	鉢	底径　(15.4) 残高　2.3	脚付鉢。径1.7cm大の円孔2ヶを看取。	ミガキ ハケ→ミガキ ⑩⑪ヨコナデ	ハケ→ミガキ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ○		
25	器台	残高　6.8	沈線文5条＋円孔（径1.7cm）2ヶを看取。	マメツ ハケ→ナデ	ハケ(4本/cm) →ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) 赤粒 ○		
26	支脚	残高　6.8	中空。	ナデ	シボリ痕	灰茶色 茶色	石・長(1～2)金 ◎		
27	甕	底径　(6.4) 残高　3.0	平底。	ミガキ ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ○		

ＳＢ２出土遺物観察表　　土製品　　（２）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
28	鉢	底径 0.7 残高 5.1	小さな上げ底。	ハケ (7～8本/cm)	板ナデ ナデ	灰白色 灰黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
29	壺	残高 2.3	広口壺。小片。	ヨコナデ	マメツ	黒褐色 黒褐色	石・長(1～3) ◎	SK①	
30	鉢	底径 5.2 残高 5.7	くびれをもつ上げ底。底部外面に指頭痕顕著。	ハケ (4～5本/cm) ナデ	ハケ→ナデ	淡黄橙色 淡灰色	石・長(1～3) ◎	SK① 黒斑	
33	椀	口径 (10.8) 底径 (6.6) 器高 4.5	体部は内湾し、口縁端部は先細り。1/4の残存。	①ヨコナデ ②板ナデ	ナデ ヨコナデ	乳橙色 乳橙色	石・長(1～2)金 ◎	SK②	
34	高坏	口径 (23.0) 残高 1.0	口縁端面に櫛描き波状文5条あり。	ヨコナデ ハケ→ナデ	マメツ(ミガキ)	橙色 橙色	石・長(1～3) ○	SK②	
35	高坏	口径 (27.0) 残高 4.3	外反口縁。口縁端部は先細り。	ハケ→ヨコナデ →ミガキ	マメツ(ミガキ)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) ○	SK② 黒斑	
36	坏身	口径 (12.2) 残高 2.7	たちあがりは短く内傾。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SK③	
37	甕	残高 5.7	1/5の残存。	タタキ(マメツ)	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1～3) ◎	SK③	

表35　ＳＢ２出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
31	砥石	1/2	砂岩	12.8	12.8	5.8	1410.0	SK①	17
32	砥石	ほぼ完形	砂岩	21.8	16.5	6.6	3600.0	SK①	17

表36　ＳＢ３出土遺物観察表　　土製品　　（１）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
38	甕	口径 (18.2) 残高 3.0	「く」の字状口縁。	ミガキ →ヨコナデ	ハケ	にぶい橙色 橙色	石・長(1～2) ○		
39	甕	口径 (22.6) 残高 2.8	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」字状。	ハケ (8～10本/cm) →ヨコナデ	①ヨコナデ ハケ(8本/cm)	橙色 橙色	石・長(1～2)金 ○		
40	甕	口径 (19.8) 残高 3.7	「く」の字状口縁。口縁部中位にふくらみをもつ。	①②ヨコナデ ハケ(4本/cm)	ハケ(5本/cm)	橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○	黒斑	
41	甕	口径 (34.3) 残高 3.2	刻目凸帯。小片。	ヨコナデ	①②ヨコナデ ナデ	にぶい橙色 灰黄褐色	石・長(1～2) ◎		
42	甕	口径 (8.0) 底径 1.5 器高 9.3	小型品。1/2の残存。	①ナデ ハケ(10本/cm) タタキ	①ハケ(8本/cm) ナデ ハケ(5本/cm)	淡橙褐色 橙褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	18
43	甕	残高 4.4	胴部片。	タタキ→ハケ	指頭痕・ハケ (マメツ)	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) ○		
44	壺	口径 (18.2) 残高 2.1	広口壺。口縁端面はナデ凹む。	①②ヨコナデ ハケ(5本/cm) →ハケ(8本/cm)	①②ヨコナデ ハケ (5～6本/cm)	浅黄橙色 淡黄色	石・長(1) ◎	黒斑	
45	壺	口径 (24.0) 残高 2.3	広口壺。口縁端部は外傾。	①②ヨコナデ ハケ(4～5本/cm) (マメツ)	ハケ(3本/cm)	黒色 橙色	石・長(1～3) ○	黒斑	
46	壺	残高 3.4	刺突文あり。	ハケ(5本/cm) →ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡褐色	石・長(1～3)金 ◎		

ＳＢ３出土遺物観察表　　土製品　　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
47	壺	残高　5.0	ヘラ状工具による線刻（記号か）。	ハケ(16本/cm)	ヨコナデ	乳黄褐色 灰褐色	石・長(1～2)金 ◎		18
48	鉢	口径　(16.0) 底径　2.5 器高　8.0	直口口縁。小さな平底。	ナデ・板ナデ ◎ハケ→ナデ	ハケ (8～10本/cm) ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～3) ○	黒斑	18
49	鉢	口径　(20.9) 残高　7.8	直口口縁。1/3の残存。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケ (4～5本/cm)	明褐灰色 明褐灰色	石・長(1～3) ○		
50	鉢	口径　(33.2) 残高　13.0	外反口縁。口胴部境界に明瞭な稜あり。	①タタキ ③タタキ→ハケ (9～10本/cm)	ハケ (9～11本/cm) →ナデ	淡橙黄色 淡橙色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑 煤付着	18
51	鉢	口径　(7.3) 底径　2.8 器高　3.0	小型品。内外面に指頭痕が顕著に残る。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶色	石・長(1～4) ○	黒斑	18
52	高坏	残高　3.6	小片。	ハケ→ミガキ ◎ハケ→ナデ	ハケ (14～15本/cm) ◎工具ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
53	器台	残高　4.9	沈線文2条＋円孔（径1.7cm）1ヶ。	ハケ (6～7本/cm)	ハケ(3本/cm) (マメツ)	浅黄橙色 灰白色	石・長(1～3) ○		
54	支脚	受部径　4.6 底径　(8.6) 器高　4.1	中実。1/2の残存。	ナデ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1)金 ◎		18
55	支脚	底径　(10.0) 残高　3.6	外面に工具による押圧痕が顕著。	工具痕 ナデ	シボリ痕 ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
56	甕	底径　(4.0) 残高　4.7	わずかに上げ底。	ハケ (10～12本/cm) ナデ	ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		
57	甕	底径　(5.0) 残高　2.9	上げ底。	ハケ→ナデ	ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1～3) ◎		
58	鉢	底径　3.0 残高　2.2	平底。	板ナデ ナデ	ハケ(4本/cm) ナデ	にぶい橙色 灰白色	石・長(1～3) ◎		
59	甕	口径　(18.1) 残高　4.7	内湾口縁。口縁端部は内傾し、丸味のある面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3)金 ◎		
60	甕	口径　(17.8) 残高　2.7	内湾口縁。口縁端部は内方にわずかに肥厚。小片。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
61	壺	口径　(14.3) 残高　4.4	口縁部外面に沈線状の凹みが巡る。	マメツ ハケ(マメツ)	ハケ(5本/cm) (マメツ)	灰白色 灰白色	石・長(1～3) ○		18
62	高坏	残高　4.8	小片。	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1)金 ◎		
63	坏身	口径　(11.9) 残高　3.1	たちあがり端部に沈線状の凹みあり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
64	坏身	口径　(12.7) 残高　3.3	たちあがり端部は尖り気味。	回転ナデ ◎回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
65	高坏	残高　2.9	無蓋高坏。凸線2条＋波状文9条あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	密 ◎		
66	壺	口径　(12.1) 残高　1.7	短頸壺。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 37　ＳＢ３出土遺物観察表　　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考	図版
67	鉄滓	—	鉄	3.5	4.5	1.4	25.0		18

表 38　ＳＢ３出土遺物観察表　　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径（cm）	高さ（cm）	重さ（g）	備考	図版
68	小玉	完存	ガラス	青緑色	0.47	0.42	0.097		18

表 39　ＳＢ５出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
69	甕	口径 （16.3） 残高 1.4	「く」の字状口縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） ○		

表 40　掘立１出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
70	甕	残高 2.5	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石・長（1～2） ○	SP115	
71	坏蓋	口径 （11.7） 残高 1.7	口縁端部は内傾。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP115	

表 41　掘立２出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
72	坏身	口径 （12.7） 残高 3.3	たちあがり端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP33 自然釉	
73	甕	残高 3.0	内湾口縁。口縁端部は内方へ肥厚。	マメツ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○	SP150	
74	壺	口径 （17.5） 残高 2.9	瓦質土器。口縁端部は上方へわずかに肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	SP148	18
75	甕	口径 （21.4） 残高 1.2	口縁端部は上方へ拡張、口縁端面に凹線文１条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長（1） ○	SP148	

表 42　掘立２出土遺物観察表　　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径（cm）	高さ（cm）	重さ（g）	備考	図版
76	小玉	完存	ガラス	褐緑色	0.46	0.40	0.120	SP33	18

表 43　掘立３出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
77	甕	口径 （18.6） 残高 2.6	内湾口縁。口縁端部は内傾する丸味のある面をもつ。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ◎	SP74	
78	坏身	口径 （11.2） 残高 3.0	たちあがり端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP65	
79	坏身	残高 2.3	たちあがり端部は欠損。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP65	
80	甕	残高 2.7	軟質土器。1.0～1.5mm大の正格子目叩き。	正格子目叩き	ナデ	黄褐色 黄褐色	密 ◎	SP79	19
81	壺	口径 （13.2） 残高 2.6	広口壺。凹線文3条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長（1～2）金 ◎	SP69	

表44　柱穴出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
82	甕	口径 （19.8） 残高 7.3	外反口縁。口縁端部は丸い。	⑫ヨコナデ ハケ（3～4本/cm） →ナデ	⑫ハケ→ヨコナデ ケズリ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3）金 ○	SP113	19
83	甕	口径 （16.2） 残高 3.9	内湾口縁。口縁端部は内傾し、丸味のある面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～3） ◎	SP114	
84	甕	口径 （15.2） 残高 3.7	内湾口縁。口縁端部は内傾する丸味のある面をもつ。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○	SP161	19
85	高坏	口径 （15.0） 残高 3.8	口縁部はわずかに外反。	ヘメツ （ナデ）	ヘメツ （ナデ）	橙色 橙色	長（1） ○	SP50	
86	高坏	残高 2.5	坏脚部の接合は充填技法による。	ヘメツ （ナデ）	ヘメツ	橙色 橙色	石・長（1～2）赤粒 ○	SP5	
87	坏	口径 （12.3） 器高 2.7	外反口縁。底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。	ヨコナデ ⑩回転ヘラケズリ	ヨコナデ ナデ	乳褐色 乳褐色	密・金・赤粒 ◎	SP168	
88	器種不明品	長さ 7.5 幅 3.8 厚さ 1.6	把手部。断面丸味のある長方形状。	ナデ	—	黄橙色	石・長（1～2）金 赤粒 ◎	SP54 煤付着	19
89	坏蓋	口径 （12.2） 残高 4.4	断面三角形状の鍔い稜。口縁端部は内傾。	③回転ヘラケズリ ①回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP121	19
90	坏身	口径 （10.0） 残高 2.8	たちあがり端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	SP5	
91	高坏	底径 （7.6） 残高 4.5	3方向の長方形状透かしあり。	回転ナデ	⑨ナデ 回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP178	
92	高坏	底径 （11.8） 残高 3.7	脚裾部は上下方に拡張。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP114	
93	高坏	残高 4.5	1/3の残存。	⑨回転ヘラケズリ ⑩回転ナデ	⑨⑩ナデ ⑩回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP167	
94	壺	口径 （18.6） 残高 3.4	外反口縁。口縁端面に凹線状の凹みが巡る。	①回転ナデ カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP84	19
95	壺	口径 （18.5） 残高 2.1	広口壺。口縁部は珠玉状、口縁端面に沈線あり。	①回転ナデ カキメ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○	SP131	19
96	壺	残高 7.0	短頸壺。扁球形の胴部。	⑩回転ナデ ⑩平行叩き →カキメ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP135	
97	器台	残高 3.2	波状文6条以上＋凸線1条。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP5	
98	甕	口径 （15.4） 残高 2.8	口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文2条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ ヨコハケ？	橙色 橙色	石・長（1） ◎	SP20 煤付着	19
99	甕	底径 （6.1） 残高 4.1	突出部をもつ上げ底。	ハケ（4～5本/cm） ナデ・ヨコナデ	ナデ	淡灰茶色 灰茶色	石・長（1～4） ◎	SP13 黒斑	
100	壺	底径 （6.6） 残高 6.2	厚みのある平底。	ハケ（5本/cm） ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長（1～2）金 赤粒 ○	SP131 黒斑	
101	支脚	残高 10.8	角状突起2ヶ＋羽根状突起1ヶ。	ナデ タタキ	ナデ シボリ痕	橙褐色 橙褐色	石・長（1～3）金 ◎	SP55 黒斑	19

表 45　包含層出土遺物観察表　　土製品　　（1）

番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
102	壺	口径 残高	(28.0) 5.5	長頸壺。内面凸帯。	ハケ(3～4本/cm) ハケ(7～8本/cm)	マメツ(ハケ)	橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		
103	壺	残高	4.0	貼付凸帯。凸帯上に刻目あり。	ハケ (12～13本/cm)	ナデ ハケ (6～7本/cm)	橙色 灰白色	石・長(1～3) ◎		19
104	壺	残高	18.1	肩部片。	ハケ→ミガキ	㉖ハケ→ナデ ハケ (12～14本/cm)	茶褐色 黒色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
105	壺	底径 残高	(8.6) 22.2	平底。	ハケ→ミガキ	ハケ (12～14本/cm)	にぶい橙色 黒色	石・長(1～5) ◎	黒斑	
106	器台	残高	4.0	波状文4～5条+沈線文5条+波状文4～5条+沈線文3条。円孔（径1.6cm）1ヶ。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	灰白色 にぶい橙色	石・長(1) ◎		19
107	鹿形土製品	長さ 幅 厚さ	9.7 7.7 1.1	完形品。内外面に指頭痕が顕著。	ナデ	ナデ	淡黄茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	19
108	坏	口径 底径 器高	(13.4) (6.2) 3.5	底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。	ヨコナデ ⑥回転ヘラケズリ	ヨコナデ	橙黄色 橙褐黄色	長(1～2) ◎		20
109	坏	底径 残高	(7.2) 1.5	底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。1/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 灰白色	密 ○		
110	甕	口径 残高	(20.3) 3.4	外反口縁。口縁端部は先細り。	ハケ →ヨコナデ	ハケ (7～8本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	長(1)赤粒 ◎		
111	壺	口径 残高	(13.4) 4.2	口縁部は肥厚し、外面がやや凹む。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	淡黄橙色 淡黄橙色	密・赤粒 ○		20
112	壺	口径 残高	(17.6) 5.2	二重口縁壺。口縁端部は内傾する面をもつ。	マメツ (ヨコナデ)	マメツ	黄茶色 黄茶色	石・長(1～2) ◎		20
113	甑	口径 残高	(29.0) 5.6	口縁端部はナデにより凹む。小片。	ハケ→ヨコナデ ハケ(12本/cm)	ヨコナデ ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎		
114	甑	長さ 幅 厚さ	5.7 3.7 0.5	中央は円孔（径3.4cm）、周囲に楕円形孔あり。	マメツ(ナデ)	ナデ 工具ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1)金 ◎		
115	坏蓋	口径 残高	(14.1) 4.2	断面三角形状の丸味のある稜。口縁端部は尖り気味に丸い。	⑤回転ヘラケズリ ⑥回転ナデ	回転ナデ	灰色 オリーブ灰色	密 ○		
116	坏蓋	口径 残高	(8.6) 2.3	かえりは長く、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎	自然釉	20
117	坏蓋	口径 残高	(9.4) 1.9	かえりは短く、端部は尖る。	⑤回転ヘラケズリ ⑥回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	自然釉	20
118	坏身	口径 残高	(10.3) 3.7	たちあがり端部は内傾。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
119	坏身	口径 器高	(12.0) 5.1	たちあがり端部は丸い。2/3の残存。	⑥回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑥ナデ	褐灰色 オリーブ灰色	密 ◎		20
120	坏身	残高	1.7	小片。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	灰色 明オリーブ灰色	密 ◎		
121	坏	底径 残高	(6.4) 1.9	平底。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。	回転ナデ	回転ナデ ⑥ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		20
122	坏	底径 残高	(8.1) 1.3	直立気味の高台。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

包含層出土遺物観察表　　土製品　　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
123	壺	口径 (10.2) 残高 4.1	口縁端部は珠玉状。	①回転ナデ 平行叩き	①回転ナデ 円弧叩き	灰白色 灰白色	密 △		20
124	壺	残高 3.7	長頸壺。肩部の張りは強い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	自然釉	
125	椀	残高 5.4	沈線2条＋沈線3条。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	自然釉	20
126	器台	底径 (22.0) 残高 2.1	脚裾部は「コ」字状。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		20

表46　包含層出土遺物観察表　　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
127	鉄滓	—	鉄	5.1	3.7	2.3	49.5		20

表47　地点不明出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
128	甕	口径 (14.2) 残高 2.1	小片。	ナデ	ハケ ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1) ○		
129	甕	残高 4.0	小片。	タタキ→ハケ	ナデ （ハケ）	淡黄色 淡黄色	石・長(1～2) ○		
130	鉢	底径 (3.4) 残高 1.5	突出する平底。	ハケ （10～12本/cm） ヨコナデ	ミガキ	浅黄橙色 淡黄色	石・長(1) ○		
131	高坏	底径 (13.0) 残高 3.1	脚部片。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		
132	製塩土器	口径 (5.0) 残高 3.4	小片。	タタキ→ナデ （マメツ）	ヨコナデ ナデ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) ○		
133	甕	口径 (14.0) 残高 3.6	直立口縁。	ハケ→ヨコナデ	マメツ （ナデ）	橙色 橙色	石・長(1～2)金 ○		
134	甕	残高 5.4	胴部片。	ハケ （8～9本/cm）	ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		
135	坏蓋	口径 (13.8) 残高 2.3	口縁端部は内傾。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
136	坏蓋	口径 (13.2) 残高 2.6	口縁端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

表48　地点不明出土遺物観察表　　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径（cm）	法量 高さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
137	小玉	完存	ガラス	黒色	0.45	0.25	0.054		20

第５章　調査の成果と課題

本書に掲載した二遺跡の調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認することができた。ここでは、時代別の集落変遷を行うと共に、出土品について概観する。

１．集落変遷

（１）弥生時代

当該期の遺構は、弥生時代終末期に時期比定される２棟の竪穴住居である。樽味立添遺跡４次調査では平面形態が円形を呈する竪穴住居ＳＢ１を検出し、樽味高木遺跡15次調査では隅丸方形を呈する竪穴住居ＳＢ３を検出した。このうち、ＳＢ３の規模は一辺6.7ｍを測り、建て替えが施された住居である。ＳＢ３は高床部を付設しており、住居内には２基の炉を検出した。

遺物では遺構や包含層中より弥生時代前期から終末期の土器が出土しており、樽味高木遺跡15次調査では包含層資料であるが、匙形土製品（柄部を欠損）が出土している。

（２）古墳時代

古墳時代の遺構は、中期後半から終末期に時期比定されるものである。中期では樽味高木遺跡15次調査にて竪穴住居ＳＢ１とＳＢ５のほか、掘立柱建物（掘立１）を検出した。このうちＳＢ１は一辺3.5ｍ前後を測る方形住居で、出土遺物や埋土の堆積状況から人為的に埋め戻された住居と推測される。樽味地区で検出される古墳時代の住居には、故意に埋め戻された住居の検出事例は数多く報告されており、その中には臼玉を伴った祭祀儀礼が執り行われたと思われる事例も数多く含まれている。

後期では樽味立添遺跡４次調査において竪穴住居１棟と掘立柱建物２棟のほか、溝１条や土坑７基が検出されており、樽味高木遺跡15次調査からは竪穴住居３棟と掘立柱建物２棟が検出されている。

６世紀代では樽味立添遺跡４次調査にて竪穴住居１棟（ＳＢ２）と掘立柱建物２棟（掘立１・２）が検出され、樽味高木遺跡15次調査からは竪穴住居３棟（ＳＢ２・４・６）と掘立柱建物１棟（掘立２）が検出されている。このうち、樽味高木遺跡15次調査検出のＳＢ２は一辺5.5ｍを測る隅丸方形住居で、住居内を区画するための仕切り溝を検出した。なお、検出した竪穴住居の廃絶時期は、６世紀後半〔樽味立添遺跡４次調査：ＳＢ２、樽味高木遺跡15次調査：ＳＢ２〕と６世紀後半以前〔樽味高木遺跡15次調査：ＳＢ４・６〕である。また、掘立柱建物の構築時期は６世紀前半〔樽味立添遺跡４次調査：掘立１・２〕と６世紀中葉以降〔樽味高木遺跡15次調査：掘立２〕に分かれている。

７世紀代の遺構は、掘立柱建物と溝が検出されている。樽味高木遺跡15次調査検出の掘立３は１間×５間以上の比較的大型の建物で、柱穴出土品より構築時期は７世紀前半以降と推測される。樽味立添遺跡４次調査では７世紀前半の溝ＳＤ１のほか、７世紀初頭から前半に時期比定される５基の土坑を検出している。

古墳時代中期から後期の遺構は両遺跡で検出され、とりわけ樽味高木遺跡15次調査では竪穴住居や掘立柱建物が重複して存在していることから、当該期には調査地や近隣地域において集落経営がさかんに行われていたものと推測される。

（３）古　代

古代の遺構は、樽味立添遺跡４次調査にて自然流路を検出した。ＳＲ１は北東－南西方向に流れる

推定幅10ｍ以上を測る流路で、流路内には土砂や小礫、砂質シルトが堆積している。遺物は弥生時代後期の土器や古墳時代の土師器、須恵器、奈良時代から平安時代の土師器や須恵器、緑釉陶器、瓦のほか石器や鉄滓などが混在して出土した。検出層位や出土遺物より、ＳＲ１の最終埋没時期は平安時代中期、10世紀代と考えられる。なお、調査地南方にある樽味四反地遺跡１次調査では同時期の流路が検出され、流路内からは土師器や須恵器のほかに緑釉陶器や灰釉陶器が出土している。また、時期はやや異なるが、樽味四反地遺跡１次調査地の西方にある樽味四反地遺跡５次調査からは弥生時代から中世までの遺物が混在して出土した自然流路ＳＲ１が報告されている。なお、流路内からは円面硯をはじめ畿内産土師器や奈良三彩の壺のほか緑釉陶器などが出土している。

（4）中世～近世

中世から近世の遺構は未検出であるが、包含層や地点不明遺物の中に室町時代から江戸時代までの土師器や陶磁器の破片が少量ではあるが含まれている。これらの遺物は周辺地域に該期の遺構が存在することを示唆する資料といえよう。

2．出土品について

二遺跡の調査からは、検出事例の少ない遺物や特異な遺物が出土した。まず、弥生時代では樽味高木遺跡15次調査において匙形土製品が出土している。柄部は欠損しているが体部の完形品である。古墳時代では樽味立添遺跡４次調査において、包含層中より韓式系土器の甑が出土したほか、樽味高木遺跡15次調査からは、古墳時代の掘立柱建物内より軟質土器片が１点出土している。古代では樽味立添遺跡４次調査の自然流路内より、平安時代の緑釉陶器片や奈良時代の赤色塗彩土器が出土したほか、包含層中からは破損品であるが、平面形態が方形を呈する粘板岩製の石帯が１点出土した。石帯の出土は、樽味地区では初例となる。

樽味地区では、弥生時代末から古墳時代初頭の大型建物をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての集落関連遺構や遺物が数多く発見されており、該期の集落様相や変遷が解明されつつある。近年では、軟質土器や陶質土器の出土例が数多く報告されており、古墳時代における渡来系集団の存在が示唆されている。今回報告する樽味立添遺跡４次調査からも韓式系土器や軟質土器の出土が認められることから、今後さらなる調査・研究を進め、弥生時代から古墳時代における集落構造や変遷の解明が急務となろう。一方、樽味地区における古代の集落様相は不明な点が多く、現在までのところ解明されていない。とりわけ、樽味四反地遺跡１次調査や今回報告する樽味立添遺跡４調査の調査成果から判断すると、古代には数条の自然流路が存在したことや、流路出土品からは官衙や寺院に関連する施設が存在した可能性が高いと思われる。これまで、樽味地区内では該当する施設は検出されていないが、今後、樽味地区の集落様相や変遷を考えるうえで注意を要する時期でもあり、古代集落の解明は樽味地区の集落変遷や古地形復元における重要課題のひとつとなろう。

【参考文献】

梅木　謙一　1992　「樽味四反地遺跡」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第26集
高尾　和長　2002　『樽味四反地遺跡５次調査』松山市文化財調査報告書第87集

写　真　図　版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カ メ ラ	トヨフィールド45A	レ ン ズ	スーパーアンギュロン90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM 2		ズームニッコール28～85㎜他
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス		
	カラー　アスティア100 F		

2．遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒ネガフィルムを使用している。

使用機材：

カ メ ラ	トヨビュー45G
レ ン ズ	ジンマーS 240㎜F 5.6他
ス ト ロ ボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引 伸 機	ラッキー45MD・90MS
レ ン ズ	エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印 画 紙	イルフォードマルチグレードⅣ RC ペーパー

4．製　版：写真図版175線
印　刷：オフセット印刷
用　紙：マットコート76.5kg
製　本：アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol.1～20　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

1．調査前全景（北西より）

2．調査区完掘状況（南西より）

図版 2

1．西半部遺構検出状況（南東より）

2．東半部遺構検出状況（南西より）

1. 西半部遺構完掘状況（南より）

2. 東半部遺構完掘状況（南西より）

図版4

1．ＳＢ１・２完掘状況（東より）

2．掘立１完掘状況（南西より）

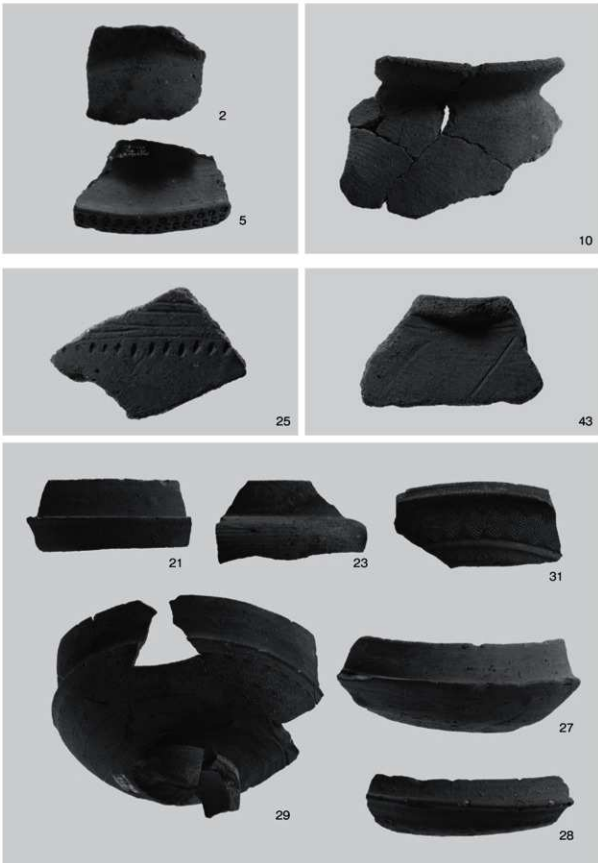
1. ＳＤ１完掘状況（北東より）

2. ＳＫ１遺物出土状況（南より）

図版 6

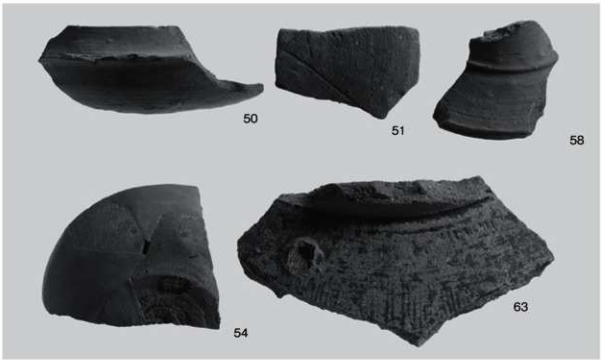
1．ＳＫ３遺物出土状況（北東より）

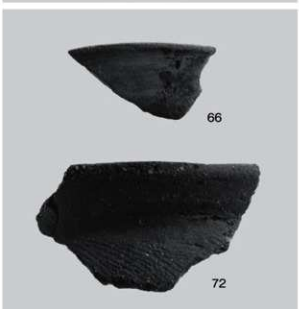
2．ＳＫ７完掘状況（東より）



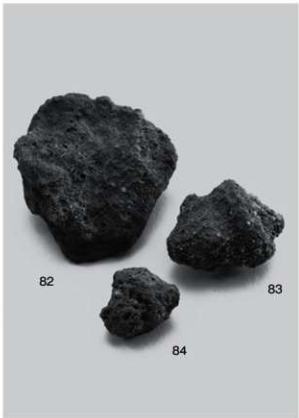
1．出土遺物〔ＳＢ１：2・5、ＳＢ２：10、ＳＤ１：21・23・25・27～29・31・43〕

図版 8



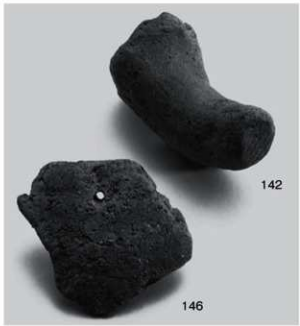


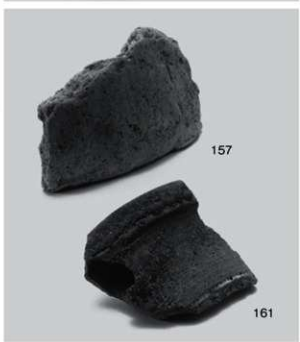
1．ＳＲ１出土遺物 (1)

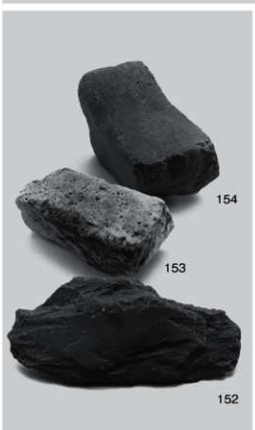


1．出土遺物〔ＳＲ 1(2)：80～84、ＳＫ 3：92・96・97、ＳＫ 7：103・107〕

図版10







1．出土遺物〔包含層：120・122・123・133・142・146・151～154、地点不明：157・161〕

1. 調査前全景（南西より）

2. 作業風景（東より）

図版 12

1．遺構検出状況 (1)（東より）

2．遺構検出状況 (2)（西より）

1．遺構完掘状況（東より）

2．ＳＢ１完掘状況（北東より）

図版 14

1. ＳＢ２検出状況（北より）

2. ＳＢ２完掘状況（東より）

1. ＳＢ２遺物出土状況（東より）

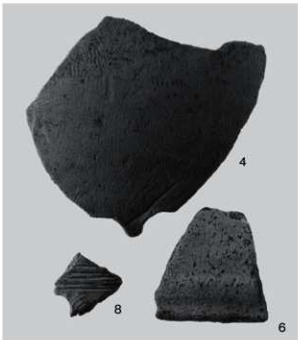
2. ＳＢ３完掘状況（北東より）

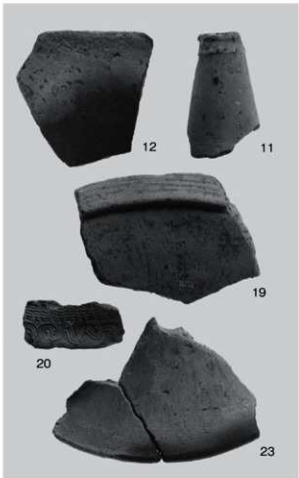
図版 16

1. ＳＢ５・掘立１完掘状況（東より）

2. 掘立２完掘状況（東より）

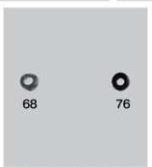
3. 掘立３完掘状況（東より）

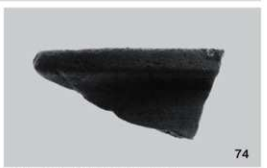




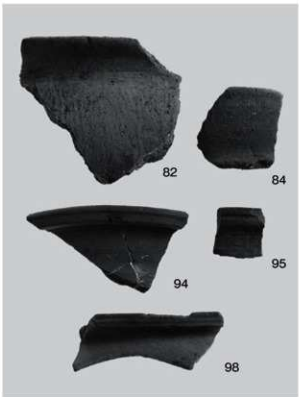
1. 出土遺物〔ＳＢ１：4・6・8、ＳＢ２：9・11・12・19・20・23・31・32〕

図版 18



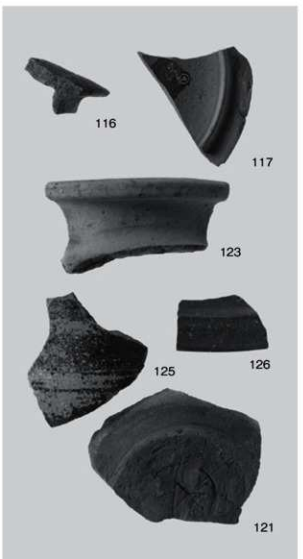


1．出土遺物〔ＳＢ３：42・47・48・50・51・54・61・67・68、掘立２：74・76〕



1. 出土遺物〔堀立 3：80、柱穴：82・84・88・89・94・95・98・101、包含層 (1)：103・106・107〕

図版 20



1．出土遺物〔包含層 (2)：108・111・112・116・117・119・121・123・125 ～ 127、地点不明：137〕

報告書抄録

ふりがな	たるみたちぜえいせき・たるみたかぎいせき
書名	樽味立添遺跡4次調査・樽味高木遺跡15次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第152集
編著者名	水本完児・宮内慎一・大西朋子
編集機関	松山市教育委員会 財団法人　松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790-0003　松山市三番町6丁目6－1　TEL 089-948-6605 埋　文：〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地6　TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦　2011年　3月　15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
樽味立添遺跡4次	樽味二丁目18番の一部	38201		33° 50′ 28″	132° 47′ 30″	20070109 ～ 20070208	約174.0	個人住宅建設
樽味高木遺跡15次	樽味二丁目90-2の一部	38201		33° 50′ 26″	132° 47′ 30″	20071204 ～ 20080131	169.5	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
樽味立添遺跡4次	集落	弥生時代 古墳時代 古代	竪穴住居 竪穴住居・掘立柱建物 自然流路	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、石器	検出事例の少ない古代の流路の検出
樽味高木遺跡15次	集落	弥生時代 古墳時代	竪穴住居 竪穴住居・掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、軟質土器、石器、ガラス玉	古墳時代中期から終末期の竪穴住居や掘立柱建物の検出

要約	樽味立添遺跡4次調査では平安時代の自然流路を検出し、流路内からは緑釉陶器や瓦等が出土したことから、樽味地区において古代の官衙や寺院に関連する施設の存在が伺われる。樽味高木遺跡15次調査では、主に古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物を検出した。検出した遺構には重複関係が数多く見られることから、樽味地区において古墳時代の集落経営がさかんに行われていたことを追従する結果となった。

松山市文化財調査報告書　第152集

樽味立添遺跡4次調査
樽味高木遺跡15次調査

平成23年3月31日　発行

編　集　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町6丁目6－1
TEL（089）948-6605

発　行　財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923-6363

印　刷　岡田印刷株式会社
〒790-0012　松山市湊町7丁目1－8
TEL（089）941-9111